イエス・キリスト／わが福音

１９８９年新年聖会（1月1日－5日）　全１５回の記録

〈講師〉　基督伝道隊戸畑教会・牧師　伊規須太郎

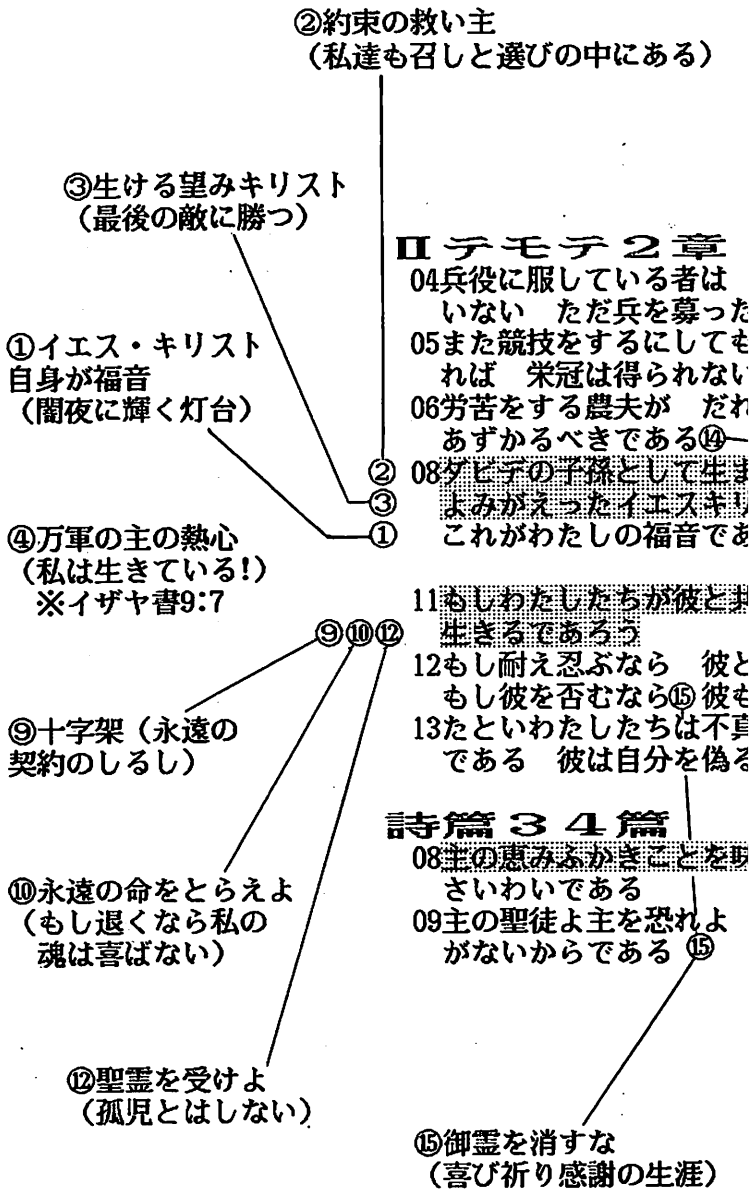
基督伝道隊 戸畑教会

一九八九年標語

㊨ ダビデの子孫として生れ　死人のうちからよみがえった
イエス・キリストを　いつも思っていなさい
（二テモテ　二の八）

㊥ もしわたしたちが彼と共に死んだなら
また彼と共に生きるであろう
（二テモテ二の一一）

㊧ 主の恵みふかきことを味わい知れ
（しへん　三四の八）


②約束の救い主
（私達も召しと選びの中にある）
③生ける望みキリスト
（最後の敵に勝つ）
①イエス・キリスト
自身が福音
（闇夜に輝く灯台）
④万軍の主の熱心
（私は生きている!）
※イザヤ書9:7
⑨十字架（永遠の
契約のしるし）
⑩永遠の命をとらえよ
（もし退くなら私の
魂は喜ばない）
⑫聖霊を受けよ
（孤児とはしない）
⑮御霊を消すな
（喜び祈り感謝の生涯）
IIテモテ2章
04兵役に服している者は
いない　ただ兵を募った
05また競技をするにしても
れば　栄冠は得られない
06労苦をする農夫が　だれ
あずかるべきである⑭
② 08ダビデの子孫として生ま
③ よみがえったイエスキリ
① これがわたしの福音であ
11もしわたしたちが彼と共
生きるであろう
⑨⑩⑫
12もし耐え忍ぶなら　彼と
もし彼を否むなら⑮彼も
13たといわたしたちは不真
である　彼は自分を偽る
詩篇34篇
08主の恵みふかきことを味
さいわいである
09主の聖徒よ主を恐れよ
がないからである ⑮

⑬主の恵みを味わい知れ
（ただ主に喜ばれる事を務める）

⑪主に命を任せよ
（神様を嗣業とする喜び）

⑬

常生活の事に煩わされては
令官を喜ばせようと務める
規定に従って競技をしなけ

⑤心の戸を開いてほしい
（彼と共に死んで生きる）

りも先に　生産物の分配に

死人のうちから
トをいつも思っていなさい

⑥命の交わりにあず
からせる（愛する者
よ出てきなさい）

⑪　⑤　⑥

死んだなら　また彼と共に

⑦

に支配者となるであろう
たしたちを否むであろう
であっても　彼は常に真実
とができないのである

⑦彼と共に支配者となる
（死をも支配する権威）

⑧

⑬

い知れ　主に寄り頼む人は

を恐れる者には乏しいこと

⑧真実な完成者
（全うしなければ
落ち着かぬ方）

神の奥義キリスト
栄光の望み／宝の蔵）

基督伝道隊戸畑教会／新年聖会
１９８９年　1月1日－5日
（①②③……⑮は集会順序）

ページ

※ １９８９新年聖会全体図解 …… ２
★各集会主題（副題）と標語との関係

① イエス・キリスト自身が福音 …… ７
闇夜に輝く灯台

② 約束の救い主 …… １７
私達も召しと選びの中にある

③ 生ける望みキリスト …… ２９
最後の敵に勝つ

④ 万軍の主の熱心 …… ４３
私は生きている！

⑤ 心の戸を開いてほしい …… ５７
彼と共に死んで生きる

⑥ 命の交わりにあずからせる …… ７１
愛する者よ出てきなさい

⑦ 彼と共に支配者となる …… ８１
死をも支配する権威

⑧ 真実な完成者 …… 97
全うしなければ落ち着かぬ方

⑨ 十　字　架 …… 107
永遠の契約のしるし

⑩ 永遠の命をとらえよ …… 117
もし退くなら私の魂は喜ばない

⑪ 主に命を任せよ …… 131
神様を嗣業とする喜び

⑫ 聖霊を受けよ …… 147
孤児とはしない

⑬ 主の恵みを味わい知れ …… 163
ただ主に喜ばれる事を務める

⑭ 神の奥義キリスト …… 177
栄光の望み／宝の蔵

⑮ 御霊を消すな …… 187
喜び祈り感謝の生涯

（ごあんない「戸畑教会について」） ……196

第一章

イエス・キリスト自身が福音

（闇夜に輝く灯台）

【神の福音】　9

【イエス・キリスト自身が福音】　9

【異なる福音】　10

【神の言葉は繋がれない】　10

【恐るべき時代の到来】　11

【宇宙のオアシスである地球】　11

【宇宙は霊的モデル】　13

【不撓不屈の信仰】　14

【聖会の主、完成者】　14

【神様にとっても福音】　14

「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である」(2テモテ2:8)

【神の福音】

◆福音（ふくいん＝喜びのおとずれ）という言葉は、日常それほど聞くものではありません。この世の福音は、単なる置き換えに過ぎないものが多いと思います。扇風機などにピアノ式スイッチというものがありますが、一つを押し下げるとほかが上がります。そのように、ある事については喜びのおとずれであっても、それによってほかの事がアウトになる――例えば、著しい効能のある良い薬と思って使っているうちに、重大な副作用が蓄積されてくる、あるいは、すべて良いと思えば大変高価で手が出ない、あるいは、一時的には効果があるが、のちにはかえって条件を悪くする――などです。

神様の福音は、それによって何か悪い事が起ったり、大きな犠牲を払わなければならなかったり、一時的な麻薬のようなものではありません。聖書においては、「神の福音」、「キリストの福音」、「御国の福音」、「神の国の福音」、「平和の福音」、「和解の福音」などと呼ばれていますが、いずれも人間のほうで何か大変なことをして、その代りに頂くというものではありません。

また、良いものの上に、もう一つ何かを加える、というものでもありません。闇夜に輝く灯台のように、暗黒の世に与えられる救であると教えられたのであります。

この福音は、律法の義（神様の律法を守る事によって、神様から「よし」とされ生かされる道――これは人間にとって不可能な道です）ではなく、イエス・キリストを信じる信仰によって義とされるものであります。

【イエス・キリスト自身が福音】

◆神様の福音とは、イエス・キリストそのものであります。2テモテ 2:8に、「これがわたしの福音である」とあります。良いことがやって来る、困難な問題が解決する、乏しかった者が満たされる――これは嬉しいことには違いありませんが、溯って、そのよってきたる所のイエス・キリストご自身が真の福音であると言われています。

聖徒パウロは、若い伝道者テモテを励ます為に、自分が生かされてきた福音は、このイエス・キリスト自身であること、このかたこそ信頼しがいのある生ける神

の子キリストであること、今しばらくは苦難の中を忍ばねばならないとしても、死を打ち破られたイエス様の力をもって、ついには勝利を与えられる――その事を思って気落ちせずに励むようにと言い送っている訳です。

その当時、テモテはエペソ教会の責任者でありましたが、彼は気が弱く、パウロのように逞しく生きる事が出来なかったようです。ですから、この「イエス・キリスト、福音である方」をいつも思っていなさい、救はこれしかないと書き送っている訳です。

【異なる福音】

◆パウロが直接牧会をし、その後も指導してきた教会の中に、福音と言えない「異なった福音」がはびこってきました。それは「救の完成には、律法を守らなければならない。その象徴として割礼を受けなければならない」というものでした。つまり、「神様は昔も今も変りない方で、その方が『守れ』と命じられたことは守ったほうがよろしい。悪いことをするよりも良いことをするのは、誰が見ても良いことではないか」と、目に見える形や行為を重視するようになって、天使礼拝や禁欲主義に傾いて行きました。

そこで、「ただイエス・キリストを信ずる事によって完全に救われる。罪が許され、清められ、癒され、栄光にあずからせて頂く。聖霊に満たされ永遠の命にあずかることができる」と言う完全な救はおろそかにされ、これを宣べ伝えるパウロ自身が疎外されるようになりました。

ですから聖霊は、ピリピ教会に対して「あの犬どもを警戒せよ」（ピリピ3:2）と言われ、ガラテヤ教会には、「ああ、物わかりのわるいガラテヤ人よ。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に描き出されたのに、いったい、だれがあなたがたを惑わしたのか」（ガラテヤ3:1）と厳しく叱られています。

【神の言葉は繋がれない】

◆彼（パウロ）自身の状況は切迫していました。テモテへの第２の手紙は、パウロの最後の手紙であって、「わたしの所に、急いで早くきてほしい」(2テモテ4:9)と記されたテモテを待たずに、彼はローマで首を切られて殉教しました。

東（エペソ教会など）では、命をかけて伝えた福音が、捩じ曲げられようとし、西（ローマ）においては、自らの命までも抹殺されようとしている、そのような

中で彼はなお、「イエス・キリストこそは福音である。いま私は鎖に繋がれているが、神様のお言葉は繋がれてはいない。神様は召され選ばれた人たちを全く救って、永遠の栄光を与えて下さる――だから気落ちしないように」と勧めています。

聖徒パウロのうちに働かれた神様は、ご自分の福音がどんなに不撓不屈のものであるかを現されています。これはこんにちの私たちにとって大きな力であります。

【恐るべき時代の到来】

◆今はパウロ、テモテの時代とは違った、しかも一層困難な時代であります。それはマタイ24章などに記された末の世の様を見るようで、真に恐ろしい思いが致します。

毎年末には、その年の十大ニュースを纏める事がよく行われますが、それらを聞くまでもなく、我々は自らの生き方を見失ってしまっていると思います。

エゼキエル書2章に、「反逆の家に与えられる巻き物」のことが記されていますが、「その表にも裏にも悲しみと、嘆きと、災の言葉が記されていた」とある通りであります。

またノアの時代、世の人がすべてその道を乱し、神様は「わたしはこれらを造ったことを悔いる――人を地のおもてから拭い去ろう」と言われました。今はそのような時代が来ているのではないかと感じました。しかし神様はその中にも、「ただ一つの救がある」と私に望みを与えて下さいました。

【宇宙のオアシスである地球】

◆昨年末に、私はあるおとずれを聞いて新しい目を開かれました。

人間が初めて宇宙飛行をしてからほぼ20年たち、その間、宇宙飛行を体験した人は 200人以上になると言われます。数年前だったと思いますが、ある人がアメリカに行って、それら（当時はずっと少なかった訳です）の中から12人を選んで取材をし、「宇宙からの帰還」（文末、註１）という本を出しました。

体験者らの話によると、宇宙に出た人は、従来と同じ人間ではあり得ないという事であります。また「地球は宇宙のオアシスであって、どれ程明確な意志のもとに、特別な環境に造られているかが分かった」という事です。

また、月の上を歩いている時、「神様はすぐそこにおられると感じた」と言っ

ています。また、高い所から地球を見下ろす時、「この小さな地球の上で、たくさんの人が争い、あるいは汚している事が実に馬鹿げたことである」と思ったと言います。「人類はお互が同じものであると言う認識が足りないのではないか」と言っていました。

私たちは地上にいて、この目で見、この高さで考えますが、少し違った目で見れば、どれ程新しい事が分かるかと教えられました。これは数年前の話です。

昨年12月になって、宇宙飛行士の世界的な組織が、世界の子供たちのためにと言う趣旨で写真集を出版しました。「地球 母なる星」（文末、註２）という大きな写真集で、宇宙において撮影した 147枚の写真と、解説記事が収められています。ある宇宙飛行士は、「宇宙の流れや、エネルギー、時間、空間には、みな目的がある。目的なしに偶然こんな素晴らしいものが生れた筈はない。格別に我々の住む地球が、その通りである」と告白しています。

月面に下り立った人は、地球が（月の）地平線から昇る――我々が地上で月を見るのに比べて、直径で４倍ですから随分大きく見える訳です――背景の空は無限に深い暗黒です。そこに青白く輝く大きな地球が昇って来るのを見たと言います。

僅かな時間月面にとどまったのち、また飛び上がって月の周りをまわり、更にその軌道から脱出して地球に向かう軌道に入ると、地球がどんどん近付いて来る、その時に彼は「宇宙には知性と愛情と調和とがある」と感じたそうです。目の前に見る大きな美しい地球は、宇宙のどこにも無い特別な環境に保たれている。

自分の存在は今小さな宇宙船、あるいは宇宙服の中（の造られた環境）にあるけれども、それは皆地球から持ち出して来たものであって、それを先の先へと引き伸ばしながらまた地球に帰って行く。やがてあそこに着けば、またその生活に戻る事が出来ると思った時に、自分たちは何と特別な環境におかれていたのだろうか、地球は何と素晴らしいオアシスであろうかと感じたと言います。

次に、今年の１月２日付けの米国の雑誌「タイム」（文末、註３）の表紙に、ぼろぼろに崩れて縛られた地球の絵が掲載されていました。毎年末に「その年の人」を選び、新年号の表紙に載せています。ある年はトウショウヘイであり、あ

る年はゴルバチョフであったりした訳ですが、今年は人ではなく、「その年の星」として地球が登場した訳です。

洪水、旱魃、汚染、饑餓、（動物の）種の滅び、温室効果、放射能の問題、オゾン層の破壊、廃棄物の問題、人口爆発などなど、危機的な地球の状況について記されていました。「今年地球は語った。ノアの洪水の時のように。人々は聞きはじめた」とありました。我々はいかになすべきかと言う事であります。

タイム誌の特集記事の中に、かの写真集と同じ地球の写真が載っていました。私が見て最も感動したあの地球の全体写真でした。月の表面から昇る美しく青白く輝く地球であります。この写真は、早く出版された「宇宙からの帰還」にも掲載されていました。

◆私はこの宇宙の姿は、私たちの霊的モデルであると思いました。私たちがいかに特別な所に置かれ、保たれているか、しかもすべてはただ一度の命であります。宇宙も地球もやがて滅びて行きます。様々なシナリオが描かれ警告されていますが、神様の裁きは違った形であるかも知れません。

【宇宙は霊的モデル】

私たちが今、置かれているところから逃げ出そうとしても、逃げ出す事は出来ません。引っ越す事も出来ません。流れ去って行く時間をとめる事も出来ません。恐ろしい行き詰まりに直面している訳です。そんな中で2テモテ 2:8、「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である」と言われるのです。

私たちが神様から生かされている事を素直に認め、与えられた約束の救主イエス・キリストを思う時、八方ふさがりの中にも、救の道があるのです。

神様は地と、それに満ちるすべてのものを造り、今も生きてご支配になっておられます。私共は元素の偶然の結び付きによって生れ、進化して来たものではなく、神様の形にかたどって尊く造られたものであります。すべてを定め、すべてをご支配になっておられるかたが、この救を与えて下さったのですから、何よりも確かであります。人間が絶望と思う中にも、神様のお与えになった一つの救があるのであります。

◆人間は死んだらおしまいと思いますが、神様は死人をよみがえらせる事がお

【不撓不屈の信仰】

出来になる方であり、その力をもって、私たちを救って下さるのですから、失望することはありません。パウロはこのあと間もなく首を切られて殉教しましたが、彼がよって立ったところの信仰、歩んだところの信仰は、立ち消えになる事はなく、迫害によってむしろ燃え盛り、こんにちにまで至って、私共もまた不撓不屈の信仰に立たせて頂いている訳です。

パウロがこの福音によって生き、これによって多くの人を生かしていきましたように、私共も今、神様の手の下に自らを低くし、多くの人を生かして行く――これが私たちの生きるべき道であると思います。

この救がはっきりすれば、人間的な困難は何でもありません。

【聖会の主、完成者】

◆聖会は今回をはじめとして５日まで15回の集会が持たれますが、そのためにお祈りしていると、遠い集会についてははっきりしたことが分かりません。枠組みだけは教えられますが、中味は全く空白です。しかも私のうちには何もないのですから、人間的には不安です。果たして神様はどういう事を行って下さるのだろうかと考える訳です。

しかし今、私が支えられているのは、「ダビデの子孫、よみがえったイエス・キリスト」という福音によるのであって、その方が聖会の主となり、導き手、完成者となって、死人をよみがえらせる力をもって救って下さるのですから、私はただ「有難うございました。あなたが主人公ですから、どうぞ愛する兄弟姉妹のうちに、あなたのみ心を行って下さい――私はどうなっても構いません。すべての人がイエス・キリストによる救を受け、永遠の栄光を受けるのですから、私はその人たちの為に一切を耐え忍びます。私の命はあなたの手のうちにあります。今日、力の限りを尽くして、使命が終ればいつでも神様の所に帰ります」という気持です。こうなると聖会の今後についても安心がやってまいりました。

【神様にとっても福音】

◆遠くも近くも、私たちの周囲を見る時、困難が満ち満ちていますが、この中において私たちを救おうと、イエス・キリストという救の道を立てて下さいました。パウロは「わたしの福音である」と言っていますが、神様にとっても福音であります。それはイエス・キリストによってご自分のみ心が全うされるからであります。

「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である」――約束の子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストこそが、私たちの救であり、喜びのおとずれであります。また、このお方は私たちの生涯の目標でもあります。私たちのうちに不撓不屈の信仰を与えて下さる方を仰ぎ、待ち望みたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。(1989.1.1　戸畑教会新年礼拝、新年聖会1)

(註1) 立花　隆　　宇宙からの帰還　中公文庫　1983
(註2) ケヴィンWケリー　地球／母なる星　小学館　1988
(註3) ＴＩＭＥ　JANUARY 2　1989

クモガイ

第二章

約束の救い主
（私達も召しと選びの中にある）

【二度と繰り返せない戦い】　１９

【次は何をしたらよいか】　１９

【贅沢すると勝利者のようだが】　２０

【約束の筋道】　２１

【42代の選び】　２１

【セムの神、主はほむべきかな】　２２

【神の道は人の道よりも高い】　２３

【世の初めのさきから選ばれている】　２４

【感謝して従うと】　２６

【祈りの使命】　２７

「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい」(2テモテ2:8)

◆今年の標語としてこの三つを与えて頂きました。右側から順に

※「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である」(2テモテ2:8)

※「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう」(2テモテ2:11)

※「主の恵みふかきことを味わい知れ」(詩篇34:8)です。

【二度と繰り返せない戦い】

人間は何かに怖じ気づいて、「むつかしい」と思うと、どこまでも落ち込んで萎んで行くものです。そうすると出来る事も出来なくなってしまいます。昨年の終りに、横綱、千代の富士が53連勝を遂げましたが、連勝を続けていたある時、「勝負は土俵の下で、控えの席に座った時から始まっています。こちらを見ておどおどしたり、目を逸らしたりすればもうこっちのものです。相手の心臓の動悸まで聞こえる時があります」と言っていました。彼はいつも自信をもって逞しい勝利を続けました。

剣道の試合などを見ていても、初めから相手を飲んでいるほうが勝つようです。これはどんなスポーツについても言える事だろうと思います。

人生には様々な問題がありますが、これは2度とやり返す事の出来ない戦いであって、戦う前から「私は駄目な人間だ。生れて来たからには死ぬまで生きていなければならないが」と萎んでしまえば、決して人生に勝つ事はできません。

「どうせはかない人生だ。せめて生きている間はおもしろおかしくやってみよう」と色々な事をやって見ますが、どれもこれもつまらない、いくらやってもきりがないのが実状ではないでしょうか。

【次は何をしたらよいか】

◆年末にはその年のニュースが纏められます。その中から見えて来ることは、日本人が随分贅沢になったということです。もうかってお金が余って仕方がない。様々な贅沢をやりたいだけやったが、次は何をしたらよいかと考えている――庶民の生活実感としてはなかなかそうでもありませんが、世界の人々から見るとそういう事であります。

他国から非難されないようにと、援助の為にだいぶお金を出して、「これくらいでよかろう」と思いますが、なかなかそうは見てくれません。日本人はお金を儲けるのは上手だが使う事を知らないと言われます。お金は持てば持つほどその人の品位を落とすと言われますが、外国に行って札びらを切って買物をする人を見ていると、持っている人ほど嫌らしい――あれでは日本人は世界から嫌われる筈だと言われます。

国としても、個人としても、かけがいのない今を何に打ち込んだらよいのだろうか。何をやってもつまらないが、この次は何をやったらよいのだろうか、このような所に立っているのではないでしょうか。

【贅沢すると勝利者のようだが】

◆旧約時代において栄華をきわめたソロモン王様は、「人にとって善いこととは何か」「人はいかになすべきか」を究めようと様々な事を試みました。これは伝道の書に書いてあります。知恵に満ち、権力を持ち、お金も持ち、あらゆる事が出来るのにまかせて美しい家を建て、ぶどう畑をもうけ、園と庭を造り、池を造り、木の繁る林に川を流れさせ、多くの奴隷を持ち、金銀を集め、歌をうたう男女を歌わせ、多くのそばめを仕えさせました。しかし、その結果は全くむなしいもので、「空の空、風をとらえるようである」と言っています。

人は自分で出来ないことをひがんで、「あんなことをやっても、どうせつまらない（に違いない）」と言いますが、それはあまり説得力がありません。しかし実際に思う通りにやった人が、「やっても駄目だった」と言うのですから本当にその通りだと思います。

日本人がお金持になって贅沢をしていると言っても、当時のソロモンにくらべれば足下にも及ばないでしょう。ですから贅沢はどこまで行っても結局むなしいものであります。古代帝国ローマにおいても恐るべき贅沢(?)が試みられたと言うことですが、これは一見勝利者のようで、実は人生の敗北者だと思います。

なぜなら、かけがいのない人生に望みを持てないで、霊的に萎んでいるからそういうものを追及する訳で、人間が何の為に生れて来たか分からないならば、その人はそもそも生れて来なかったほうがよかったかも知れません。そのことを聖書は「流産した子供が一番しあわせである」（伝道の書6:3)と言っています。

私たちがこの地上に生れて来たのは、神様の使命があるからであります。

◆「ダビデの子孫として生れーーー」と書いてありますように、イエス様ははっきりとした使命を受けて、この地上に生れて下さいました。

【約束の筋道】

筋道などと言うと、「堅いことを言う」と思われますが、物事の筋道が分からなければ安心は出来ません。だいぶ前、京都でしたか、ある家の郵便受に1万円の札束が幾つも入って来るので「気持が悪いーーー」と、警察に届けた事がありました。どこからどうして来たものか全く分かりませんから、どこかの泥棒が処置に困って投げ込んだのかも知れない、そんなものを貰ったらあとで係わり合いになって迷惑だと言う訳です。

電気コードでもそうだと思います。私は最近コンピューターの配置がえをしたところ、コードがたくさん垂れて混乱しますので、大きなクリップで挟んで整理をしました。電源を入れる時には、ずっとその筋道をたどって引っ張ってみたり、表示を確かめたりします。

岩場に登ろうとする時、目の前に下っている物に不用意にぶら下がる人はないでしょう。引っ張ってみて上の方まで目で辿って、しっかり縛ってあると確認して力をかけます。

神様の救を、人間の常識で確かめることはできませんが、どこからこの救が与えられたか、はっきりと聞くならば、より大きな信頼を傾ける事ができます。

【42代の選び】

◆神様の救が、ぽっかり浮いた流木のようなもので、捕まってもそのまま流されるようでは大変です。神様は私たちに対してご自分の救が確かな事を保証しておられます。「ダビデの子孫として生れーーー」とは、神様の約束の家系から、約束の時に、私たちの為に救主を与えられたということです。この事は早くから旧約聖書に預言されているところであります。

マタイ1章1/16節。「アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図。アブラハムはイサクの父であり、イサクはヤコブの父、ヤコブはユダとその兄弟たちとの父ーーーー（中略）ーーーーヤコブはマリヤの夫ヨセフの父であった。このマリヤからキリストと言われるイエスがお生れになった」。これはアブラハムからイエス・キリストまで42代に亙る系図です。それぞれの名前の中に、

その人たちの生涯の哀歓が込められています。これを読んだだけで、神様が私たちに救主を下さる為に、どれだけ長い準備をして来られたか、どれ程確かで間違いの無い救であるかが分かります。

重ね合わされた円盤を回して数字を合わせる形式の鍵があります。あらかじめ定めた番号が合っている時だけ鍵が抜けたり入ったりします。例えば、3桁の数字であれば、 000から 999まで1000個の組み合わせの中から一つだけを選ぶ訳でかなり安全という事が出来ます。これがもし円盤が10個あるとしますと 100億の中から 一つを選ぶ事になりますから、きわめて安全ですし、見方を変えればこの数字を合わせた人は間違いなく持ち主であると言うことが出来ます。

神様の指定は10個どころか42代に亙るもので、その道はきわめて確かで、間違いなく神様の御計画であり、間違いなく私たちの為の救主であるとおっしゃるのです。

【セムの神、主はほむべきかな】

◆アブラハムより前にも神様の道があります。創世記９章 18/29節、朗読。この 25/27節に、「カナンはのろわれよ。彼はしもべのしもべとなって、その兄弟たちに仕える――セムの神、主はほむべきかな、カナンはそのしもべとなれ。神はヤペテを大いならしめ、セムの天幕に彼を住まわせられるように。カナンはそのしもべとなれ」とあります。これは洪水後のノアの記事です。洪水の前、「人の悪は地にはびこり、暴虐は地に満ち、すべての人がその道を乱した」と記されています（創世記6:12）。創世の初め、最初の人間は「はなはだ良くできた」と神様から喜ばれましたが、次第に堕落してここに至ったのです。

そこで神様は地上に人を造ったことを悔いて心を痛め、地のおもてから人をぬぐい去ろうと考えられ、神様の前に正しく生きていたノアの家族８人を救うためすべての生き物の雌雄と共に箱舟に収容して、１年後に彼らを地上に下ろして全地に広がらせられました。その時、虹を現して契約のしるしとし、「これを見てあなたがたとの永遠の契約を思い起し、再び水であなたがたを滅ぼさない」と約束されました。

ノアたちが地に下り立って行なったのは、ぶどう畑を造る事でした。彼はぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になって寝ていました。３人の子供（セム、ハ

ム、ヤペテ）のうち、真ん中のハムがお父さんの裸を見て、兄弟たちに、「お父さんが裸になっている！」と面白がって話したところ、兄と弟は後ろ向きに歩いて着物をかけ、父の裸を見ませんでした。

あとからノアは彼らの行為を知って、セムとヤペテを祝福し、ハム（カナンの祖）の態度を呪いました。この３人がこんにちの黄色人種と白人と黒人、３人種の祖先であって、ハムの子孫はある時期、人の奴隷となって仕え、預言の通りになりました。

「セムの神、主はほむべきかなーーー」とあるとおり彼の子孫から救主がお生れになりました。アブラハムはセムの子孫です。

救とは、人間の考える良いものを磨き、組み立て、「立派なものが出来た。これはよそに無い貴重なものだ」と言うようなものではありません。それは人間のやることですが、神様の道はそうではありません。「セムの神、主はほむべきかな」「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリスト」と上から定めて下さいました。これを人間の頭で理解しようとするのは間違いのもとです。

◆イザヤ書55章8/11節。「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっていると主は言われる。天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い。天から雨が降り、雪が落ちてまた帰らず、地を潤して物を生えさせ、芽を出させて、種をまく者に種を与え、食べる者にかてを与える。このように、わが口から出る言葉も、むなしくわたしに帰らない。わたしの喜ぶところのことをなし、わたしが命じ送った事を果す」。天から雨や雪が降りますと、地を潤して物を生えさせ、動植物に水を補給し、あるいは河川となり、地下水となって海に入ります。赤道直下の海面から急激な上昇気流となって昇り、台風となって温帯地方に雨を降らせます。人間が原子力を用いてこの循環を妨げようとしても、とても及ばないものであります。

宇宙から撮影した地球の（丸い）写真を見る時、大変感動しますが、地球は月のように綺麗には見えません。地球には大気があり、雲が渦巻き、海流が渦巻いています。その全体が青白く光って見える素晴らしいものです。神様の偉大なわ

【神の道は人の道よりも高い】

ざと、人間の工作はとても比べることはできません。

神様は太陽を造り、銀河を造り、宇宙のすべてをお造りになった方であって、私たちの思いとはレベルが違います。

その方は良いものを選んで、「お前はだいぶ見込みがあるから、特別に恵みを施そう、頑張りなさい」、あるいは「お前は駄目だ。他の人を選ぼう」――そのような事をされる方ではありません。神様は人を不従順の中に閉じ込められますから、「自分はもう駄目だ」と思う――そういう中から、「こんな者を救って下さる方がいらっしゃる！」「死人をよみがえらせる力をもって、私を救って下さる！」とイエス・キリストによって救われる――そういう救を与えて下さる。それは決して人間の働きの延長上にはなく、全く神様のなさる事であります

「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえった（救主）イエス・キリスト」とは、私たち人間にとって全く想像もできない事であります。「どうせ救ってくれるなら、死んだりしないで救ったらよいのに」と思いますが、イエス様は多くの人からなぶり殺され、惨めな最後を遂げられましたが、神様はこれを死人のうちから甦らせ、救主として下さいました。それは神様が定められた道であります。

【世の初めのさきから選ばれている】

◆エペソ1:3/14、朗読。この 3/5節に、「神はキリストにあって、天上で霊のもろもろの祝福をもって、わたしたちを祝福し、みまえにきよく傷のない者となるようにと、天地の造られる前から、キリストにあってわたしたちを選び、わたしたちに、イエス・キリストによって神の子たる身分を授けるようにと、御旨のよしとするところに従い、愛のうちにあらかじめ定めて下さったのである」とあります。

これを読むと、私たちに対する神様の選びは実に素晴らしいものであることが分かります。イエス・キリストが父なる神様の確かな選びと、道筋に従って地上に来て下さったように、私たちも、世の初めのさきからキリストにあって選ばれこの救にあずかったと言われるのです。

私たちはなかなか自分が選ばれたことを信じられない者です。ことに「世の初めのさきから選ばれた」などとは、とうてい信じられないと思いますが、私たち

が物を選ぶ時のことを考えればよく分かると思います。

例えば、ケースの中に鉛筆がたくさんあるとします。人がこれを選ぶ時には、目的や好みがあると思います。赤がよいか青がよいか、丸いものか6角形か、消しゴムが付いているか付いていないかなど色々あるでしょう。それに従ってサッと手を出してどれかを選ぶ、選ばれた鉛筆は何も言うことは出来ません。それは選んだ人の考えによるものです。

神様が世の初めのさきから選んで下さっていたから、私たちは様々な環境を通して教会に導かれたのです。それは全く神様の選びと召しによります。ある人の譬話に、天国の門の外側と内側では張紙が違うという話があります。外側から見ると、「すべての人は来なさい。これはすべての人が救われるべき福音である」と書いてある――信じた人が門に入って、振り返ると門の内側に、「世の初めのさきから選ばれた者」と書いてあったと言います。

私たちが始めて教会に行く時、世の初めのさきから選ばれたとは勿論分かりません。苦しみ悲しみの中で、慰めを求めて行くかも知れない。ところがやがて救われて天国に入ってみると、「自分は世の初めのさきから選ばれた者であった――困難や思い煩い、行き詰まりの中でやっとの思いで教会を求めたが、それはみな神様の手の中にあったもので、神様はそのような問題を起して私を教会に導いて下さったのだ」と分かります。

ですから私たちは「いま信じられない」と思うのは当り前かも知れません。しかし事実選ばれた者なのですから、「なぜ選んで下さったのか、そんなことは信じられない。私はいやです」という事は出来ません。神様が使命を与えて地上に送って下さったのです。「なぜ私を生んだのか」と問う子供は愚か者です。

「それではあの人はどうですか。この人はどうでしょう」という問には神様はお答えになりません。「私がお前を選んだ」というのが事実です。ですから「今は分かりませんが、神様が私を選んだとおっしゃるから、有難うございます」とお言葉を信じていくと、（エペソ1章14節までに記されているように）神様がご自分の計画を実行されて、私たちは神様の栄光をほめたたえる者になります。そうなると振り返ってみて、「なるほど、あの中、この中を通ったことは、みな神

様のご計画によるものだったのかーーー」と感謝するようになります。

いま私たちに救が与えられているのは、それ程確かな救であり、私たちを目掛けて与えられている救であって、決して間違いのないものであります。お言葉と事実は必ず一致します。

コンピューターなどを繋ぐ時、たくさんのピンが並んだ専用の接続器具を使う事があります。これは切りかぎの位置、穴の位置などがそれぞれ決まっていて、ほかの場所に持って行っても合わないようになっています。定められたものを定められた場所に差し込むとパチッとはまって所定の機能を発揮します。

そのように神様の定めは、今でなければならない、これでなくてはならないもので、しかも「お前のために」と言われているのですから、「はい、有難うございます」と素直に頂戴すると、神様は喜んで私たちの上にみ心を行い、神様をほめたたえるようにして下さいます。

この度の聖会についても、神様が何をなさって下さるか、全部を見通して、知り尽くすことは出来ません。しかし神様が招いて「この救主を立てた。お前を選んでこの救を与える」とおっしゃるのですから、「そうですか、有難うございます。神様がおっしゃったから大丈夫」と神様を信頼して行くと、喜んでご自分の救をほどこして下さるのです。

【感謝して従うと】

◆救にあずかるように選ばれた者として、神様のなさるままに自分を低くして従うならば、どんなに喜ばれるか分かりません。

人間同士であっても、頼んだことを守ってくれるならば、何をしてくれるよりも嬉しいでしょう。大人が小さな子供に、「言うことを聞いて遊んできなさい」と言ったとします。それを守ってくれたら、ビショビショの雑巾で掃除の手伝いをしてもらうよりもずっと嬉しいに違いありません。それと同じことで、私たちが神様の前におるべき立場に立ち、置かれた所で感謝し、神様の手に信頼するならば、それだけで神様はどんなに喜んで下さるか分かりません。

神様から喜ばれ信頼されると、次の段階に進ませて下さるかも知れません。人間の世界でもそうでしょう。初々しい気持で謙虚に自分の務めを果たしているのを見ると、次を任せたくなります。銀行に入った人は、はじめお札ばかり数えさ

せられて腐るそうです。また、国鉄に入った人は、まず駅の改札や掃除をさせられて、次の仕事を覚えて行くそうです。

最初に「こんな仕事はつまらない」と逃げるならば、次もつまらないでしょう。これでは自分の道を狭くしてしまいます。しかしどんなに経験を積んでいても、年をとっていても、初々しい気持でそこにいるなら、それだけで喜ばれて次々に大きな仕事を任せられるようになるでしょう。神様の手の下で喜んでいるなら、どんな道でも行く事が出来ますし、道が開けて来ます。

◆人間は、神様の祝福によって生かされる以外に、少々の贅沢をしようが、何をしようが空しいものです。人生が終って神様の前に立たされた時、贅沢は誇りになりません。置かれた所で、神様に対していかに信頼したかが評価されます。

お言葉に従って行くなら喜んで大きなものを任せて下さいます。人間が初め造られた時から、尊い使命を与えられていました。「こんなものが出来たから、とにかく死ぬまで生きていなさい」という事では決してなかった訳です。神様がご自分の形に造って、それまでに造られた天地万物、動植物の一切を、神様に代って治めるようにと使命を与えられました。

治めるとは、乱開発したり、野生生物を気儘に殺したりする意味ではなく、神様に代ってそれぞれにところを得させて生かす――すべての人が神様を恐れ敬って仕えるようにと、神様に向かって祈ることであります。それは誰からも認められないかも知れませんが、実は世界を下から支える尊い使命であります。

私たちは、「万物を統治するなどとんでもない。私はこんな所でこんな事をしている者です」と思いますが、今その中で神様に従う時、次々に大きなものを任せて、ご自分に代ってすべてのものを治めさせて下さる――私たちの祈りに答えてすべてのものを生かして下さる――実際にいま神様はご自分の御旨を行い、力をあらわし、人々の心を変えて下さっています。

このような大きな期待をもって、イエス・キリストという救主を立て、私たちを救って下さいました。「この救主をいつも思っていなさい――私はそういう事をあなたのうちにしようとしている」――これが神様のご真実な約束です。

「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、

いつも思っていなさい」――真実な救主、ダビデの子孫として生れられた方を、いつも思う者でありたいと願います。ではご一緒にお祈りしましょう。

(1989.1.1 戸畑教会、新年聖会2)

第三章

生ける望みキリスト
（最後の敵に勝つ）

【まことの福音、たくましい信仰】　３１

【イエス・キリストのご生涯】　３２

【福音は決して繋がれない】　３３

【死人を生かす神】　３３

【生ける望み、天国の資産】　３５

【訴えそしるのが悪魔の仕事】　３５

【よみがえりの信仰には何物も勝てない】　３８

【福音は神様にとっても喜び】　３９

【出て来た人にあげます】　３９

【自分のものとして実用すれば】　４０

「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい」(2テモテ2:8)

◆福音という言葉は、日常それほど多く聞くものではありません。辞書を引くと「喜ばしいおとずれ」と書いてあります。世の中にも喜ばしいおとずれはたくさんあります。例えば、「腰の痛い人にはこの体操が良い」とか、「これこれの病気にはこの薬が大変良く効く」などと言われる訳ですが、文字通りの福音でない場合があります。体の別の部分に無理をしたり、好ましくない副作用が蓄積したりというようなことです。

こんにち、原子力発電は電力需要を満たす為に欠くことの出来ないものとなっています。初期の頃、原子力発電は単価が安く有利なものとされていましたが、次第に廃棄物の処理がむつかしくなって、処理費用まで含めると、決して安くはなく、むしろ将来に大きなつけを残すものだと言われます。

そのように福音と考えられていた事が、実は福音でなくなるものがあります。しかし聖書の言われている福音は、やがて行き詰まるような福音とは違って、神様によって与えられる「良いもの」であって、100%感謝して頂戴できるもの、貰えば貰うほど素晴らしいものであります。

テモテへの第2の手紙は、聖徒パウロが個人的にテモテに対して送った手紙であります。エペソ教会の責任者であったテモテは、性格の優しい人であったとみえて、逞しい伝道が出来なかったようです。そのひ弱なところを、パウロが励ました訳です。彼を取り巻く状況は甚だ切迫しており、とても落ち着いて手紙を書ける状況ではありませんでした。このあと間もなくパウロは（再び）捕らえられて悪者に仕立て上げられ、首を切られて殉教しました。

このように自分自身はまさに抹殺されようとしており、自分がかつて牧会し、指導してきた教会の中には、色々な間違った福音が入り込んできて、（パウロの仕えたイエス・キリストを信じる事によって救われるという）福音は曲げられ、毒されようとしている――右を見ても、左を見ても望みの持てない中で、彼は逞しい信仰を持って、「イエス・キリストこそが私の福音、イエス・キリスト自身がすべてに勝ちを得させて下さるものだ」と言ってます。

少々力が与えられるとか、信じたら良いことがあると言うのではありません。イエス・キリストそのものが福音であり、イエス・キリストがあるということ自体が福音であると言うのです。それ程イエスという方は私たちにとって救の源であり、私たちの救の目標であり、神様が私たちに与えて下さった保証でもあります。イエス・キリストについて詳しくお話すれば際限がありません。新約聖書全体がイエス・キリストについて証言しているものです。

今晩は、イエス・キリストの救のうち、「死人のうちからよみがえったイエス・キリスト」という部分について学びたいと思います。

【イエス・キリストのご生涯】

◆イエス・キリストが誕生されたのは、紀元前 4,5年ごろと言われますから、今から1992,3年前のことです。つい先日祝いましたクリスマスの晩に、この地上に生れて下さいました。栄光に輝いておられた神の子イエス・キリストが、人間の姿をとってこの地上に生れて下さった訳です。神の子として、威風堂々と生れられたのではありませんでした。誰も知らない所でひっそりと、しかも人間の最下層に生れて下さいました。

当時、ローマ皇帝の命令によって、全国的に人口調査が行われました。そのころ地中海世界に急速に領土を広げた帝国が、人口調査によって民衆を登録し、それに基づいて税金をかける訳です。それは財政上の必要もあったでしょうが、支配と服従の象徴でもある訳で、全住民はそれぞれの生れ故郷に帰って登録をしました。ヨセフとマリヤは、それまで住んでいたガリラヤの町ナザレを出て、南に向かいエルサレムの少し南にあるベツレヘムの町に帰って登録をしようと思った訳ですが、国中の人が大移動をしていますから、旅館は一杯で泊まる所もありません。馬小屋の端を借りてそこでお産をし、飼葉桶の中に、粗末な布にくるんで寝かせました。それが神の子の御誕生でした。

こうして成長されたイエス様は33年の間、人としての生涯を送られたのち、罪の無い身でありながら、私たちのすべての罪の為に十字架にかかって死んで下さいました。イエス様は父なる神様から派遣された使命を完全に果し、従い抜かれました。全く自分に死にきり、私たちの為に神様のみ心を行われた訳です。

それに対して神様は、イエス・キリストを３日目に死人の中から甦らせ、多く

の人々に甦りの事実を明らかに示し、（復活から）40日のちには 500人以上の人の見ている目の前で天に昇らせ、この世の終りには再び同じ姿で（私共を迎える為に）派遣することを約束されました。

今、私たちの目には見えませんが、イエス・キリストは私たちのうちに、聖霊なる神として臨んで下さって、いつでも救主を私たちの心に当て嵌めて下さいます。それは私たちの体の内も外も、大きくは地球環境も全部、水を仲立ちとして生かされているのに似て、聖霊は私たちの内に働いて神様の事を当て嵌めて下さいます。こうして聖書のお言葉は私たちの心にきざまれ、私たちのうちに働いて下さるのです。

◆イエス・キリストが私たちの為に十字架にかかって死に、甦って今は目には見えないが、永遠の救主となって私たちを絶えず守り支え、ご自分の救を当て嵌めて下さる――その事を私たちがいつも心にとめているならば、どんな事情境遇の中でも逞しく立ち上がることができます。

パウロがその通りでした。右を見ても左を見ても全く望みを持つ事ができない中で、彼は「この救は人から出たものではなく、神様から与えられるものであるから、決してすたらない、繋がれない」と確信をもって立ち、テモテにも勧めています。そしてイエス様が最後に、弟子たちに、「全世界をめぐって、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。わたしは世の終りまで、あなたがたと共にある」と御命令になった通り、福音が全世界に宣べ伝えられ、多くの人々が救われることを望みました。その結果、私たちがこんにち救にあずかり、パウロと同様に不撓不屈の信仰をもって立たせて頂いている訳です。

イエス・キリストは、死を乗り越えた方であります。「神様は死人をよみがえらせる力をもっておられる」と信頼するのが、私たちの信仰の鍵であります。

◆ローマ４章 17/25節、朗読。これはアブラハムの信仰です。これは私たちの良いモデルです。彼の信仰は、「鰯の頭も信心から」というようなものではありませんでした。17節に「彼はこの神、すなわち、死人を生かし、無から有を呼び出される神を信じたのである」とあります。彼は神様を、「死人を生かす事ができる方、無から有を呼び出される方」と信じました。

【福音は決して繋がれない】

【死人を生かす神】

死ぬことは命ある者の常であって、寿命が来れば死んでおしまいと思いますが、神様は死人を生かし無から有を呼び出すことが出来るお方です。

創世の初め、神様は「光あれ」と言われて、何も無い所に先ず光をお造りになり、次々にすべてのものを造られました。これはおとぎ話ではなく、私たちもまたこの神様によって造られたものです。

ある若いお母さんが、生れた子供について、「この子は一体どこから来たのでしょうか。本当に不思議と思います」と言われていましたが、神様が子供を宿らせ、成長させ、生れさせて下さる――そして親とは違った別の人格として育って行く――何と不思議なことかと感動します。これは全く無から有を造られる神様のみわざではないでしょうか。

創世記を読みますと、「人間は土の塵をもって神の形にかたどって造られ、命の息が与えられた時に生きる者となった」と書いてあります。ですから人の使命が終って、命の息が取られますと土に帰って行きます。土葬しても火葬しても、早晩土に帰ります。私たちは土から造られ、土に帰って行く。

アブラハムは神様をそのような方と信じた訳です。そこで彼は神様から義と認められました。

イエス・キリストは「死」に勝たれた方です。人間にとって最後の敵である「死」にさえも勝たれた方は、それ以前というか、それ以下というか、人間のあらゆる問題に完全に勝たれた方であります。

私たちがそのように信じるならば、神様から喜ばれます。人間関係でもそうでしょう、自分の話を本当に理解してくれたならば、机を叩いて「そうだ。その通りだ、よく分かってくれた！」と喜ぶでしょう。同じように神様を「無から有を呼び出される方、死人を甦らせる方」と信頼すると、アブラハムに対してと同じように、私たちにも「よろしい（義）」と（それが正しい信仰である事を）保証して下さいます。

それによってこの世のすべてのものに勝ち、望みを持って行くことができます。八方ふさがりの中にあっても、なお私たちは生きた望みを持つことが出来ます。淡い希望――「そうなったらいいなあ」という願望ではなくて、実際に大丈夫、

確かにすぐそこに勝利が見えているという勝利を与えて下さるのです。

◆1テペロ 1:3/4、「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、神は、その豊かなあわれみにより、イエス・キリストを死人の中からよみがえらせ、それにより、わたしたちを新たに生れさせて生ける望みをいだかせ、あなたがたのために天にたくわえてある、朽ちず汚れず、しぼむことのない資産を受け継ぐ者として下さったのである」とあります。

【生ける望み、天国の資産】

イエス様が私たちの為に死に勝ち、甦って下さったという信仰は、神様に喜ばれ、私たちも同じ力で救われます。単なる希望ではなく、実際に生ける望みを与えられます。決して死んだ望み、架空の望みではありません。確かに新しいものが次々に生み出される望みです。

そして天国の資産を受け継ぐ者とされます。資産は偽り者にはやれません。法律的にも確かに相続権があって大丈夫という人に遺産が分けられます。そのように私たちが「父なる神様はイエス様を死人の中から甦らせた方です」と信頼して行くと、「よろしい」として天国の跡継ぎとなり、資産を受け継ぎます。「天国の資産なんて、どこにあるか分からない。それよりも○○銀行の自分の名義の、あれのほうが確かだ」と思いますが、そうではありません。天国の資産は目減りしません。インフレにも強く、大変な高い利子が付きます。朽ちず、汚れず、しぼむこともありません。そういう資産を保証して下さる、これは素晴らしいことです。これは金銭のことだけではありません。そのようにすべての戦いに勝つことができるという保証です。

【訴えそしるのが悪魔の仕事】

◆もう一つ教えられたことがあります。人間は「死」に対して非常に弱いものです。「そんな事をしているとおまえは死ぬぞ」と言われると、多くの人は降参してしまいます。死ぬのではないかと思ったら、何もかも投げ出してしまいます。昔、ある人が当時のお金で50億円の財産を持っていました。死病にかかって医者に、「あなたに25億円あげるから何とか治して下さい」と頼んだが出来ないで亡くなったと言います。

人間が「死」に対して弱いのは、罪があるからで、悪魔が「おまえ死んだらどうするか」と言って来ますと、人は恐れおののくのです。

エペソ６章 10/18節、朗読。これはエペソ教会に対する最後の勧めであって、悪魔との戦いに関するものです。私たちが信仰によって救われ、喜んで生活していると、それを崩そうとする力が働いて来ます。地球上のすべてのものは、地球の中心に向かって引かれていますから、手を離せば落ちて行きます。同じように私たちが神様によって救われ、天国に目を向けていますと、悪魔は策略をもって私たちを落とそうと、絶えず働いてまいります。それは「死」の恐れをもって私たちを訴える訳です。

イエス様を信じて罪ゆるされた者は「死」を恐れませんが、悪魔は「あいつはあんな罪人ですよ、こんな所があるじゃないですか。救われたと言ってもこんな事をして、あんな事をしてーーー」と言います。「神様、あなたはあの人を柔らかに守っているから、神様、神様と信仰を持っているが、もし取り去ったら、きっと神様に唾をかけて逃げて行くでしょう」と訴えます。

そしることと訴えることが悪魔の仕事ですから、「神様、やってごらんなさいきっと背きますよ」と訴えます。（ヨブ記１章に悪魔と神様のやり取りが詳しく書いてあります）。悪魔は正しいヨブを訴えて、「あなたはヨブの事を大層ほめられますが、何もかも整えて彼を恵みで包んでおられるから、神様、神様と言っています。取ってごらんなさい、きっと神様に向かって唾をかけるような事を言うに違いありません」と言いました。

神様は「体に触れてはならない」と条件を付けてこれをお許しになったので、悪魔はヨブの持物を取りましたが、彼は「主が与え、主がお取りになる、主のみ名はほむべきかな」と言って少しも背きませんでしたから、「どうだヨブは背かないではないか」と言われますと、悪魔は更に「神様、彼にはまだ健康があります。稼ぐに追い付く貧乏なしで、また働けると思って、あんな事を言っているのです。ヨブの健康をお取りになったら今度こそ神様に背くようになるでしょう」と言います。

神様が「命に触れることを許さない」という条件付きでこれを許されますと、悪魔はヨブの健康を奪いました。体中から膿が出て痒くてたまらないーーー悪性の皮膚病でした。痒いので強くかくと汁が出る、そこで灰の盥の中に座って灰を

叩きつけて乾かす、灰が乾燥してかさぶたが落ちるとまた痒くなる――全身がその状態を繰り返しました。

まるで灰だるまのようになっていた時に、3人の友人が来て、「あなたは何か悪い事をしたのだろう」と言います。ヨブは「いや、何もしていない」と答えます。こういう様々な問答があったのちに、最後にヨブは、神様が刑罰を加えられたのではなく、ヨブの魂を引上げようとの深い み心をもって訓練をされたのだという事が分かりました――そういう物語があります。（以上ヨブ記から）

悪魔は私たちを訴え、そしって、私たちが罪の恐れの為に（死を恐れ）苦しむように仕向けて来ます。それが悪魔の働きです。それは神様から出たものではなく、悪魔が私たちを神様から引き離そうとしてやって来る事であります。

しかし、神様が上からおっしゃるのは、「死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい」です。私たちが「そうです、悪魔がどんなに訴えて来ても、イエス・キリストが私の為に十字架にかかって死んで甦って下さいました」と信頼するなら、私たちはすべての訴えに勝つことが出来ます。神様が保証して下さるのですから大丈夫、私たちは動くことはありません。

2テモテ 2:8、「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である」――私たちは外部から色々な恐れをもってそしられ、訴えられるほかに、自分が自分を訴えるということがあります。「私は駄目ではないだろうか、こんな人間だから――」と。

しかし神様はそれも押し流すように、「死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい――」「私は救主を与える、人が何と言っても、悪魔がどんなに言って来ても係わりがない。恐れを乗り越えなさい」と保証して下さいます。

悪魔のいざない、そしり、訴えに対しても、「神様はこうおっしゃっているから大丈夫」と大胆に踏み出すと、再び訴えられないように力が与えられます。自分自身が変わってきます。「攻撃は最良の防御」であって、スポーツでもゲームでも、攻撃することによって自分の弱点はカバーされ、相手はうろたえてエラー

をします。

◆悪魔の攻撃に対して、主のお言葉に信頼して、思い切って踏み込んで行くと、自分自身が強められて再びそしられない生涯に入ることが出来ます。イエス様が洗礼を受けられたあと、荒野で試みられた時、悪魔のいざないに対して、聖書のお言葉をかざして対抗されました。例えば、「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」とあり、「サタンよ、退け！」とイエス様は勝たれました。サタンは再び襲って来ることが出来ず、御使が来て仕えたと書いてあります。

私たちは現実に様々な問題の中に生きています。その中で「死人をよみがえらせる方が救って下さる」という信仰には、何ものも勝てません。それは不撓不屈、不死身の信仰です。私自身もそうです。私は今、特別な所に生きている訳ではありません。近くも遠くもどこを見ても何ひとつ希望を持つことは出来ませんが、そういう中にあって頭を抱え込むのではなく、このよみがえりの主によって望みを持つ時、どんなことが襲いかかって来ても倒れません。肉体も年毎に弱っているかも知れませんが、弱ってもなお支えられて御覧の通り生きています。信仰は頭（心）の問題だけではなく、実際に肉体が支えられるものです。支えられ守られ、生活が整えられて行きます、これは理屈では説明が出来ません。

神様に対する信頼は、頭で説明が出来て、筋道が組み立てられて、「なるほどこれなら信じようかーーー」と言うものではありません。まず神様のお言葉に信頼して行くと、あとからその通りになって来るものです。「見えて来たら信じよう」というのは信仰ではありません。見たものを望む人はありません。まだ明日が来ないから「明日はこうしよう」と望んでいる訳で、神様のお言葉に対しても、「必ずそうなる」「必ず私を救って下さる」と信頼すると、事実支えられるのであって、これが信仰です。

今晩も「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい」ーーー死をも破り給う救主、この方を福音として受け止めたいと思います。自分が頭の中で考えて、「そのように思わなければならないーーー思いなさい」というのではありません。神様が「この福音、この救を与える」とおっしゃるのに対して、「有難うございます。こんな時代ですが

すべてに勝たせてくださいますから有難うございます」と受け取るだけですから、本当はやさしいことです。人間が自分の頭で考えようとするから、「そんなことがあるだろうか――今時そんなこと――夢のようだ」と思いますが、神様がおっしゃる事をそのまま受け取ることは決してむつかしい事ではありません。実際にやってみればすぐに分かります。

◆「これがわたしの福音である」とあるのは、私たちにとって喜びのおとずれであるばかりではなく、神様にとっても喜びのおとずれであります。イエス・キリストを信じる人に対して神様が「よし」とご自分の計画を実行なさる――すると「なるほど、これは神様のわざだ」と分かります。

【福音は神様にとっても喜び】

「三方一両損、あるいは一両得」という裁きがありましたが、私たちが神様のお言葉に単純に信頼して行くことは、私たちにとっても喜びであり、神様にとっても喜びでありますし、またそれを見る人たちにとっても喜びであります。「なるほど、こんな時代にも神様のお言葉に従うと、あのようになるのか、それでは私も教会に行こう」となりますと、「三方一両得」どころか四方も八方も大変な利益であります。

この世の神社参りに行って賽銭を投げ、「この1年、無病息災、商売繁盛でありますように」と願って、たとえ何万、何億円儲かったとしても、お金はすぐに無くなります。しかし、「神様が私の救主となって下さった」と言う確信は何十億何百億円にも変えられないものです。命に係わることです。神様の前で「よし」として受け入れられることは、お金に換算出来ないものです。

ですから、恵みのお言葉を拒むならば、大きな損失を招くと思います。交通事故の補償金交渉の際、逸失利益（当然得られる筈であったのに、失われた利益）という事を言われますが、信ずれば信じられる時に後退することは、どれほど大きな損失になるか分かりません。ですから神様が「さあ、あげよう」とおっしゃる時に、今晩進み出て頂きたいと思います。

【出て来た人にあげます】

◆昔、ある所の伝道集会で、講師の先生が、福音という事を皆さんに教えようとして、1円金貨（今で言えば何千円にも相当すると思います）を出してかかげ、「皆さん、福音とはこういうものです。今ここに1円金貨があります。出て来た

人にあげますから、誰でも出ていらっしゃい」と言われたそうです。大人は顔を見合わせて出て行きませんでしたが、うしろのほうにいた子供が、「くれると言うなら貰いに行こう」とつかつかと前に出て手を出したところ、先生は金貨を握らせて、「あなたのものです」と言われたそうです。大人は貰いに行けばよかったと思ったがあとの祭りであったということです。

神様は私たちに対して、「これが福音だ」とおっしゃるのは、少々の福音ではありません。何百万、何百億どころではありません。永遠の命にかかわる問題です。「先輩を差し置いて出て行ってはでしゃばりではないか」と考える事はありません。神様が呼んでおられるのですから、出ないほうが損であります。出るのが謙遜であります。「あげよう」とおっしゃるのですから、「私に下さい」と手を出すーーー他の人が出なくても自分が出たらよいと思います。そうすると大変な利益になります。

そのように私たちは今晩、神様の福音をーーーみなまで分からなくてもーーー頂きたいと思います。福音を聞いて初めからすべてを理解出来ないのは当り前です。「良いものだからあげよう」と言われるのですから、感謝して貰って帰れば（開けてみて）良いものであることが分かります。使ってみればもっと良いことが分かります。

【自分のものとして実用すれば】

◆ワードプロセッサーには、様々な機能が搭載してあります。価格の安い簡単な機械であっても、その機能を何もかも使いこなす人は少ないのではないかと思います。人の能力が足りないという事ではなくて、それほど用途がないのではないかと思います。ですから何年も使っているうちに、「ああ、こんな事も出来ると気がつくーーー中には一度も使わないで機械の一生が終るようなものもあると思います。

ワードプロセッサーなどは大した機械ではないと思いますが、それでも使っているうちに色々なことが分かって来るのであって、神様の福音はワープロどころではありません。私たちが「有難うございます」と頂いて、自分で生活の中にこれを生かして用いますと、どんな素晴らしいものが隠されているか、あとからあとから分かって来ます。

ですから「分かる分からない」と言わないで、先ず頂くことです。ある刀の鑑定師に、「刀の目ききになる方法」を問うたところ、「まあ、とにかく自分のお金を出して、自分の刀を買いなさい」と言われたそうです。自分の刀を買うと、それを大事にして色々見ているうちに、だんだん良いものが見えてくる、ですから「自分で実際に犠牲を払ってやってみる事だ」と言われたそうです。

福音もその通りであって、話を聞いて「ああ、そうか。あんなにすればいいんだな」で終ればそれっきりです。しかし「そんなに良いものを下さるのならやってみよう。とにかく神様が下さるのだから出来ないことはない筈だ」と霊的な積極性をもって行くと、どんな所にでも道を開いて素晴らしい事を味わわせて下さいます。

ワープロを初めて世に出したのは、確かT社だったと思いますが、650万円という値段が付いていました。それでも現在のごく普通の機械よりも機能が少ないものでしたが、次第に安くなる一方機能も上り、F社の機械が 100万円を切ったと言われるころ、このうしろにある（日曜学校用に使っているS社の）ワープロを買いました。それ以後、必要に応じて色々な機械を使っていますが、当時は講習会も何もありませんから、自分でテキストを読んで色々試みては考えて使いこなして行った訳です。その時に私は「人が使う為に作った機械だから、使えないことはない筈だ」ととにかく挑戦しました。最近、色々な人から、「こういうことを教えて下さい」と言われて色々お話しをするのですが、習熟の秘訣などは何もありません。積極的な気持がありさえすれば、どんな事でも道が開けると思います。

神様の福音もその通りで、「この時代にあって、なにものにも負けない信仰を与えよう」と福音を下さるのですから、「よし、やってみよう」と進んで行くなら、一つ々々自分のものとして体験することが出来るのです。人から教えて貰わなくても、自分で苦労してやって行けばよく身につきます。

特に福音として、私たちに与えられたイエス・キリストご自身を知る為に、「分かる分からない」と言わないで、積極的に踏み出して、「では私も信用しよう」といくならば、私たちの前途にどんなに恐るべき道が開けてくるか分かりま

せん。それは身近な人たちのあかしもありますが、聖書に記された多くの聖徒たちが、自分の生涯をかけて保証しているところです。

今日、退かないで一歩進み出て、神様のお与え下さる喜びのおとずれを頂戴して、これを体験する者になりたいと願います。

2:8節、「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である」「わたしの福音と言えるようになりたいと思います。ご一緒にお祈りしましょう。

(1989.1.1. 戸畑教会、新年聖会３)

第四章

万軍の主の熱心
（私は生きている！）

【イエス様によって遂げられるご熱心】　４５

【生きよ、野の木のように】　４７

【姦淫を犯す者を捨てることが出来ない】　４７

【口・目・手のご熱心】　４８

【知らん顔は生ける神を拒むこと】　５０

【なぜ生きた方を死人の中に尋ねるか】　５１

【吐き出したくても、出せない重荷】　５１

【熱い心がぶつかれば物凄いことが起る】　５２

【妨げるものを除けば】　５３

【内から熱くなる】　５４

「そのまつりごとと平和とは、増し加わって限りなく、ダビデの位に座して、その国を治め、今より後、とこしえに公平と正義とをもってこれを立て、これを保たれる。万軍の主の熱心がこれをなされるのである」（イザヤ9:7）

◆「万軍の主の熱心」とありますが、神様とは鳥居の中にじっとして、いるかいないか分からないような方ではありません。また実際にいるとしても、人の行為をうかがって、罰を当るような方でもありません。聖書に記された「万軍の主」である神様は、熱い心をもって、召して選んだ者を生かそう、救おうとしておられます。暗黒の地に光を照らし、重荷も罪も解き放って、自分の民として平安と喜びを与え、私たちを永遠に治めようとされている方です。

イスラエルの民は、神様の前に罪を犯し、背き離れて行きますから、神様は彼らに対して顔を隠されます。すると、イスラエルの民は怖じ惑って、巫女、魔術者、占い師などに頼って行くようになります（イザヤ8:19）。

そこは光もなく夜明けもなく、悩みと苦しみの闇の中で絶望状態です。そのようにこんにちの世界は、身近な所を見ても、少し広く見ても同じことで、真に悩みと苦しみばかりで望みがありません。おもしろおかしく、有り余ったお金を使って贅沢の限りを尽くしても、「えまい（笑）の陰に憂いあり」と歌にあるように、遊び終った時には空しさで、心は悲しみ泣いているのが現実ではないでしょうか。次々に遊びはエスカレートして、極端なことが行われますが、むしろ悲しみや憂いが増すばかりでしょう。伝道の書 4:1に、「見よ、しえたげられる者の涙を。彼らを慰める者はない」とあります。

神様はそういうものに対して、「不従順の当然の報いだ」と冷たく言われるような方ではありません。むしろそういう者を何としても救おうとして下さる方です。

「苦しみにあった地――はずかしめを与えられたゼブルンの地、ナフタリの地」とは、残虐なアッスリヤの侵略を受けた土地で、大変なはずかしめを受けた土地です。しかしのちに神様が救を与えられると、あのはずかしめに代って、神の民として喜んで生きる事が出来るように変えて下さると言うのです。

2節、「暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでい

た人々の上に光が照った」――真っ暗な中に住んでいた人々の上に、大きな光が照る――闇夜に航海していると、小さな灯台の光によってどんなに慰められるか分かりません。しかし神様は暗黒の中にいる民に大きな光を照らして、望みと喜びを与えて下さると言うのです。

3/4節、「あなたが国民を増し、その喜びを大きくされたので、彼らは刈入れ時に喜ぶように、獲物を分かつ時に楽しむように、あなたの前に喜んだ。これはあなたが彼らの負っているくびきと、その肩のつえと、しえたげる者のむちとをミデアンの日にされたように折られたからだ」とあります。

「くびきやむちを折られた」というのは、士師記にある「ミデアンに対する救のことですが、同時にこんにちの私たちに対して、私たちの最も大きな重荷となり、私たちを苦しめる罪――自分でどうする事も出来ない罪を、完全に取り除く為に、イエス・キリストのあがないをお立てになったという預言です。神様は真っ暗なものの中に光を与え、外敵を追い払うのではなく、彼らの内にある罪をあがなう事によって、彼らを解放して喜びに入れて下さるのです。

5節、「すべて戦場で、歩兵のはいたくつと、血にまみれた衣とは、火のもえくさとなって焼かれる」――歩兵のはいたくつや、血にまみれた衣、たくさんの武器が、何年にもわたって燃料として焼かれる――そういう時代が来ると言われます。こんにちも軍備を縮小しようと言う動きがありますが、神様はもっと徹底的な救を与えられます。

その鍵は6節、「ひとりのみどりごがわれわれのために生れた、ひとりの男の子がわれわれに与えられた」ということです。つまりイエス様が数百年のちに、神の子である霊妙な議士としての知恵、大能の神としての権威、とこしえの父と同じ栄光をもって、私たちの所に来て下さる時、そのまつりごとと平和とは、増し加わって限りなく、私たちは神の民としてとこしえに保たれる――これが神様のなし遂げようとされるご熱心です。

この預言の言葉を聞く時、神様のご計画は何と素晴らしいことかと思います。神様とは、人のあらを捜して、バッチと罰をあてる方ではなく、すべてを知り尽くした上でご熱心をもって救われる方です。私たちの惨状の根本原因は、事情境

遇ではなく、私たちの内にある罪である事をご承知で、それを取り除く為にイエス・キリストをお遣わしになったのです。

◆エゼキエル 16:1/22、朗読。これはイスラエルの民に対する神様のお嘆きです。「あなたがたはどんな中から救われたのか」と言われます。「もともとあなたがたの生れはカナン人、あなたの父はアモリ人、あなたの母はヘテ人」――これらはイスラエル民族とは異なるカナンの先住民族です。しかしイスラエルはカナンの地に住むうちに、その風習に馴染み、彼らの神々に仕え、真の神様から離れ、捨てられてしまいました。

生れた時に血まみれで、生れ落ちたままころがされている、そういう状態であった時に、神様がそれを憐れみ見て、「生きなさい」「生きよ、野の木のように育ちなさい」「たくましく育て」と世話をし育てて、自分のものとして洗い清め、美しく飾って成長させられました。

◆ところがイスラエルは神様を捨てて他の男（カナンやフェニキヤの偶像の神々）と姦淫を行って、自分たちが造られ生かされている真の神様を捨ててしまいました。ほかのものについて行っては交際をする、これはどんなに恐ろしい事であるか、と厳しく叱っておられます。

しかし神様は彼らの幸福をもとに返そうとおっしゃいます。はずかしめを負わせて自ら恥じるようにしよう、そして「あなたがたは、わたしが主であることを知るようになる」「私がどんな気持であなたがたにこういう事をしているか、どうか私を知ってほしい」と繰り返し語っておられます。

神様の熱心といっても、興奮した熱心とは違って、何とも言えない、腹の底まで冷たくなり重くなるような思いを乗り越えて、「それでもなおあなたがたを捨て切ることが出来ない。あなたがたを愛して、あたなたがの為にあがないを立てて救うのだから、私の言うことを聞きなさい。そうしてたくましく生きなさい、育ちなさい」と言われています。

その時には、かつてどんな者であったかはもうおっしゃいません。人間は生れた時から悪い事を考える――「だから過去のことは言わないが、何としても私に従って生きるように、ほかのものと姦淫を行ってさまよって行くなら滅びしか

【生きよ、野の木のように】

【姦淫を犯す者を捨てる事が出来ない】

ない。そんな事をしないで自発的に私に心を向けて、何とか生きてほしい」と求めておられます。「生きてほしい。あなたがたは自分は生きていると思っているが、実は死んだ状態で命がないのだ」と言われています。

人間は時間に盲目です、自分についても盲目です。のめり込んで行くと目が見えなくなります。自分が生きている事についても見えなくなって、「何とかなるさーーー周りの人が死んでも自分は大丈夫」と言いながら死んで行きます。いま元気と言っても将来の事は分かりません。今晩、私に対して「もうお前はそれまで、帰ってきなさい」と言われるかも知れません。それは誰にも分からないことです。

神様の目にはそれが分かりますから、時が迫っているとやきもきされますが、強く言うことは出来ませんし、言っても分かりません。言い過ぎれば潰れてしまうかも知れませんし、言わなければ安心してのんびりしてしまうーーーどう言ったらよいか分からないーーーそれはパウロがガラテヤの教会に対して、「わたしはあなたがたの所に行って、どう言ったらよいか分からないーーー声を変えようと思う」と言っているのと同じです。「時が迫っている。今のうちに早く私に帰ってほしい」と熱心をもって迫っておられます。

【口・目・手のご熱心】

◆神様のご熱心についてーーー口の熱心、目の熱心、手の熱心について。

※口の熱心について。イザヤ書 1:18/20、朗読。この 19/20節に、「『もし、あなたがたが快く従うなら、地の良き物を食べることができる。しかし、あなたがたが拒みそむくならば、つるぎで滅ぼされる』。これは主がその口で語られたことである」とあります。

ここには「神様がその口をもって語られた」とわざわざ記されています。神様は非常なご熱心をもって語っておられる訳です。「さあ、帰ってきなさい。緋のような罪であっても、雪のように白く変えられる。紅のように真っ赤であっても洗い上げた羊の毛のように輝くばかりに清められるから、私の言うことを聞いてほしい。もし『そうですか、有難うございます』と従うなら地の良き物を食べるように、あなたがたのうちに恵みが溢れて来るが、拒むならば自分で自分の命を断ち切る事になる。それは自業自得である」と言われます。

※目の熱心について。富める青年（マタイ19章、マルコ10章、ルカ18章、参照）に向かってイエス様が慈しみをもって言われました。「あなたに足りないことが一つある。帰って持っている物をみな売り払って、貧しい人々に施しなさい。そうすれば天に宝を持つようになろう。そしてわたしに従ってきなさい」と言われました。青年は多くの財産を持っていた為に、これを惜しんで悲しみながら帰って行きました。

また主はペテロに、「わたしに従ってきなさい」と言われました。ゲッセマネの園では、「誘惑に陥らないように、目を覚ましていなさい」と言われましたが、ペテロは眠り込みました。また裁判に引かれて行くイエス様から、遠く離れて従い、３度イエス様を知らないと拒みました。そういうペテロを、イエス様は慈しみのまなざしをもって見られました。それは非常な熱いお心を込めて見られたものでした。

※手の熱心について。イザヤ書65章 1/2節、「わたしはわが名を呼ばなかった国民に言った、『わたしはここにいる、わたしはここにいる』と。よからぬ道に歩み、自分の思いに従うそむける民に、わたしはひねもす手を伸べて招いた」とあります。言っても言っても知らん顔をしていれば、人は「もうあまり言うまい。仕方がない」となりますが、神様は、自分の思いに背く民、何度言い聞かせても、そのお声に従わない民に対して、ひねもす手を伸べたと言われます。

イエス様のたとえ話の中に、ぶどう園の持主が収穫を受け取ろうとしてしもべを派遣したところ、辱められたり、殺されたりした。そこで自分の子供を派遣したところ、これも殺されたという譬がありますーーー（マタイ21章、マルコ12章、ルカ20章、参照）。神様は自らが逆らわれても、傷付けられても、殺されてもなお手を伸べて下さるーーー私たちにイエス様を遣わし、命を捨てて私たちの為にあがないを遂げられたとおりであります。「時が迫っているのだ、どうするのか」とご熱心をもって警告を続けておられる訳です。

それでも目が覚めません。「そんなに言わなくてもいいじゃないですか。これまでやって来たんですから、もうしばらくは大丈夫と思います。その時はまたお世話になるかも知れません。最後に天国に行く時にはイエス様を信じますから、

当分このままにしておいて下さい」とやりやすいのです。ですから神様はもどかしいだけではなく、ご自分のお名前に係わると、怒りをもっていらっしゃると教えられました。

◆「生きよ」と言われることは、ご自分がすべてのものを生かす神であると言う宣言です。それに対して知らん顔をする事は、神様が生ける方であることを拒むことになります。ですから、それに対して厳しく「決して許さない」と叱られる訳です。

出エジプト記 3:13/15。これは神様がご自分のお名前（ご性質）を説明されている特別な箇所です。モーセがイスラエルの民を解放する為にエジプトに遣わされる時、神様にお尋ねしました。「わたしがイスラエルの人々のところへ行って『あなたがたの先祖の神が、わたしをつかわされました』と言ったとき、『その名はなんという神ですか』と問われたならば、なんと答えましょうか」と。すると神様はモーセに言われました。「わたしは有って有る者」である。「わたしは有る」というのが、私の名前である。また「わたしはあなたがたの先祖の神、すなわち、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と宣言されました。

「有って有るかた」とは、何も無い所から万物をお造りになった方、ご自分のお言葉をもって、「光よ出よ」と光を造り、次々にすべてのものを造り、すべてのものを定めて下さった方、つまり「すべてのものを有らしめる方である」ということです。

一国の最高権力者が「こうしよう」と定めるならば、それは国の隅々まで行われます。それ以上に神様は宇宙とその中のすべてのものをお造りになって、支配しておられる方です。

そうであるのに私たちはそのような方とは信じません。「神様なんてそんなものーーー神様が生かさなくても俺は生きている。生れたからには心臓が動いているのは当り前だ。植物も動物も自然に生きているのだ」と考えます。

しかし自然に動くものは一つもありません。エネルギーを用いて発電機を回して電気を起し、更に電気をもって色々なものを動かす。全部エネルギーを使用しますから、それに対してお金を払う訳です。自然に動いていると思うものは、一

体誰が動かしているのでしょうか、誰にお金を払っているのでしょうか、誰もそれを考えません。

自然と思うのは、自然ではなくて、神様が私たちを支え命を下さっているのであって、その陰では誰かが料金を払っている筈です。それは神様がイエス・キリストの命という掛け買いのない代価を払って、その代りに私たちに対して良いものを注いで下さっている訳です。それを自分で生きているような顔をし、特別な賜物を我が物顔に使っているのが私たちではないでしょうか。

◆神様を「生きた方」、また「生かす方」と認めないことは、神様にとって耐えられない事です。イザヤ45～48章には、しばしば「わたしが神である」と宣言しておられます。

イザヤ40:25/26に、「『あなたがたは、わたしをだれにくらべ、わたしは、だれにひとしいというのか』。目を高くあげて、だれが、これらのものを創造したかを見よ」と言われています。わたしは永遠の存在者、すべてのものをあらしめる生ける神、生かす神である。そのわたしがあなたがたに対して熱心をもって生かそうとしているのだから、素直に私の言うことを聞きなさい。有難うございました。と生かされてほしい」――それが神様のご熱心であります。

イエス様のよみがえりの記事の中に、「あなたがたはなぜ生きたかたを、死人の中に尋ねているのか」と御使が問われる場面があります（ルカ24:5）が、これは神様のご熱心の問い掛けです。私たちは甦られたイエス様を墓の中に尋ね求めるように、万物の主人公である神様を、締め縄の中に押し込められているもののように、また人間の考え出した様々な宗教のように、「これが神様ではなかろうか」と祭る――しかし真の神様はただお一人であって、人の手の造ったものや、人の考えの中に納まるような方ではありません。ですから「どうして私を死んだ者のように思うのか」とご熱心をもってご自分を現しておられるのです。

◆黙示録3章 14/17節、ここに「わたしはあなたのわざを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。このように、熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいので、あなたを口から吐き出そう――」とあります。ラオデキヤの教会は、7つの教会のうちでも、神様から最

【なぜ生きた方を死人の中に尋ねるか】

【吐き出したくても、出せない重荷】

も酷く叱られている教会です。これらの7つの教会は私たちのモデルであって、私たちはこれによって、自分たちが同じようなものではないかと反省させられます。

神様はこのような熱心をもって、「わたしは神である。生ける神、生かすものである。あなたを生かそうとしているのだ」とおっしゃるのに、私たちが「そうですか。私は結構ですから誰かをどうぞ――私はいずれそのうちに」などと言っているから、神様はそんななまぬるい者は口から吐き出したい、しかし吐き出して捨てる訳にはいかないのです。

ですから神様の心の重荷はどんなものでしょうか、人間でもやり切れない思いがする時に胃が悪くなると言いますが、神様はどんな思いをされるでしょうか。

◆「何とかして熱くなってほしい。私は熱いのだ、あなたがたも熱くなって、火花を散らすようにぶつかろうではないか」と言われています。もしそうなれば、そこに物凄いことが行われるでしょう。

【熱い心がぶつかれば物凄いことが起る】

何か物を造る時もそうでしょう。「こうしなさい」と言われて、「いやだなあと思うが、怒られるから形だけは従わなければという時と、自分から進んで「ぜひこれをやりたい、何とか道は無いだろうか」と取り組む時とは大違いです。進んでやろうとすれば、「夜も寝なくても構わない」という事になります。神様は「どうか私に対する熱心をもって答えてほしい。私はあなたを生かし、あなたの上に私の計画を行って、私の名が崇められるようにしたい」というのが神様のせつなる願いです。

イザヤ 9:7、「万軍の主の熱心がこれをなされるのである」とありましたが、熱心をもって何とかして生かしたい、もう時が無い――植物人間のように死なないでやっと生きているのも、生きていると言えないことはありませんが、そんな生き方ではなく、何とか神様の熱心で満たされて、沸騰するように――パウロは「わたしは神様のために狂気する。死んで甦った方の為に私は生きなければおられない。何とかして神様をお喜ばせしよう」と沸騰するような生き方をしましたが、そのように生かしたい、それが神様のご熱心です。

かつて私たちは冷ややかな者でしたが、そんな者を掘り出して、美しい石に磨

き上げるように、神様はご熱心をもって、私たちの上にご自分の御旨を行い、神である事を現したいと願っておられるのです。

その為に私たちを選び召して、私たちの上にご熱心を遂げようとしてイエス様を遣わして下さいました。「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう」とは、そういう神様の「生きよ。生きてほしい」という強烈な願いが込められているのです。

「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう」――「イエス様が私の為に来て下さった、私の為に死んで下さった」と信頼し、イエス様の甦りの命によって私たちが生かされるならば、どんなに素晴らしい生き方をする事が出来るでしょうか。

私たちの生涯は真に短いものです、ぐずぐずして「ああ、しまった、しまった」と送っても僅かなものです。それより神様が私たちをこんな熱心をもって生かして下さっているのですから、私もまた一日でもよい、神様に対して燃えたぎるようにして生きたいと願います。

中国の思想家孔子は、「あしたに道を聞くことを得ば、夕べに死すとも可なり」と言いましたが、彼はそれが出来ませんでした。

私たちは修養を積み重ねた人間ではありませんが、神様が目をとめて（駄目な者だからこそ熱心をもって）生かそうとして下さるのですから、「有難うございます。こんな者ですが、あなたが召して選んで、ご熱心をもって生かして下さるから、有難うございます。どうぞ生かして下さい。何なればこんな者に目をとめて下さったのでしょうか」と感謝してお仕えするならば、一体どんな事が起るでしょうか。

◆他人を見て、「あの人はどうですか。この人はどうですか。私ばかりそんなにおっしゃっても」とは言えません。真っ直ぐ私に向かって、「生きよ」と語っておられるのです。血の中に転がっていたような者に目をとめて、「生きよ」と生かして下さる。目をとめ、目の熱心、口の熱心、手の熱心をもって私を生かそうとして下さる――そのような神様のご熱心に注目したいと思います。自ら励んで、「その通りです」と信頼して行きたいと願います。そうするならあとは神

様のほうがご熱心をもって遂げなければやみません。

私たちが妨げているものを取り除くならば、神様は待っていましたとばかり私たちの上にご自分のみ心を行われます。私たちが熱心になったら、「それでは答えなければなるまい」という事ではありません。何とかしてと迫るように私たちに対して熱心を注いで下さっていますから、こちらが妨げるものを取り除けば、高圧パイプからたちまち恐るべきものが流れるように、神様のご熱心が遂げられます。

神様が熱心を遂げられる時には、大洪水で堤防が決壊した時のように、「みいぶきで塞き止めた川が、吹きついえるように来られる」（イザヤ59:19)とあります。貯水池の水かさが増して、どっと崩れると大変な力で下流に水が流れますが神様の力とご熱心が満ち満ちているのに、ただそれを塞き止めて、「ちょっと待って下さい、今どき恵まれたら私の生涯はこれからどうなるのでしょうか。熱心もほどほどにしたいと思います」と言う人間のとどめる手があるから神様は働く事が出来ないのです。

イザヤ59:1/2に、「主の手が短くて、救い得ないのではない。その耳が鈍くて聞き得ないのでもない。ただ、あなたがたの不義があなたがたと、あなたがたの神との間を隔てたのだ。またあなたがたの罪が、主の顔をおおったために、お聞きにならないのだ」とあります。もしそれを取り除けて、「神様、そうですかーーー有難うございます。あなたのみ心のままに」とマリヤのように従うなら、神様は恐るべき事を行われます。

【内から熱くなる】

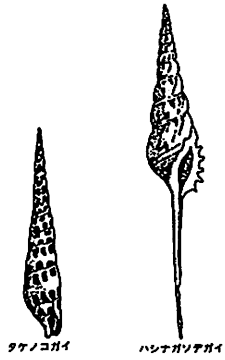
◆マリヤのうちにイエス様が宿り、成長し、やがて人の子として生れて来られたように、私たちの内に主の命が宿って、やがてそれが形を取って、私たちの内から溢れて行く。ですからマリヤの記事は彼女個人のことではなくて、私たちのひな型でもあると思います。「万軍の主の熱心がこれをなされる」と迫られているこの時に、私たちも熱い心をもってお答えしたいと願います。

電子レンジは、食品の中に含まれている水分に電磁波が作用して発熱しますから、お饅頭を入れると、皮はそれ程でありませんが、中の餡だけが熱くなります神様のご熱心は、丁度電磁波をかけるように、私たちの中から熱くして下さいま

す。すると私たちは、「どうぞあなたのご熱心をこの身に遂げて下さい」と感謝するようになります。神様のご熱心、神様のまなざしを受けて、中から熱くなって、何としても神様にお仕えしたいという願いで一杯になります。

「彼と共に死んだなら、また彼と共に生きる」――神様は「私はあなたを生かしたい。何とかして生かさなければ、あなたはもう時間がない」と思われているかも知れません。今日という時に、この方に対して熱い心をもってお答えしていきたいと願う者であります。ご一緒にお祈りしましょう。

(1989.1.2　戸畑教会、新年聖会４)


タケノコガイ
ハシナガソデガイ

第五章

心の戸を開いてほしい

（彼と共に死んで生きる）

【ラオデキヤ教会は私たちのひな型】　59

【厳しい指摘は癒しのため】　61

【内から開くことがなければ】　63

【偽装心中!?】　64

【死んで生きる逆説生活】　65

【ボイスレコーダーに何と録音するか】　67

【神様の右に立って執り成す生涯！】　69

「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう」（黙示録3:20）

◆これは（小）アジヤ地方の　7教会に対する神様の書簡です。そのうち最後に記されているラオデキヤ教会は、他の教会に比べて特に厳しく注意を受けています。「なまぬるい、冷たくも熱くもないーーーなまぬるいので口から吐き出そうーーーあなたは、自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もないと言っているが、実は、あなた自身がみじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見ない者、裸な者であることに気がついていないーーー」と大変きついお言葉です。

神様は何としても生かそうとされているのに、「ああ、そうですか。私も生きているつもりですけど、この上どうしろって言われるんですか。そんな無理を言って、気持が無いものに無理をさせたら自分を偽る事になるじゃないですか？」となりますと、神様に対して逆らうよりもなお悪い状態です。

18節に、「あなたに勧める。富む者となるために、わたしから火で精錬された金を買い、また、あなたの裸の恥をさらさないため身に着けるように、白い衣を買いなさい。また、見えるようになるため、目にぬる目薬を買いなさい」と言われています。これは非常にきつい言葉です。

「あなたは、お金持と思っているが実は貧しい者である。豊かになって何の不自由もないと思っているが、実は、みじめなあわれむべき者である、裸である。着飾って贅沢をして、自分は大した者だと思っているかも知れないが、自分の事は全く見えないでいる」と指摘されています。

人に向かってお上手を言うことも余り気が進みませんが、痛い事よりはよほど言いやすいでしょう。「あなたは素晴らしい、なかなかセンスが良い」と誉めることはたやすくても、正面きって、「あなたは目が見えないもの、裸でみじめな者だ」とは言いにくいことです。

神様が私たちの真相を指摘されるのですから、遠慮される事はないのですが、神様であっても言いづらいもののようです。ある所には、「自分の声を変えよう

と思う」と言われています。強く言ったら反発するかも知れない、潰れてしまうかも知れない。しかし、優しく言うと、何のことか分からないでキョトンとして気が付かないから、強く言わなければならない。しかし言いにくい。そこで「自分の声を変えようか」と言われています。

そんな思いをされる神様が、私たちに対して（ラオデキヤ教会は私たちの型です）辱めるような事をあえて言われるのは、私たちを叱って、「お前のような奴は駄目だから捨ててしまう」と言われているのではありません。むしろ逆に、私たちのすべてを知り尽くしておられるから、その欠けたところを補おうとされているのです。

土地長者になって「何十億円儲かった、株の売買で何億円儲かった」と言っても、それはまた消えてなくなってしまうものです。お金を持つ事が幸福かどうか――何日か前に、現金輸送車を強奪して３億円を奪った犯人がいますが、今頃そのお金を持って喜んではいられないと思います。びくびくして決して幸福ではないでしょう。

正当な経済行為で儲かるのは、悪い事ではないに違いありませんが、富は人を幸福にはしません。ですから「本当に富む者となるために、わたしから火で精錬された金を買いなさい」と、私たちに真の富を与えようとしておられるのです。

神様が私たちに「恵みをもって買いなさい」と言われる賜物は、お金を払わなくてよいものです。もしお金で買おうとすればとても高くて買えません。ある名画が50億円したと言われますが、神様の宝は私たちの熱心、行いで買おうとしても買えません。

しかし、イザヤ書55章には「ただで買いなさい」とあります。不思議な言葉であって、「ただ」とは買うのではなく、貰うことです。それはイエス様が十字架にかかって、罪のない血を流して下さったので、その代価をもって、私たちに天国の宝を無代価で下さると言われるのです。

「あなたの裸の恥をさらさないため身に着けるように、白い衣を買いなさい」とありますが、私たちは自分が見えない者です。だから「その裸の恥をさらさないために、白い衣を買いなさい」と言われます。それはイエス様の十字架の血に

よって洗われる事で、「こんな者ですがイエス様が私の罪の為に死んで下さいました」と受け入れるなら、私たちは神様の前に輝くような白い衣を着せられます。そして清い者と認められます。

本当は清くなかった者ですが、清い者と認めて下さるのです。それは偽りではなく、物事を判定して最終決定を下される方が認めて下さるのですから、何よりも確かなことです。自分が汚いと思っても、神様が最高だと言われれば、間違いなく尊い者であって、汚い者の汚れ、駄目な者の駄目を、イエス様が背負って下さったから正しい者とされるのです。

「見えるようになるために、目にぬる目薬を買いなさい」とありますが、自分の事は見えず、物事の真相を見ることが出来ません。しかしイエス様の十字架という目薬を買うと、すべてのことが見えるようになります。聖徒パウロは、「この世はわたしに対して十字架につけられた。わたしがこの世に対するのも同じである。この世とわたしの間には十字架が立てられている。わたしは十字架を通して世を見るとき、わたしがどのように生きるべきかは自然に分かってくる」と言っています。

こんにち神様の前にどうして、自分が見えないで生き方を見失い戸惑っているか――それは「自分は、これが幸福でこれが良いと思う」と神様の物差しを捨てて人の欲だけで求めるからそうなるのであって、私たち個人も、日本国も、また世界の国々も、すべてこんにちの人々の生き方は、結局自分でこれが良いと思いながら、実は神様の前に道を踏み外したきわめて危険な状態ではないかと思います。

◆ラオデキヤ教会（私たち）に対してきつい言葉で責めておられますが、それは私たちを辱めるためではなく、駄目だから捨てるのでもなく、むしろそういう者を神様の御旨にかなうように整えようとしておられるのです。

19節、「わたしはしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって悔い改めなさい」――私たちを捨てるために神様が指摘をされたのではなく、癒すため、造り替えるため、新しくする為に呼び掛けておられることが分かります。

エレミヤ29章 10/14節、朗読。この11節に、「わたしがあなたがたに対してい

だいている計画はわたしが知っている。それは災を与えようというのではなく、平安を与えようとするものであり、あなたがたに将来を与え、希望を与えようとするものである」とあります。

イスラエルは捕囚としてバビロンに捕らえ移されようとしていました。それを多くの人々は、神様から捨てられる、呪われた結果であると理解しました。そこで、多くの人々は「そんな事はある筈がない」と考え、預言者エレミヤを迫害しました。しかし神様がエレミヤを通して言われたのは、「駄目だからあなたがたを捨てるのではない。外国に捕らえ移されて70年間、捕虜の生活をするが、それがあなたがたの将来の為である。私はあなたがたに平安を与え、希望を与えようとするものである」と言われたのです。

今から40年あまり前に、わが国は敗戦の結果、連合軍に占領されました。その時にはお互に惨めな思いをしたものです。最高司令官マッカーサーが、「日本の占領政策はキリスト教精神に基づいて行う」と言いましたから、昔の捕囚の生活に比べれば天国のようであったと思いますが、それでも鉄道の車両には、白線を入れてその中に進駐軍がふんぞり返り、日本人はひたすら奉仕をさせられ、惨めな思いをしました。

イスラエルがバビロンに捕らえられた当時は、今とは比較にならない時代ですから、そんな中で70年も暮らすのは大変なことだったと思います。２世代、３世代に亙って捕虜の生活をするーーーこれではとても祝福とは考えられないと思った訳ですが、それが実は神様の大きなご計画のもとにあり、恵みのわざであった訳です。彼らは再び国に帰って神様の前に涙を流して感謝し、神殿の再建をしました。確かに神様はイスラエルの民に対して、真の癒しと平安を与えられたのです。

病院に入って手術をしようとする場合、様々な検査をします。最近では検査機器が発達していますから、胃カメラを飲んだり、心臓の血管の造映をしたり、カテーテルを入れたりします。これらは被検者にとってもかなり苦しく危険も伴ないますが、それは決して苦しめる為ではなく、癒すためであり、必要な処置をする為の準備であります。

同様に神様は私たちに厳しく光を照らして、欠けた所をあばかれ、あるいは辱められますが、それは私たちが神様の前に全く癒され、救われるために必要なことである訳です。

福音は良いものの上に良いことを加えて、磨きをかけ、もっと美しく、もっと良くして、あるレベル以上になったら合格とする――そのようなものではありません。

むしろ律法に照らされ、罪の自覚が生じて、「私は駄目な者です」と悔いて、イエス様を信ずる生涯に改めることによって救われるのであって、罪を曖昧にしたままで、「何とかして下さいよ」「それではもう少しどうにかして上げようか」というものではありません。

◆黙示録3章20節、「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている――」神様は私たちの心の戸を叩かれます。ある時は強く、ある時は弱く、あるいは静かにノックされることもありますが、ハッと気付いて、「そうだ、私は今呼び掛けられている。イエス様の血によって精錬された金を下さり、真の富を与えて下さる。白い衣を与えて神様の前に清い者として立たせて下さる。目薬を下さって、すべての真理を悟らせて下さる。こんな者のために十字架を立てて下さって、有難うございました。今までのことは全部裸になろう」と戸を開くと、そこで初めて交わりが出来ます。

人間でも熱烈な気持で相手に呼び掛けているのに、相手が知らん顔をしていたら何も始まりません。「この人に言っても始まらないから、もう止めておこう」ということになります。しかし、一言声をかけた時に、パッと目を開いて、「あ、そうですか、有難うございます」と言ってくれれば、誰でも黙っていることは出来ません。必ず命の交わりが出来てきます。

神様の前には、何か立派なことが出来たとか、熱心が出来たというのではなく、熱い心をもって呼び掛けられている事に気付いたら、目覚めてお答えすること――それだけです。答えようとすれば心が開かれます。

「だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら」とありますが、レンブラントの描いた有名な絵で、つたの生えた扉をイエス様がカンテラを下げて叩いている

ものがあります。扉のノブは内側しか付いていませんから、外から開ける訳にはいきません。私たちの心もその通りであって、人からどんなに強制されても、自分から進んで開けようとしなければ決して心を開く事は出来ません。イエス様は戸を叩かれますが、開けるのは内からです。

忍耐をもって、「さあ、戸を開くなら私はその中に入ってあなたと食を共にして、最も素晴らしい交わりをもとう。しかも私と共に私の座につかせよう」と叩いておられるのですが、私たちが自分から進んで、「そうだ、心を開こう。イエス様が呼び掛けて下さっている」との自覚が出来なければ、いくら外から叩いてもどうにもなりません。完全に防水された車のドアを閉めていれば、どんなに激しい雨が降っても中にいる人は平気なもので、ワイパーをかければ何ということはありません。

神様からどんなにノックされても、恵みの言葉が注がれても、間違っているぞと注意されても、知らん顔をしてワイパーのスイッチを入れて、「どうって言うことはない」という気持でいれば、決して交わりは出来ません。イエス様が私たちの為に命を捨てて下さったと気付いて、「ああ、そうだった。私のためだった」と心を開くならば、そこから命の交わりが始まります。もし冷たく知らん顔をしていれば、決して物事は始まりません。

【偽装心中!?】

◆心中とは「一緒に死んでくれ」と言うことですが、イエス様は私たちの為に死んで下さったのに、私たちが、「イエス様なんかどうでもよい。私は自分の生活を守り楽々と暮らしていればよい。信仰は教養の足しか、何かの情報の足しにしよう」と言っているなら、何事も起りません。イエス様が、「わたしと一緒に死んでくれ」と言われているのですから、私もその方に対して自己中心を離れて従う、何としてもお答えしようとするならば、どんな素晴らしい交わりが起るかも知れません。

「心中しよう」と言うくいらいですから、そういう人たちが心を合わせて前向きに生きて行くなら大変なことになるでしょう。ところが偽装心中のように、「一緒に死にましょう」と言いながら、自分にその気がない。相手を刺して自分だけが生き残ったら大変なことになります。本当に二人にその気持があっても、

一人だけ残れば殺人罪に問われますから、悪意で偽装心中をしたら大変な罪になるでしょう。

私たちがイエス様の熱烈なお気持に対して、「私はここでじっとしていましょう。イエス様が死んで下さるのなら――（どうぞ死んで下さい）」とまでは言いませんが、「死なれたのですか、そうですか」――これは神様の前の偽装心中かも知れません。「イエス様は死んで下さい。私はピンピン生きていましょう」と言っていては、どうして許されるでしょうか。

人間は神様から造られ、神様によって生かされています。この暗黒の時代に、何とか私共を生かそうと神様から福音の手が伸べられているのに、その手を払い退けて、知らん顔して、偽装心中をするような事をしていたら、決して祝福にあずかることは出来ません。再び最初の状態に戻るかも知れません。戻るときには7倍悪くなると書いてあります。一つの悪鬼を追い出された人が、再び悪鬼に取り付かれる時には、7つの悪鬼を連れ込むと言われています。（マタイ12章、マルコ11章）

◆主は私たちのために死んで下さったのですから、私たちもまたその方に対して自己中心をやめ、イエス様のみ心に従うならば、かえって捨てたものを満たされます。それがパラドックスの生涯です。「自分を捨てたら何もかもおしまいだから嫌だ」と思うのは誤りです。

マタイ16章 21/26節、朗読。これは弟子たちの信仰告白、及びそのあとの記事ですが、ペテロが、イエス様に「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と申しあげると、イエス様は大変おほめになって、「おまえはさいわいだ――その信仰の上にこそ教会が建てられる。その信仰を持つ者に対して天国の鍵が授けられる」と言われました。

すぐそのあと今度はペテロが、「先生、あなたは今からエルサレムに行って苦難を受け、殺されるとおっしゃいますが、そんな事はあってはなりません。とんでもない事ですからやめて下さい」と言いました。それは先生思いのようでしたが、イエス様は「サタンよ、退け。わたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」と強く叱られました。ペテロは良い気

持から言ったのですが、それは自分の肉、人間的な先生恋しさからであり、自分たちが淋しくなっては困るから言ったのであって、神様の御旨はどこにあるかを知らなかった訳です。

そこでイエス様は逆説について話されました。「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう」と。私たちは生きようと思えば、何としても死なないようにしなければならないと思いますが、イエス様のおっしゃる事は逆でした。私たちがもし神様の前で真に生きようとするならば、自分を捨てなければならないという事です。

捨てるとは、刃物やピストルで自分の体を傷付けることではなくて、神様に対して自己中心な思いを捨て、生き方を捨てて、自分の為に死んで下さった方に対して答えて行く。すると「自分を捨てたら何もなくなってしまう」と思いますが、捨てたものを豊かに与えられて本当に生きることが出来るのです。

神様に従うと全く自分の自由を失って、「（仏教で言うならば）墨染めの衣を着たような生活をしなければならないから嫌だ」と思いますが反対で、捨てたと思った自由がむしろ与えられるのです。これが「捨てて拾う」「死んで生きる」「負けて勝つ」というパラドックスの生活です。

「イエス様が呼び掛けて下さっているのだから、私もその方に対して従おう」と思い切って踏み出すと真に生きることが出来ます。子供が自分の自由を遂げようと家を飛び出せば、自由どころか、むしろ大変なことになります。家にいればこそ自由がある訳で、同じように私たちは全世界、全宇宙の支配者である方のもとにあって、本当の自由と力と知恵とを与えられます。自己中心は自由のはき違えであって、むしろ挫折、失望に終ってしまいます。

私自身がその通りであって、自己中心に生きていた時は結局行き詰まりでしたが、自分を捨てて神様によって生かされ、この方をいつも思い、「有難うございました」と従って行くと、確かに自由を与えられ、力も知恵もむしろ年毎に盛んになって、このように支えられています。これは世の中の生き方とは逆のようですが、神様は実際にそういう事をなさる方です。

◆神様は今年、恵みの聖会を開いて、この三つのお言葉を下さいました。何と

かして私たちを生かそうとして、救の道であるイエス・キリストを示し、これこそ福音である、これを味わい知るようにと語られました。

私たちは、聖会は毎年の事だからと思いますが、そうではないかも知れません。私がいつも思うのは、聖会はいつ終りになるか分からないという事です。それは今日かもしれません。ですから私が時期を失って、「しまったあの時に、もう少しこうしておけばよかった。あの時呼び掛けられていたのに」と言っても追い付きません。

時間は取り戻す事ができません。自分が出来る時にすぐに、しかも進んで答えるべきであります。「そうですか、ではやればいいんでしょう。しましたよ」という態度ではなく、進んで聞く、その時に人間として本当の生き方が出来るのです。

パウロの生活がそうでした。彼は沸騰するような生涯を送りましたが、それは誰に強制された訳でもありませんでした。何かをしたら神様から恵まれるからやろうとしたのではなく、「自分のような者を神様が子供として引き上げて下さった」と、その恵みに感じて、彼は進んで内から扉を開いたのです。私たちは今という時がどんなに尊い時期であるか知る事は出来ませんが、機会を失わないようにしなければならないと思います。

雅歌5章 2/8節、朗読。これは貴重な機会を失った人の失敗の記録です。2節に、「わたしは眠っていたが、心はさめていた。聞きなさい、わが愛する者が戸をたたいている。『わが妹、わが愛する者、わがはと、わが全き者よ、あけてください。わたしの頭は露でぬれている』と言う」とあります。ある人がうつらうつらと眠りかけていると、入り口の戸をたたかれました。「眠っていたが、心はさめていた」と書いてありますから、半分眠った状態だったのでしょう。

愛する人が戸をたたいて、「愛する人よ、わたしはあなたを待ちこがれて、夜露でぬれてさっきから待っているのです。叩き続けているのです」と呼びましたが、中の人は「もう着物をぬいで、足を洗って寝床に入ってだいぶ暖まってきた。今起きたら寒いし、足を汚したらまた洗わなければならないーーー」と戸惑っているうちに、掛け金に手がかかって開きかかったので、「そんなにまで私を思っ

てくれているのだろうか、と起きて行ってみると、掛け金から没薬が流れて貫の木の取手の上に落ちていた」とあります。

没薬は死体にぬる薬で、イエス様を象徴しています。イエス様が私の所に尋ねて来られた、「そうだったのか」と思って戸を開きましたが、そこには愛する者はすでにおらず、帰って行かれたあとでした。

自分の中からすっと力が失せて、慌てて捜し始めましたが、町をまわる夜回りらが、かえって自分を撃って傷つけ、上着をはいだ――こうして大変ひどいめに会ったという失敗談です。

私たちも今、呼び掛けられているのではないかと思います。「わが愛する者よ、わたしは夜露にぬれ、たたき続けてきた」と。しかし私たちは中で寝ています。ふとイエス様の御愛を覚えて、起きて行った時には時期を失ってしまって、再び取り返すことが出来ないのではないでしょうか。

ヘブル人への手紙2章2節には、「わたしたちは聞かされていることを、いっそう強く心に留めねばならない。そうでないと、おし流されてしまう」とあります。神様のお言葉を聞きもらすならば、取り返しがつきません。私たちは「事情がどうにか変ったら答えよう」と考えますが、それは出来ません。我々に出来るのは、今、答えることだけです。いま残されている時に、いま答えることです。

「またにしようは悪魔のささやき」と言われますが、「またにしましょう。いいじゃないですか、そんなに言わなくても、また明日があります」と思いますが、「明日にしましょう」という事は、明日必ず生きていると誓うことになります。今晩、死なないと誰が保証することが出来るでしょうか。ですからそれは言えません。いま呼び掛けられて、いま答えますという事でなければなりません。

もし出来ないなら出来ないで「ノー」と答えるならば、神様は助けて従うことが出来るようにして下さるに違いありません。どちらともつかないで、「えへへ」とやるのかやらないのか分からないような顔をしていますと、いたずらに時間を失うだけです。「この人はどうするつもりだろう」――神様は見通しておられますが、待っておられます。しかしそれにも時があります。悔い改める時を失い永遠の滅びに定められたら決して取り返しがつきません。

永遠の悔いを残すのではなく、永遠のほまれ、「本当によかった。神様が私を召して選んで、あの時に十字架の血によってあがなって下さった。有難うございました」と永遠の感謝、賛美をしたいものです。

航空機事故の際に問題になるのは、ボイスレコーダーですが、航空機が墜落した瞬間から30分くらい前を自動的に録音してあります。30分より前は自動的に消えて行く訳です。従ってこれを回収すれば、直前の操縦室内の会話が録音保存されており、あとは何年たっても更新される事はありません。

私たちが最後の時は、そんな余裕もないかも知れません。「どうなんだ」「はい、従います」と言えば、それが永遠に繋がって行きます。しかし「いや、またにしましょう」と言えば、そのまま最後の録音が残されて、「またにしましょう」「またにしましょう」「またにしましょう」ーーーと永遠に残ります。

神様から永遠の火に投げ込まれたならば、永久に「熱い、熱い、熱い、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいーーーあの時に悔い改めておけばよかった」と言い続けなければなりません。いざという時に断ち切られて、その状態が永遠に残るとしたら、私たちは今という時をどのように生きるべきでしょうか、真におごそかな思いがいたします。

沈黙は拒絶の回答です。「どうなんですか」と問われて、「沈黙ーーーーーー」「いやなんですね」「ーーーーーー」と言っているうちにテープが止まると、そのまま永遠の空白ですーーーこれも永遠に後悔しなければなりません。

◆黙示録3章にかえる。20節に、「だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である」とあります。

主が私共のうちに入って、共に食事をして下さるということは、ただ「これでよかった」という事で終るものではありません。「勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう」とあります。イエス様は父なる神様の御旨に従って、自分に死に尽くされました。多くの人々は、「あの世を騒がせた人もこれで

おしまいだ」と言い、処刑者たちも安心したでしょう。しかし、イエス様を従わせた父なる神様は黙っておられませんでした。彼を死人の中からよみがえらせ、すべての名にまさる名を与え、永遠に救主とお定めになりました。

イエス様と同じように従うと、私たちも同じように神様の右に座らせて下さる――この世の中で冗談に、「神様のような人だ」とか、「私は神様じゃないんだから」と言いますが、事実、私たちを神様の右に立たせ、祈りによって神様の手を動かすようにして下さる――これによって私たちはすべてのものを支配するのです。

自分の勝手をして、「私が一番偉いんだ」と言う意味ではありません。神様の御名が崇められるように、すべてを支配する――これは創世記において、人間の創造の初め与えられた使命です。詩篇 150篇6節に、「息のあるすべてのものに主をほめたたえさせよ。主をほめたたえよ」とあります。私たち自身が神様をほめたたえるのは勿論、造られたすべてのものが神様の名をほめたたえるに至るよう神様に祈ります。「あなたが霊を送られると、彼らは造られる。あなたは地のおもてを新たにされる」（詩篇104:30）とあるからです。

「主は全地をあまねくみそなわし、おのれに向かい心を全うする者のために、力をあらわしたもう」（歴代志下16:9）とあります。神様が私たちを求められるのはその為ですから、自分が高ぶることは少しもありません。むしろこんな者に尊い使命を与えて下さると知れば、ただただ感謝するだけです。

「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もわたしと食を共にするであろう」――主は熱い思いで私たちに呼び掛けていらっしゃいます。偽装心中をしないで、自分を捨てて、イエス様と共に生かされ、神様に喜ばれる生涯を送らせて頂きたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。

（1989.1.2 戸畑教会、新年聖会５）

第六章

命の交わりにあずからせる

（愛する者よ出てきなさい）

【私たちの喜びが溢れるため】　７３

【命の交わりに入る法】　７３

【光の中に出れば暖かくなる】　７４

【放蕩息子の首を抱いて迎える父】　７５

【相互に内住する関係】　７６

【光の中を歩くとは】　７６

【罪ほろぼしという考え方】　７７

【罪がないという態度が罪】　７８

「しかし、神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである」(1ヨハネ1:7)

【私たちの喜びが溢れるため】

◆ヨハネの第1の手紙が記された目的は、私たちに父なる神様と、子なるイエス様との交わりにあずからせ、私たちに喜びを満ち溢れさせるためであるとあります。この世の事にニコニコと笑う楽しみ喜びではなく、神様と共にある喜び――霊の満ち足りる喜びを満たそうとしておられるのです。

「もし、わたしたちが彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう」とおっしゃる方は、私たちを何としても生かそうとされるのですが、どういう生かし方をされるか。共に生きるにも色々あると思います。私は先程、丸を二つ書いてみました。丸を二つ並べて書く――これも共には違いないと思います。丸と丸を着けて書く――これも共です。丸を交わらせる、一方の中に入ってしまう、溶け合って一つになる――こうなると二つではなくて、一つの太い円になってしまいます。このように色々な関係(生き方)があると教えられました。

アモスの手紙3章3節に、「ふたりの者がもし約束しなかったなら、一緒に歩くだろうか」(二人もし相会せずば、いかで共に歩かんや――文語訳)とあります。神様が私たちを特別に愛して召して下さったからには、私たちにも期待をされる訳です。夫婦はお互いに相手を愛し敬い慰め守って行く責任があるように、神様は私たちと共におられて、特別な愛を注がれると同時に、私たちに神様を愛することを求められております。それによって私たちが神様と全く一つとなって生きるようにと期待しておられるのであります。

【命の交わりに入る法】

◆この命の交わりに入るにはどうしたらよいのでしょうか。難行苦行し、特別な奉仕をして、みんなから「アッ」と驚かれるような事をすれば目を止めて頂けるのでしょうか。そうであれば、失敗したり倒れたり退いたりしている私たちは、到底このような交わりに入ることは出来ません。しかし今晩、神様が私たちに対して、「喜びを満たす――交わりに入れる」と言われているのには、神様の奥義がある訳です。

5/6節に、「神は光であって、神には少しの暗いところもない。神と交わりを

していると言いながら、もし、やみの中を歩いているなら、わたしたちは偽っているのであって、真理を行っているのではない」とあります。光には従わないで、神様と交わりをしているーーーそんな事はあり得ません。心は離れているのに、ただ教会に近付き、聖書を読み、讃美歌を歌っているーーーこれは偽りでしょう。そこには神様との交わりはありません。人間でも、自分に対して人がどういう気持を抱いているかは何も言わなくても分かります。

神様は人間ではありません。人間以上に私たちを見通しておられますから、もし光を避けて闇の中を歩いているならば、そんな者とは交わりを持って下さらない。しかし神様は今晩、そういう者をも招いておられると思います。7節に、「神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである」とあるからです。

「光の中に出て、光に従いなさい、光の中を歩きなさい」と求めておられます。私たちが自分の生き方、考え方ーーー「私はこう思います。信仰なんて、今どきそんな事に熱中するよりも、私は世の中の人と同じように生きています」という自分の思いに死ななければ従うことは出来ません。

「もし彼と共に死んだなら」とは、そこのことです。「私はこうして生きて行きます。もともとこうして来ました。みんなもこうしていますから、これが良いと思います」ーーーそれは神様のみ心ではありません。神様は何を求めておられるか、「わたしの光の中を歩きなさい。世の中の考えや自分の思いを離れて、わたしの光に来るように」と招いておられます。

お言葉に従うことは、自分の思いを離れることであります。「神様は光を照らしていらっしゃるのだから、その中を歩こう。いつも私を照らして門戸を開いて下さっていたのに、自分は今まで避けて来た。これはいけない」と気がついたら出てきなさいとおっしゃるのです。

◆光の中に出ると理屈ぬきに暖かくなり、明るくなり、清められます。黴菌は死に、命が生み出されます。植物は太陽の光線によって光合成をして自分の体を造ります。それによって動物が生き、また私たちが生きることが出来ます。これ

【光の中に出れば暖かくなる】

は水中でも陸上でも同じです。

同じように私たちが神様の光の中を歩くと、無条件で暖かくなり明るくなり清くなり命を生み出していきます。これは理屈ではなく、実際に行動すればその通りになる訳です。

私たちがもし神様の招きの光に従って、自分を離れて一歩踏み出すと、神様の命が私たちに通って来ます。「御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである」とあるように、イエス・キリストの十字架の血によって罪が許され、再び罪を犯さないように心の底まで清めて下さいます。すべての不義から清めるとはそういう事です。

「とにかく文句なしに私に帰ってきなさい、帰ってきさえすれば神様は必ず許しを与えて下さる」とおっしゃるのです。これは甘いように思われますが、決して甘くはありません。私たちの罪の為にご自分のひとり子を十字架につけるという莫大な犠牲を払って下さったから許して下さるのであって、これは特別な恵みの賜物です。

◆ルカ15章 11/32節までは、放蕩息子の譬です。この父は、私たちの父なる神様のひな型です。もし私たちが心から悔い改めるならば、父なる神様は私たちに対してどんなに大きなご愛をもって迎えて下さるか――「なぜあんな事に使ったのか。帰って来たのはよいが、無駄な事に使って馬鹿らしかったではないか」とは一言も言われません。

息子は「お父さん、ごめんさない。雇い人としておいて下さい、下男の部屋に泊まらせて下さい。子供でなくてもよい」と言っても、お父さんは黙って首を抱いて接吻し、家の者に「さあ、早く一番よい着物を出してこの子に着せてやれ。指輪を手にはめ、履物をはかせなさい。出来るだけの御馳走を作って楽しもうではないか」と迎えたのです。

私たちは悪いことをし、失敗すると恐れます。それは良心があるから当然でしょう。神様を誤解してはならないのです。神様は私たちの罪を責めるおつもりなら、何の調べも要しません。「エイ！」と殺してしまうのは簡単でしょう。

しかし私たちに呼び掛けて、「光に従え、私の所に出てきなさい」と招いて下

さるのは、私たちに悔い改めさせてその罪を許し、放蕩せずに前から一緒にいた子供（兄のこと）以上に、喜び迎えるためです。こうして「この息子は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見付かった」と喜んで下さるのです。これが神様です。

一度失ったものを見つけると確実に愛着が増します。「あの時にこれは一度無くした――しかしまた帰って来た」と感謝します。同じように神様は99匹の羊を置いて、迷った１匹を尋ね求めて下さいます。そして、99匹にもまさって喜んで下さるのです。

【相互に内住する関係】

◆雅歌２章1/17節、朗読。雅歌は、ただ男女の恋愛関係を歌っているのではなく、神様と私たちとの麗しい愛の関係を歌っているものです。「わが愛する者はわたしのもの、わたしはわが愛する人のもの」（雅歌6:3)と、全く一つとなり、イエス様が子羊を抱かれるように、彼の左の手がわたしの頭の下にあり、右の手がわたしを抱いてくれる――私たちがイエス様と共にあって全く一つになる――これは私たちの最も素晴らしい愛の関係です。

結婚はキリストと教会の一体なる事の型であると言われているように、お互に一つとなる相互内住関係――イエス様が私たちの内に住み、私たちがイエス様の内に住む関係です。詩篇にも麗しい様が書いてあります。例えば、63篇に、「髄とあぶらとをもってもてなされるように飽き足りる」とあり、16篇には、「わたしは動かされることはない――あなたの前には満ちあふれる喜びがあり、右にはとこしえにもろもろの楽しみがある」と歌われています。

またある歌には、「我もなく、世もなく、ただ主のみいます」とあります。ほかには何も見えない、聞こえない、ただ主がそこにいらっしゃる。私を包んで下さるので、私のすべては主のうちにあり、主と溶け合って、二つである事が分からなくなってしまう――このような一致を与えて下さるのが神様のみ心であります。イザヤ書43章には、「汝はわがものなり」とあります。

【光の中を歩くとは】

◆１ヨハネ 1:7、「神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである」――光の中を歩くとは、行い正しく完璧

な生涯を送る意味ではなくて――もしそのような完全を期待されるなら、人間には出来ないことであります。

もしそれが出来たと言えば偽善になるかも知れません。神様は全部を知り尽くしておられますから、私たちの生涯のビデオテープ――心の動きまでも記録されたもの――を見せられたら、とても恥ずかしくて見ている事が出来ないでしょう。

ですから、行いすまして、いわゆる聖人君子のような事をする意味ではなく、「私は神様の目の前においては隠れるところがありません。全部あなたが知り尽くしておられます」と自分の心を開く――もともと知られているのですから、「私はこんな者です、神様の前には全く裸です」と認める訳です。

9節、「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」とあります。人の前で懺悔して、「私はこんなことをしました」と言うのは、本当に認めることにはならないでしょう。自分の口で言い尽くすことの出来ないものがたくさん隠れているかも知れません。しかし神様は全部知っておられるのですから、私たちが肩の力を抜いて、神様の前に全部裸になるのが真の罪の告白であり、光の中を歩くことです。

◆雅歌2章14節に、「岩の裂け目、がけの隠れ場におるわがはとよ、あなたの顔を見せなさい。あなたの声を聞かせなさい」とありますが、崖の岩かげに入っていれば、春になっても冷たくて寒いでしょう。出て来ればそこはもうすでに暖かくなっています。同じように、「光の中に出てきなさい」と言われ、すでに春は来ているのですから、被っているものを取りのけるならば、神様の光がパッと照って、たちまち暖かく明るくなる訳です。

そんな愛をもって、すばらしい交わりの中に私たちを招こうとして呼び掛けておられるのですから、今晩、目覚めてお答えしたいと思います。決して私たちの側から何か良い事をしなければならないのではありません。「罪を犯したら、罪ほろぼしのために何倍も働け」と言われるのでもありません。神様は私たちをよく知っていらっしゃいます。罪ほろぼしなど出来ないのをよく知っておられます。

青の洞門を掘ったお坊さんは、「これだけやったから人殺しの罪を許してもらえるだろう」と思ったかも知れません。人は「感心なこと」と言ったかも知れませんが、神様の前には罪は消えていません。むしろ一生懸命に働いて罪ほろぼしをしようと思っただけ、罪が増し加わったかも知れません。イエス・キリストの十字架によらなければ罪は許されません。

自分で働いて罪ほろぼしをし、つぐないをするのではなく、イエス様が私のために十字架にかかってあがなって下さったーーー「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である」と言われていますから、これ以外に喜びのおとずれはありません。

「この福音によってすべての罪が許され、不義が清められますから有難うございます」と何もかもかなぐり捨てて裸になると、神様は私たちを喜んで迎えて下さいます。放蕩息子のように、立ち返る前にお父さんのほうから走り出て私たちを喜び迎えて下さるのです。

今晩も、「愛する者よ、光の中に出てきなさい」と私たちを招いて下さっています。光の中に出るというよりも、自分の被り物、まぶしいからとかざしている手をのけて、ありのまま光に照らされるーーーそうするならば暖かい命の交わりがすぐにやって来るのであります。

【罪がないという態度が罪】

◆1ヨハネ 1:8、「もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、真理はわたしたちのうちにない」とありますが、これは「お前は自分で罪がないと思っているが、何かあるだろう」と言う意味ではありません。「私は罪がありません」という態度そのものが罪なのです。

ですから神様の前に、今晩、有りのまま、光に照らされたいと思います。汚い所が見えると恥ずかしい、隠しておきたいと思うのは人情かも知れませんが、神様の前にはどんなに隠しても、どんなに飾っても全部見通されています。

「わがすわるもを、立つをも知り、遠くからわが思いをわきまえられますーーーわたしの舌に一言もないのに、主よ、あなたはことごとくそれを知られます」（詩篇 139篇）とあります。私たちは神様の前にそういう者であることを心にと

めて、こんな私たちの全部を知り尽くした上で、ご自分との命の交わりにあずからせようとしておられるのですから、どれ程感謝しても足りないと思います。今晩、被り物を全部投げ捨てて、神様の光の中に裸になって出て行く者でありたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。 (1989.1.2 戸畑教会、新年聖会6)

アズマニシキ

第七章

彼と共に支配者となる
（死をも支配する権威）

【救はほかにない】　８３

【恥をもいとわず十字架を忍ばれた主】　８４

【イエス様のご生涯は私たちの模範】　８５

【彼と共に死ぬとは】　８６

【たちまち渦中に巻込まれる】　８７

【世の常識を越えた救】　８８

【耐え忍ぶなら支配者となる】　８９

【権威ーーー主が受けたものを委ねて下さる】　９０

【万物支配権には死も従う】　９２

【神生・神癒の実行】　９３

【彼を否めば否まれる】　９４

【攻撃は最良の防御】　９５

「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう。もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるであろう」(2テモテ2:11)

◆「彼」とは、イエス・キリストのことです。イエス・キリストは私共を救う為に神の子の位を捨てて地上に下り、私たちのすべての罪の為に十字架にかかって死に、3日目に死人のうちから甦られました。神様に対して全く従順に従われたので、従わせた方が放置されなかった訳です。

人間同士でも、何かをお願いして、全くその通りに従って下さったら、知らん顔をする訳にはいきません。言葉か物か何らかの報いをするに違いありません。父なる神様は神の子イエス・キリストを死人のうちから甦らせ、万物に勝る名を与えて天の位に引き上げられました。それが私たちの救主イエス・キリストであり、その方が私たちに対する福音そのものであると言われています。

人間の考える事と神様のなさる事は大いに違います。人間でも少し経験、知識のある人、一つの組織のなかでもポジションの違う人は、考える事が違うと思います。まして神様が考えられる事ですから、人間の期待するところとは随分違います。世の中で福音―――喜びのおとずれというと、何かちょっとした良い事があるのかなと思います。日曜学校に初めて来た子供が神様の話を聞いて、「帰りがけに10円拾うんだろうか」と言いましたが、大人もあまり違わないのではないでしょうか。

神様が与えて下さる喜びのおとずれは、もっともっと違ったもので、私たちを人間として真に生かして下さる―――言葉だけでなく、実際に私たちのうちに命の力を与えて生涯を送らせて下さる、実に恐るべきものです。

世の中にも多くの宗教がありますが、人を新しく造り替え、人のうちに新しい命の力を与えるものはありません。どんな宗教でも悪い事をせよと教えるものはありませんから、良い事をしなければならないと分かりますが、自分で一生懸命頑張っても、なかなか出来ません。

しかしイエス・キリストの福音は私たちを中から造り替えて、力ある生涯を送らせて下さるのです。物の価値とは何であるか、人間は何を求めて生きて行くべきか、永遠の報いとは何であるか。どなたから報いを受けるのが確かなものであ

るか――について目を開いて下さるのです。

「この他、別に救いある事なし」と使徒行伝４章にあります。宗教の背比べをして、「これも駄目、あれも駄目、自分の所だけが正しい」と言っている訳ではありません。聖書には「すべてのもののご支配者はただお一人」とあります――一〇〇教の神ではなく、すべてのもののご支配者は、ただお一人であります。多くの宗教では「神とはこういう方ではないだろうか」と、真の方を知らないで拝んでいますが、神々の神はただお一人に帰する訳です。

神様は、そのような福音を私たちに掲げて下さいました。今朝も「このイエス・キリストをいつも思っていなさい」とおっしゃいますから、イエス・キリストの福音がどういうものであるか、更に神様はどういう事を開いてくださるか、待ち望んでいる訳です。

◆11節、「もし私たちが彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう」――「彼」即ち「イエス・キリスト」は、私たちの罪の身代りとして十字架の上で死んで下さって、神様によって死人の中から甦らされ、神様の右に引上げられました。そしてすべてのものの名に勝る名を与えられました（ピリピ２章）。

そのあとに「もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるであろう」とありますイエス・キリストはただ死んで甦られただけでなく、忍耐をされました。自分に逆らう者に対してあくまでも忍耐をして、決して激しい言葉を出されませんでした。人間は無実の罪を着せられ、酷い事をされると、黙っている事はできません「何もしていない者を十字架につけるのか！」と騒ぐところでしょうが、イエス様は決してそんな事を言われませんでした。

４つの福音書にはそれぞれの終りの部分に、十字架の現場の詳しい描写がありますが、それはさておいて――ヘブル12:2/4を読みましょう。「彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもいとわないで十字架を忍び、神の御座の右に座するに至ったのである。あなたがたは、弱り果てて意気そそうしないために、罪人らのこのような反抗を耐え忍んだかたのことを、思いみるべきである。あなたがたは、罪と取り組んで戦う時、まだ血を流すほどの抵抗をしたことがない」

【恥をもいとわず十字架を忍ばれた主】

イエス様はどういう生涯を送られたか、「彼は自分の前に置かれている喜びの故に、恥をもいとわないで十字架を忍んだ」とあります。ご自分が無実でありながら十字架につけられ、無残にもなぶり殺されるーーーその中で報いを望み見て喜ばれました。誰にも知られなければ惨めかも知れませんが、すべてを見て正しく裁かれる方があることを知っておられました。

父なる神様に従順に従い尽くして、死に至るまで従い、墓に葬られても、父は決してこれを放置されないで必ず報われるーーーその喜びの為にイエス様は自分に反抗ーーー反抗どころか、茨の棘を頭にさし、両手両足を大きな釘で打ち込むーーーそういう反抗を耐え忍ばれました。歯を食いしばって、「悔しいが、ここで何か言ったら終りだ」と我慢されたのではありません。むしろ「父よ、彼らをお許し下さい。彼らは何をしているか分からないでいるのです」と執り成されました。

それはイエス様が、ご自分の生涯を全く父なる神様の手にお委ねして、自分がすべての人の身代りとして十字架にかかる事を、使命であると自覚しておられたからです。

◆1ペテロ2:18/25 朗読。「善を行って苦しみを受け、しかもそれを耐え忍んでいるとすれば、これこそ神によみせられることである。あなたがたは、実に、そうするようにと召されたのである。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、御足の跡を踏み従うようにと、模範を残されたのである。キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた」

このイエス様のご生涯は私たちの模範であると書いてあります。「キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった」ーーー人間の姿をとって33年間地上の生涯を送られましたが、神の子ですから全く罪をおかされませんでした。それ以外の事はすべて私たちと同じ中を通られました。

口に偽りがなかったとありますが、人が何と言ってもイエス様はご真実を語られました。最後にはののしられてもののしり返しません。苦しめられても脅かす

【イエス様のご生涯は私たちの模範】

事をせず、不当な裁き――裁判とも言えない裁判を受けて、人々の妬みによって十字架に釘付けられ、遂に無残な最後を遂げられました。こうして死に尽くされた結果、墓から甦らされて、天の高み、神様の右に引上げられました。これによって父なる神様のご目的は達せられ、私たちの罪はイエス・キリストの上に負わせられ、私たちはすべての罪を許して頂いた訳です。

これは、「あなたがたもそうするように」とイエス様の示された模範です。人間の作った模範（教本、取扱説明書など）はその通りすればできるようになっています。簡単な電気器具ならそれほどでありませんが、ワープロぐらいになると少し厚い本を読まなければなりません。まずはじめに、「どうも今日はわが社の○○をお買上げ頂いて有難うございました」という所から始まって、起動の準備「ここをこのように繋いで、スイッチを入れて下さい」とありますから、その通りにやって見る――中略――説明書は評判の悪いものもありますが、その通りにすると、「なるほど、こうしたらよいのだな」と少しずつ仕事が出来るようになります。

◆イエス様は神様のお言葉に従順に従い、神様から引上げられて大きな報いを受けられました。これは私たちに残された模範です。ですからイエス様と同じように死んだなら――死ぬと言っても銃や刃物で自分の身を傷付ける意味ではなくて、神様に対して自我を捨てることです。

人はみな自己中心な自我をもっています。「いや私はこう思います」という訳です。人に対してもあまり「俺が俺が」と突っ張るのは困りますが、一番悪いのは命を支えて下さっている神様に対して、自分を突っ張ることです。「いや、私は生れたんだから生きているのは当り前だ。心臓が動いているのは当り前の話だと神様を認めません。「俺が生きているのだ」というのが最大の自我でしょう。

「死ぬ」とは、その「私が、俺が」を捨てて、「神様が私を造り命の息を与えて、今保って下さっている――やがて使命が終ったら、出て来た所に帰って行く、それが私という人間である」と認めること――これが「彼と共に死ぬ」生涯です。

イエス様が父なる神様に従い、使命を果たしてお帰りになったように、私たち

もまた同じ道に従って、神様から造られ、地上に遣わされて来ました――70年、80年と言っても僅かなもので、飛び去ればつかの間ですが――使命が終ったらまたもとに帰って行く――これが私たちの為にイエス様の残された道です。これは今更言うまでもないことと思いますが、逆の道を考える人もあります。

ある人たちは「私たちは宇宙の初めに存在した様々の元素が、偶然に結び付いて、こんなものが出来てきた。はじめに微生物が出来て、水中の原生動物から段々と高度の生物が出来て、陸上にあがって進化して、猿から人間が出来た」と言います。

そういう人たちは上から出て来たのではありません。下から出て、動物と同じ生き方をして、やがて死んで行く。どこに行くか分からない。「死にたくない――人間は死んだら腐って無くなってしまうのだろうか。そうばかりとは思われないし、そうあってほしくない。しかし分からない。どうしたらよいのだろうか。（神様の前に立たされて裁かれたらどうしよう）」――これは地から出た人の生涯です。

私たちがもし彼イエス・キリストと同じコースを歩みますなら、私たちも、彼と共に生かされます。「天国」というと「そんなもの」と思いますが、道筋を外れているから分からないのであって、列車でも飛行機でも決まった道筋があり、そこに行けば現実に動いているものを見る事ができます。

私たちが神様に従って生きて行くと、やがて私たちの帰るべき所はどこにあるかがはっきり分かって来ます。イエス様と同じように、神様を敬って生きて行くならば、イエス・キリストが死人の中からよみがえらされたように、この地上のどんな困難にも、暗黒にも、望みのないよう見える戦いの中でも、甦りの力をもって勝つ事が出来るのです。

◆私たちは物事が順調な時には、「そんな事は私と縁がない」と思いますが、決してそうではありません。自分と全く縁がないと思っていたことに、たちまち巻き込まれて当事者になる事があります。「死」などまだまだひとごとと思っているうちに、忽ち直面して驚くのではないでしょうか。交通事故などもその通りです。

今から19年前になりますが、昭和45年暮れに、私は死亡事故を起しました。それは教会の祈祷会からの帰りに、午後9時半ごろだったと思います、八幡から戸畑に向かう県道、枝光駅前付近のゆるいカーブで、オートバイに乗った人をはねました。その人は大きく飛んで路面に頭を打ち（当時はヘルメットが義務付けられていませんでしたから）、耳から血が出ていました。救急病院（ＩＣＵ）に入りましたが、3日目に亡くなりました。

あとから分かったことですが、相手の単車の人はタクシーの運転手で、午後3時ごろに勤務を終って同僚とお酒を飲んで、単車をとばして帰宅途中であったようです。救急輸送の時に、かなりお酒の匂いがしていましたから、単車で風に吹かれて気持よくやって来たのでしょう。

たまたまその付近は道路がゆるくカーブしており、両側の歩道近くは工事をしていましたから、みな中央線に近い所を走っていました。私は4輪車でしたが、前方からギラギラと輝くライトが大きく揺れながら中央線付近を近付いて来るので、おかしいと思っていました。普通なら、対抗車がある時はライトは下向きに切り替える筈ですし、第一、揺れかたが激しいのです。

しかし「おかしい！」と思ったのもつかの間で――その間2秒ぐらいだったでしょうか、私の車の右前照燈にオートバイがぶつかって人間ははるか後ろにとびました。それまで私は4台の車に乗っており、死亡事故など全く縁がないと思っていたのですが、たちまち大きな事故の当事者になってしまった訳です。

【世の常識を越えた救】

◆現場検証の結果、相手が中央線を越えて入って来ており、飲酒運転でもありましたので、こちらの刑事責任を問われる事はありませんでしたが、相手が死亡したとなれば、加害者として冷たい目で見られます。病院の見舞い、葬式、検察庁での事情聴取など、随分いやな思いをしました。

私は当時としてはかなり高額な任意保険をかけていましたが、責任が無いということで勿論支払いはありません。強制保険(500万円）も本来は出ない筈ですが相手の家庭の事情が複雑であったため、3割は支払われることになって、一応損害賠償請求書が来ました。

それを見ると、将来の逸失利益などを計算して合計1400数万円という額が出て

おりました。この金額は、もし一歩間違えば私が支払らわなければならなかった訳ですが、神様は私を守られただけではなく、金銭的にも、世の常識を遥かに越えた神様の救を体験させて下さいました。（詳細については省略します）。

◆聖徒パウロが「これがわたしの福音である」と言っていますように、私も自分の体験を通して、「神様に従う道は、神様が責任をもって下さる――確かに大丈夫」と分かりました。

もう一点、イエス様のご生涯について学びたいと思います。12節、「もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるであろう」とあります。イエス様は耐え忍ばれました。人からえぐられるように言葉をもって刺され、具体的に肉体に釘を打ち込まれましたが、なおそれを忍ばれたことによって、天の高みに引き上げられ、神様の右に座らせられました（ピリピ2章）。

ピリピ2章6/11節、朗読。「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった――」。イエス様は私たちの為に死に尽くして下さいました。全く己を低くして死に至るまで、十字架の死に至るまで従順であられました。それゆえに神様は、イエス様を引き上げてすべての名にまさる名を賜わりました。

「すべての名にまさる名」とは、子供によい名前を付けるというようなものではありません、この名前は実際にすべてのものを支配する権威をもった名前で、例えば「日本国総理大臣の名」のようなものです。もしその名によってしますならば、すべての行政機関はその通りに動きます。

しかし、神様がお与えになる名は、総理大臣、大統領の名ではありません。神様のご支配のもとにあるすべてを支配する事の出来るお名前です。イエス・キリストはいま私たちの目には見えませんが、救主として今もすべてのものをその名によってご支配になっておられます。

それはイエス様があくまで忍んで従われた事によって、「もし耐え忍ぶならば、

支配者となる」とある通りに引き上げられたのです。私たちもイエス様と同じように耐え忍んでーーーという事は、正しいさばきをする方に委ねて、「神様がすべてをご存知です」と信頼を傾けて行くなら、私たちもまた同じように支配者として下さるということであります。

◆支配者として下さるとはどういうことでしょうか。どこかの国の大統領か総理大臣になってその国を支配する事かと思いますがそうではありません。神様から権威を与えられることについて次を学びたいと思います。

ルカ22章 28/30節、「あなたがたは、わたしの試練のあいだ、わたしと一緒に最後まで忍んでくれた人たちである。それで、わたしの父が国の支配をわたしにゆだねてくださったように、わたしもそれをあなたがたにゆだね、わたしの国で食卓について飲み食いをさせ、また位に座してイスラエルの12の部族をさばかせるであろう」とあります。

これは最後の晩餐の席で、イエス様が弟子たちに話されたことです。「わたしの父が国の支配をわたしにゆだねてくださった」とは、引き上げられてすべての名にまさる名を与えられたことです。そのように、「私に従うあなたがたに対してその権威を委ねよう」と言われます。例えば、竹下総理大臣が、「つかさ、つかさに責任を委ねる」と言います。自分は全体を統括するが○○に関する事項は○○大臣に頼むーーー大臣（次官）は局長に、局長はその部下に頼むーーー実際の政策を立案するのは、本省の課長レベルなどと言われますが。そのようなものです。

神様がイエス・キリストにすべてのものをお委ねになって、万物に勝る名をお与えになったように、イエス様は自分に従う弟子たちにそれを委ねようとおっしゃったのです。神様から預かったものを弟子たちに委ねられるーーーそれは無責任に右から左に渡すのではなく、自分がしっかり受け止め、自分の責任において弟子たちに委ねて下さるのです。私たちも現代の弟子として、同じ道に従って行くと、同じ権威を委ねて下さいます。

ヨハネ17:1/3、「父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光をあらわすように、子の栄光をあらわして下さい。あなたは、子に賜わったすべての者に、

【権威――主が受けたものを委ねて下さる】

永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから」とあります。

最後の晩餐の席からお立ちになってこう祈られました。17章は全体がイエス様のお祈りであります。このあとゲッセマネの園に行ってお祈りをされ、捕らえられて明け方にかけて裁判に引き回され、午前9時ごろには十字架に付けられ、午後3時には息を引き取られました。

冒頭に「父よ、時がきました」と言われています。「わたしはあなたの御旨に従って今から十字架につきます。これによってあなたが神であることを現される。そのようにわたしがまたあなたの御旨に従ってここまで来たことを現して下さい」と祈られました。

その次は支配者としての権威のことです。「あなたは子に賜わったすべてのものに永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから」と言われています。

支配というと、自分が一番偉くなって人から仕えてもらう、自分の勝手をして他人を顎で使うことと思いますが、そうではありません。支配とは、「子に賜わったすべてのものに永遠の命を授けさせる」ということです。

動物から出て、闇から闇に落ちて行くコースではなくて、上から（神様によって）命を与えられ、地上の使命を果たして、また永遠の命に帰って行く、こういう命を授けさせるために、万民を支配する権威を与えて下さったということです。

「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることです」と言われています。つまりイエス様がすべてのものの名にまさる名を与えられたのは、「真の神様とイエス・キリストとをすべての人が知るようになるためである」と言われているのです。

私たちが与えられた権威も同じであって、「私は教会に行っている。私は神様から選ばれた特別な人間だから、あなたがたとは違う。近付くな」というような権威ではなく、むしろすべての人に仕え、すべての人のために死んで、すべての人々が真の神様と救主を知ることが出来るようにと祈る――それが私たちの使命であります。そのために神様の権威が与えられるものであると教えられました。

◆「すべてのものにまさる権威」というからには、その中にあらゆるものが含まれている訳です。人間の世界においても、それぞれの（限られた）権威はありますが、すべてのものをご支配になる神様の権威にはすべてのものが含まれ、当然「死」も含まれている訳です。

「死」は最も強いもので、人間を負かせます。誰も死にはかないません。「お前は死ぬぞ」と言われると、人はどんなことも惜しまない、何でもしますと言うことになります。人間が死を恐れるのは罪の結果で、罪をもっていると神様の前に立つことが出来ませんから怖い訳です。

しかしイエス・キリストによって罪が許されますと、「私は使命を果たしてただいま帰りました」と天国に帰って行く――死は着物を一枚ぬいで新しいものを着るように、あるいは自分の家に帰ってホッとするように、少しも怖くないものに変ってしまいます。

すべてを支配する権威の中にこの「死」が含まれているのですから、私たちに与えられた権威は大したものであると思いました。それは霊的な問題だけでなく肉体の死をも支配する権威です。

昔、預言者エゼキエルは幻のうちに「異象の谷」を見せられました。ある所に行くと、はなはだ枯れた骨がたくさん転がっていました。主は「これらの骨は生き返ることができるか」と問われますので、「とてもそんな事はできません。主よ、あなたがご存知ではありませんか」と言うと、主は彼に預言をさせ、祈りに答えて骨を生かし肉を生じさせ、筋を作り、皮で覆い、命の息を吹き入れて、はなはだ多くの群衆にされたことが書いてあります（エゼキエル37章）。

これはおとぎ話のように思われますが、神様が「死」をも支配する権威をお持ちになっていることを示された訳です。

人は土の塵から造られ、命の息を吹き入れられて生きるものとなりました。命の息が取り去られると元通り土に帰ります。それを早くしようと思えば火葬にしますし、ゆっくりならば土葬、風葬、鳥葬など、いずれにしても土に帰ります。しばらく骨が残っても、いずれ粉々に崩れて土に帰っていきます。

神様は命を与えることも取ることも出来る方であり、時間を逆行させる事がで

きるお方です。

◆神様は人を生かすこと殺すこと、すべての権威をもっておられる事を現された訳です。エゼキエルは神様からその権威を与えられて祈り預言をしました。私たちも、神様から同じ権威を与えられ、その名によって死をも支配する事が出来るのです。

人間の命は一方向しか進みませんが、神様は時間を逆行させることが出来るお方で、死んだ者をよみがえらせる事もお出来になります。そのような権威までも与えられることを思うと、私は身震いするような恐れを覚える訳です。

新約聖書において様々な（いわゆる）奇跡が行われています。人間は奇跡と言いますが、聖書にはそう書いてありません。それは神様がその力をもってすべてのものを造り生かすのは当然のことだからです。事実、私たちは毎日その力によって支えられ生かされているのであります。

イエス様は様々な病人を癒し、死人を甦らせ給いましたが、弟子たちに対しても同じ権威を与えておられます（マタイ10章８節）。

ペテロとヨハネは、生まれながら足のきかない男を、「イエス・キリストの名によって歩きなさい」と立たせ、神様の（名の）権威は、病者すらも生かすことをあらわしました。これはこの世のまじないとは違います。

この世の中でそういう事（病気の癒し）を売りものにして、「さあ、いらっしゃい、この宗教を信じたら病気が治ります」というものがありますが、それは単なる御利益宗教です。

神様はすべてのもののご支配者であって、癒しはその万権の証拠、十字架による罪の許しの結果であり、ごく一部の現れに過ぎません。

私たちは神様に祈って癒されること（つまり神癒）を、売りものにする訳ではありませんが、第２第３にもしません。神様の力においては病気の癒しは当然であり、神様の名によればすべての事が行われると信頼しているからです。

他にも具体例があります。聖徒パウロはある時、ユテコという若者が高い所から落ちてショック死した時、祈ってこれを生かしました（使徒行伝20章、参照）。

またペテロは、タビタという婦人が、すでに息絶えて死んだものと思われてい

たのに、これを生かしたと記されています（使徒行伝9章、参照）。

その他、病気の癒しや悪霊の追い出しの記事などたくさんありますが、それらは神様の権威を現しておられるのであって、弟子たちが別にまじないをした訳ではありません。神様はこんにちの私たちにも同じ権威を与えて下さっています。真に身の引き締まる思いがします。

【彼を否めば否まれる】

◆2テモテ2:11/12 にかえる。この部分は三つに分かれています。

①「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きる」――私たちがイエス様と同じように神様に従い、自己中心を離れ、自分に死んで生きる時、どんな中からでも生かされるというさいわいな約束です。

②「もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となる」――正しい裁き主にお委ねして忍耐するならば、死をも支配する権威を授けられます。死すらも支配するならば、それ以下のあらゆる事はみな支配し得る、つまりこの地上のあらゆる困難悲しみ、痛みもすべてを乗り越える事が出来ます。また人をして乗り越えさせることが出来ます。

③「もし彼を否むなら、彼もわたしたちを否む」――悪意でなくても、「そんな事は私には出過ぎたこと、私は結構です」と言うならば、私たちは結局、神様のお言葉を拒絶することになりますから、神様のお約束は成就しません。信ずるならばそうなるべきものを、信じなければそうならない――私たちは厳かな裁きの座に立たされていると思います。

神様は私たちに尊い福音を与えて生かそうとしておられる、更に人をも生かそうとされています。それを「いや、信仰はほどほどにしておきましょう。そんな出過ぎたことはやめておきましょう」と言うならば、ほどほどに保とうとした事まで失ってしまうかも知れません。自転車は走っていないと倒れます。

「（神様に対する）信仰はやめておこう」と言いながら、人はみなある種の信仰をもって生きているのです。明日を望み、明後日を望み、見えないものを信頼して生きているのであります。しかし神様によらない望みは単なる願望で、ふらついたり倒れたり致します。

そうでなくて、しっかりした目標として神様を敬い、神様から生かされる生涯

を生きるならば、それは私たちにとって最もさいわいな道です。そうなると「もし否むなら」との心配は必要がなくなります。

◆世の中のスポーツでもゲームでも、「攻撃は最良の防御」と言われます。防御ばかり考えていると決して勝つ事は出来ません。野球でもピッチャーの防御率がたとえ0.00であっても、野手が攻撃して点を取らなければ勝つ事は出来ないでしょう。

積極的に神様に従って行く――「ぐずぐずしていても一生は一生だ。どうせ生きるならば神様に従って最も確かに、最も力があり、命のある生涯を生きよう」としますと、自分の弱さはカバーされて、力をもって生きる事が出来ます。自分の弱い所は変えられて実際に強くなります。

私の生涯を振り返ってもそのように思います。私自身、何の力もありませんでしたが、その私のためにイエス様が十字架にかかって死んで甦って下さいました。そのお言葉を信頼して、「有難うございます」と一歩踏み出すと、次々に力を与えられてこんにちまでまいりました。肉体は衰えているかも知れませんが、逆に「彼と共に生かす、彼と共に支配者となれ」とお言葉どおり登り坂の生涯です。私が特別な訳ではありません。私はむしろ駄目な人間ですが、その上に神様らしいことを行って下さる訳です。

昨日、しばらくぶりに見えたある兄弟が、「数年ぶりに家に帰って近所の顔見知りの人たちを見て、その衰えているのに驚きました。しかし先生だけは生き生きしてちっとも変わりません」と言われて、神様は私のような者を日々に支えて下さっていると感謝しました。

「私はこの調子で長く生きて――どうしよう」と言うことではありません。今晩、神様から召されても、「神様、有難うございます。不忠不義なしもべでありますが、何とかしてと思って今日まで走ってまいりました。お召し下さって有難うございます。ただいま帰りました」と懐かしい家に帰ってゆっくり休ませて頂く――これは最もさいわいなことです。

神様の約束は特別な人、パウロとかペテロとか聖書に記された聖徒たちに与えられたものではなくて、この道筋、この模範に従って行くものすべてに対して、

そのようにされるというものです。「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう。もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるであろう」とあります。今日、神様は私たちを素晴らしい生涯に生かそうとしておられるのです、それは自分が生きるだけではなくて、人をも生かす生涯です。

誰しも自分の子供だけは責任をもって育てようとしますが、それだけではなく、神様はすべてのものを支配する権威をお与えになって、すべてのものに祝福を注ぎ、神様を知らせ救を知らせる使命を与えて下さっています。素晴らしいことではありません。

このような良いものを下さるのですから、「有難うございます」と感謝してお受けし、神様のみ心をこの身に行って頂く者となりたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。　　(1989.1.3 戸畑教会、新年聖会７)

第八章

真実な完成者
（全うしなければ落ち着かぬ方）

【三つの完成】　９９

【きょう、決めなければ落ち着かない方】　９９

【完成とは神様に喜ばれる信仰を持つこと】　１０１

【主権者】　１０２

【義を助け守られる神】　１０３

【主よ導き給え】　１０４

「たとい、わたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることが、できないのである」(2テモテ2:13)

◆神様という方は真実な方で、ご自分がこうと定められた事は、必ず成し遂げられる真実な完成者です。箴言30章には、「神の言葉はみな真実である、神は彼に寄り頼む者の盾である」とあります。

神様が、すべてのものをお言葉通りに成し遂げられる事については、色々な面から教えられますが、今日は三つのものを上げてみたいと思います。

①創世のはじめ、6日間のうちに天地の万象が出来上がって、7日目に休まれました。すべてを終って休まれたという事は、ここで完成された訳です。ここに第1の完成があります。

②イスラエルの民を選んで召されましたが、彼らは背きました。長くこれを忍ばれましたが、ついにあがないしろを立てて、ご自分のものとし、保証の御霊をお与えになりました。これが第2の完成です。

③終りの日、私共を栄光の形にかたどらせて御国に迎えて下さる――これが第3の完成です。

これらによって神様が真実な完成者であることが分かります。

その他、エレミヤ33章には、「事を行い、事を成してこれを遂ぐる主」とあり、ピリピ1章には、「良きわざを始め給いしものは、キリスト・イエスの日までにこれを全うし給うべき――」とあります。また、ヘブル12章には、「信仰の導き手、またその完成者であるイエス」とあり、私共に対してどうしても完成しなければやまない方である事を示されています。

◆ルツ記3章 14/18節、朗読。18節に、「娘よ、この事がどうなるかわかるまでお待ちなさい。あの人は、きょう、その事を決定しなければ落ち着かないでしょう」とあります。

これはルツ記の一つの山の部分です。ルツが親戚のボアズに対して、「自分たちをあがなって頂きたい」と頼むところです。姑ナオミの言葉に従い、夜、ボアズが収穫の麦のかたわらで寝ている所へ近付いて、「あなたのすそで、はしためをおおってください。あなたは最も近い親戚です――兄弟が落ぶれた時にはあ

【三つの完成】

【きょう、決めなければ落ち着かない方】

がなわなければならないとありますから、そのお言葉に従ってどうぞわたしを恵んで頂きたい」と意志表示をした訳です。

夜中に気が付いたボアズは、すべての事を悟りました。外国人であるお嫁さんが、考えようによっては、はしたない事をあえてして、姑の言葉に従ったーーーこれは神様の御旨にかなうことであると知って、彼は「よろしい。あなたの求めのようにしましょう。ただあなたにはわたしよりも、もっと近い親戚があります明日の朝、もしその人が、あなたのために親戚の義務をつくすならば、よろしいしかし主は生きておられます。その人が、義務をつくすことをしないならば、わたしはあなたのために親戚の義務をつくしましょう」そう言って、大麦6オメル（13㎏あまり）を手土産に負わせて帰らせました。

そのとき姑は、神様の手が動いている事を悟って、「娘よ、この事がどうなるかわかるまでお待ちなさい。あの人は、きょう、その事を決定しなければ落ち着かないでしょう」と申しました。

はたしてボアズはすぐその日に、町の門（広場）に行って、かの親戚の人を呼び止め、「実はモアブの地から帰ってきたナオミの家族が、自分の地所を売ろうとしています。あなたは一番近い親戚だから、もし神様の言葉に従ってあがなうならばそう言いなさい。もしあがなわないならば、わたしにそう言って下さい。わたしはあなたの次ですから」と言いました。

するとその人は、「それではわたしがあがないましょう」と言いました。ボアズは、「あなたは彼女の手からそのすべてを買い取り、死んだ者の妻であったモアブの女ルツをも買って妻とし、その子供に死んだ者の名を継がせなければならない」そう言うと親戚の人は困って、「モアブの女を家に入れては、自分の嗣業をそこないます。あなたがわたしに代ってあがなってください」と靴を脱いでボアズに渡しました。これは証明の方法だった訳です。

そこでボアズは長老たちとすべての民に向かって、「あなたがたは、きょう、わたしがエリメレクとその家のすべてを買いとった事の証人です。またわたしはモアブの女ルツを買って、自分の妻としました」と言いますと、すべての民は、「わたしたちは証人です」と答えましたので、すべてが決定されました。

「あの人は、きょう、その事を決定しなければ落ち着かないでしょう」と言った通りになったのです。ボアズはイエス様の型です。イエス様は私たちに対する真実な完成者です。神様がその通りであり、イエス様がその道に従われたのです。私たちの為に定められた事を決定しなければ落ち着かない方で、必ずそのように全うされるのです。

◆信仰の完成とはどういう状態でしょうか、「あの人はこんな事をした――これが完成だろうか」と思いますが、それは完成ではありません。神様から「よし」とされる信仰を持つことが完成です。

ローマ4章 17/25節、朗読。「彼はこの神、すなわち、死人を生かし、無から有を呼び出される神を信じたのである。彼は望み得ないのに、なおも望みつつ信じた。そのために、『あなたの子孫はこうなるであろう』と言われているとおり、多くの国民の父となったのである。すなわち、およそ 100歳となって、サラの胎が不妊であるのを認めながらも、なお彼の信仰は弱らなかった。彼は、神の約束を不信仰のゆえに疑うようなことはせず、かえって信仰によって強められ、栄光を神に帰し、神はその約束されたことを、また成就することができると確信した。だから、彼は義と認められたのである」とあります。

「義」とは、神様が「よろしい」と認められることです。いわゆる正義――人間の約束事に違わないことも、正しいには違いありませんが、神様から「よろしい」と認められるためには、神様に喜ばれる信仰を持つことです。アブラハムは「死人を生かし、無から有を呼び出される神を信じた」とあります。彼は人の知恵をもって信じ得ない中から、なおも望みつつ信じました。「神様のおっしゃる事は本当だ」と飛び込みながら信じた時に、事実 100歳の彼にイサクが生れ、そのイサクからエサウとヤコブ、ヤコブから12人の族長たちと、次々に子孫が増え広がって、神様の約束通り、空の星のような神の民が生れました。

ですから完成とは、神様に喜ばれる信仰を持つことです。この信仰を私たちのうちに遂げるとおっしゃるのは、誰も神様を妨げるものはないからです。イザヤ書43章、「わたしがおこなえば、だれが、これをとどめることができよう」とあり、黙示録3章には、「わたしが開けば閉じるものはなく、わたしが閉じれば開

くものはない――わたしはだれも閉じることのできない門を開いておいた」と言われています。

神様は誰からもとどめられることのない方であり、すべてのものの主権者ですから、閉じられていても開くことが出来る方であります。

いつでしたか、竹下登氏が、田中角栄氏の家に行った時、「あなたには会いたくない」と門を開けてくれなかったそうですが、田中氏の子分たちが行くと、サッと門が開きます。これはその家の主人公の意志に従って、ある時は門が開かれある時は門が閉められている訳で、よその者がこれを変える訳にはいきません。

神様は絶対者、主権者であり、ご自分の意志を全うする為には、どのような妨げも排除することがお出来になります。

マタイ８章、百卒長が自分のしもべの中風の為にイエス様にお願いした時、「イエス様、私の所にお出で頂かなくても結構です。ただお言葉を下さい。そうすればしもべはなおります。私は権威（千卒長）の下にいますが、私の下にも百人の兵隊がいて、私が命じたとおりに従います。あなたはすべてのものの主権者ですから、ひとことお言葉をお出しになれば、私のしもべの病気は癒されます」と信仰を告白しました。

その時イエス様は大変喜ばれ、「イスラエルのうちにも、これほどの信仰を見たことがない。異邦人であるこの人が天国の宴席につき、選民イスラエルは外のやみに追い出されて、泣き叫んだり、歯がみしたりするであろう」とおっしゃいました。

それまで異邦人は救にかかわりないと考えられていたのに、むしろこれをおほめになり、選民がむしろ危ういと警告された訳です。

【主権者】

◆神様が主権者であることについて――詩篇19篇、「その響きは全地にあまねし」とあります。神様のみ言葉は、全地にあまねく、すべてのものの上に轟きわたり、すべてのものを響かせると言われます。

詩篇29篇、「主のみ声は力があり、主のみ声は威厳がある。主のみ声は香柏を折り砕き、主はレバノンの香柏を折り砕かれる」とあります。香柏とはレバノンのヘルモン山に立っている素晴らしい（杉）林ですが、神様のみ声はこの香柏を

折り砕くほどの力があるのです。

詩篇33篇、「主が仰せられると、そのようになり、命じられると、堅く立ったからである」とあります。神様が「こう」とおっしゃったら必ずその通りになる――神様は最高権力者であります。力をもってご自分の御旨をさっと行われる、その時には有無を言わさぬお方ですが、反面、懇ろなお方で、私たちの弱さを助けて下さる方です。

◆詩篇4篇1節、「わたしの義を助け守られる神よ、わたしが呼ばわる時、お答えください」とあります。神様は義を助け守られる方であると言われます。「義」というと、神様が「よし」とされることです。そこで私たちは神様の御旨にかなえば「義」となり、神様から「お前は駄目だ」と言われればそれきりと思いますが、神様の「義」は固定的なものではありません。

私たちが「何とかして神様を信じさせて頂きたい。あなたに喜ばれる信仰を持たせて頂きたい。イエス様が私の為に十字架にかかって下さったことを、単純に信じる事が出来るように助けて下さい。憐れんで下さい」と飛び込むと、その姿勢（わたしの義）を助けて完成して下さいます。

アブラハムもそうでした。自分にはどうしても信じられない、100歳になってはじめての子供が生れるとは考えられない。しかし神様がそうおっしゃった。しかし自分は信じられない。そこで彼は「信じさせて下さい」と望みつつ信じました。

マルコ9章、癲癇の子供をもつ父親の記事がありますが、「わたしは信じることができません。しかし信じたいです。信じます！信仰のないわたしをお助け下さい！」と飛び込みました。これもアブラハムと似ています。

そういう信仰に対して、「なんだお前は、いさぎよく信じられないようでは駄目だ。出直しなさい」とはおっしゃらないで、その小さな義――小さな信仰の芽――芽のまた芽かも知れませんが、それをはぐくみ助けて、大きな堅い信仰を与えて下さいます。癲癇の子供の父は、信仰を与えられ、生れながらの重症の癲癇であった子供を癒されました。

百卒長のしもべの場合、イエス様から「行け、あなたの信仰のとおりになるよ

うに」と言われたその時間に中風を癒されていました。神様は力あるお方ですが同時に私たちのような者をも顧みて助けて下さる方です。これは嬉しいことであります。

【主よ導き給え】

◆2テモテ2:13にかえる。「たとい、わたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることが、できないのである」――神様は私たちに対して今年、「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である」――この道に従う者を生かし、さらに他の人々をも生かす者として立てるとおっしゃいました。

「いつも思っていなさい」とおっしゃる方は思わせて下さる方ですし、「彼と共に死んだなら、彼と共に生きる」とのお言葉を、「そうです」と心に受けると自分に死に、十字架を負うて主に従わせて下さいます。カッカッとすぐに青筋を立てるような人間であったとしても、「もし耐え忍ぶなら支配者となる――忍びなさい、主の足跡にならいなさい」と言われますから、「この福音である方がならわせて下さるから有難うございます。お願いします」と進み出ると助けて完成して下さいます。

「私はこんな者でとても真実になれないし、ましてそれを貫くことはできないと思いますが、「私たちも真実であらせて頂きたい、この真実な方が仰ぎ望めとおっしゃるのだから、私にもならわして頂きたい、『わたしと共に死ぬなら生きる』とおっしゃるから、どうぞ私も自分に死んでイエス様に従わせて頂きたい」と願って行くなら、イエス様は助け守って、主のように真実をつらぬかして下さいます。

真実な完成者であり、完成せずにはおられない方が、私共を全うしなければ落ち着かないと言われます。誰からも妨げられない主権者が全うするのですから、必ず全うされます。「弱しと言うなかれ、強しと言え」とありますが、「そうです、あなたは強い方です。私は弱い者ですが、あなたは強い方ですから、おっしゃったとおりにして下さると信じます」と踏み出すと、確かに私たちのうちに真実を遂げて下さいます。

今日も、私は「こんな者ですが、どうぞあなたがお導き下さい」と信頼して、ここまで集会を導いて頂きました。一回々々の集会が神様に対する私の信頼と、神様の真実な答えであります。信仰の歩みには色々な局面があると思いますが、「全ての道で主を認めなさい」「いつもこの方を思っていさない」とおっしゃるのですから、どんな問題の中にあっても、この方に信頼して助けられ、全うされ、神様に喜ばれる信仰を持ち続けたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。

(1989.1.3 戸畑教会、新年聖会8)

オウムガイ

クルマガイ

第九章

十　字　架
（永遠の契約のしるし）

【十字架は私のため】　１０９

【この獣と私は一つです】　１０９

【十字架は義と愛のしるし】　１１０

【罪人の為に死ぬ大愛】　１１０

【あなたはどこに立っているのか】　１１１

【神の奥義／十字架】　１１２

【虹の契約／十字架の予表】　１１３

【神様のほうが忘れないと】　１１４

【城を明け渡す】　１１５

【キリストがうちにあって生きておられる】　１１６

「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう。もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるであろう。もし彼を否むなら、彼もわたしたちを否むであろう」(2テモテ2:11/12)

◆私たちが「彼」すなわち、イエス・キリストと共に死ぬとはどうする事でしょうか。それは自分を捨て、自分の考えを捨てて、神様のお言葉に従うことです。具体的には、「あのイエス・キリストが十字架にかかって死んで下さったのは、他の人のためではなく、私のためです。私が神様に対して罪を犯したのですから、当然、処刑され、十字架の上で無残に殺されてしかるべきであったのに、私の代りにイエス・キリストが十字架にかかり、私は許されました」――そのように自分のこととして信ずる時、新しい命に生きることができます。それが救です。

【十字架は私のため】

◆レビ記 1:1/4。ここに「もしその供え物が牛の燔祭であるならば、雄牛の全きものをささげなければならない。会見の幕屋の入口で、主の前に受け入れられるように、これをささげなければならない。彼はその燔祭の獣の頭に手を置かなければならない。そうすれば受け入れられて、彼のためにあがないとなるであろう」とあります。

【この獣と私は一つです】

レビ記のこの部分は、神様に対する供え物の規定です。あるいは感謝のため、あるいは罪のあがないのために獣をささげる訳ですが、例えば、牛の燔祭をささげる時には、雄牛の全きものをささげなければなりません。欠けのあるものを、「これはどうせ殺さなければならないから、ささげものにしよう――とする事は許されません。一番良い、完全なものをささげなければなりませんでした。

そしてささげる人が、その獣の頭に手を置きます。その意味は、「私とこの獣は一つのものです」ということです。次に定めに従ってこれを殺して焼く、血を注ぎ出したり、様々な手続きがあります。とにかく最初になすべき事は、「この獣と私は一つです」と告白することでした。

レビ記4章 13/20節、朗読。罪の為の供え物をささげる時も同じでした。獣の頭に手を置いて、「この獣と私は一つです。血を流さなければあがなう事はできない、とありますから、罪を犯した私自身が血を流すべきところですが、この獣が死にますから、どうぞ、この血に免じて許して頂きたい」と罪祭をささげます

と、罪が許されました。20節に、「こうして、祭司が彼らのためにあがないをするならば、彼らはゆるされるであろう」と記されています。それは神様の定めでした。

私たちがイエス様の十字架のお話を聞いた時に、「イエス様は私たちのために、神の子羊となって、私たちの罪のために死んで下さいました。これは人のためではなく、私のためです。あのイエス・キリストと私は一つであります。私が罪の結果、十字架にかけられなければならないものであったのに、イエス様が死んで私を許して下さいました。イエス様と私は実は一つです」と信ずると、私たちのすべての罪がゆるされます。これは人がそう思いたいというのではなくて、神様の定めであります。

【十字架は義と愛のしるし】

◆十字架は私たちに対する神様のご愛のしるしであると同時に、義のしるしでもあります。神様は絶対正義のお方であって、本来、寸分のあやまちも曖昧もお許しにならない――人間でも非常に几帳面な人は、少しでも曲がったことは気にいらず、他人がそういうことをすれば絶対に許せないと怒ります。

神様は本来正義の神であって、いい加減なものを許さない方であります。ですから、私たちがきびしい旧約の律法に照らされ、更に心の中まで探られてふさわしい報いを受けるならば、命は幾つあっても足りないでしょう。

そういう私たちを許して、その罪を処分するために、罪の無い神の子キリスト――罪祭規定に従って殺される動物自体には何の罪もありません――は全く罪を知らない方でありながら、私たちのすべての罪を負うて十字架の上に死んで下さいました。それによって私たちは罪を許されました。ここに神様の正義と愛の両面を見る事ができます。神の子の死ということがなければ、私たちの罪は決して許されないのです。

【罪人の為に死ぬ大愛】

◆ローマ５章6/11節、朗読。「わたしたちがまだ弱かったころ、キリストは、時いたって、不信心な者たちのために死んで下さったのである。正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう。しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである」

とあります。

イエス様が私たちの為に死んで下さったという事は、どれ程大きなことであるか――ここにはっきりと記してあります。人間は、人からしてもらう事は歓迎しても、人のためにすることは僅かでも惜しみます。まして他人の為に命を捨てるなどなかなか出来ないことです。どんなに大きな恩義を感じていたとしても、「そうまでは出来ない」というのが普通でしょう。

イエス様は、私たちが罪人であった時――神様を知らず、正しいことをしたくても出来ない弱い人間であり、不従順であった時――そんな私たちのために黙って死んで下さいました。

「正しい者のために死ぬ人はない」とありますが、正しくないことが間違いであって、正しいのは当然ですから、特別に誉められることはない訳で、その人の為に死ぬという事はありません。しかし情け深い人のためには、あるいは恩義に感じて、「あの人の為なら私は死んでも構わない。あの人のお陰で今日まで生きてこられたのだから」という人も中にはあるかも知れません。

私たちは慈しみ深い者でも、正しい者でもなく、普通の人でもない――むしろ罪人であり、イエス様に逆らう者でした。そんな者の為に、罪のない方が死んで下さったと言うことは、どんなに恐るべき事でしょうか。

私たちが人のために何か心掛けても、相手が受け入れないで、逆に「何だこんなことをして」と言われたら、腹を立てて、「もう、あんな人の為に何をしてやるものか」と言うことになるでしょう。しかしイエス様は腹を立てられませんでした。自分の体に釘を打ち込む人――私たちは、イエス様を信ぜず、釘を打ち、槍で突くのと同じ事をした訳ですが――そんな者に対して、「お前の為にこんなにしているのに、分からないか」と叱られませんでした。むしろ「父よ、彼らを許し給え」と執り成しをしながら、私たちの為に死んで下さいました。それによって神様は、私たちに対する絶大なご愛を示されました。

◆ルカによる福音書23章 33/37節、「されこうべと呼ばれている所に着くと、人々はそこでイエスを十字架につけ、犯罪人たちも、ひとりは右に、ひとりは左に、十字架につけた。そのとき、イエスは言われた、『父よ、彼らをゆるしてく

ださい。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです』。人々は、イエスの着物をくじ引きで分け合った。民衆は立って見ていた。役人たちもあざ笑って言った。『彼は他人を救った。もし彼が神のキリスト、選ばれた者であるなら、自分自身を救うがよい』。兵卒どももイエスをののしり、近寄ってきて酢いぶどう酒をさし出して言った、『あなたがユダヤ人の王なら、自分を救いなさい』」とあります。

これは十字架の生々しい現場です。この有様をじっと見、ここに立っている色々な立場の人を見る時に、私は一体どの立場に立っているのだろうかと思います。

あるいはイエス様を十字架につけている死刑執行隊長であるかも知れません。パリサイ人やヘロデ王のように、「十字架につけよ」という人たちであるかも知れません。あるいは民衆であるか、兵卒であるか。

そんな人々に囲まれながら、イエス様は荒々しい言葉を出すのでもなく、自分の無実を叫ぶのでもなく、「父よ、彼らを許し給え、そはそのなすところを知らざればなり」と祈りつつ息絶えて下さっいました。何という大きなご愛でしょうか、決して昔の物語ではありません。今も私のために執り成して下さっているのであります。

ルカ13章 6/9節に、ぶどう園に植えられたいちぢくの譬が記されています。農場主は、「大きな葉で日陰ばかり作り、実もならないいちぢくなど切り倒してしまえ」と言いますが、農夫は、「ご主人様、ことしも、そのままにして待って下さい。今年この周りを掘って肥料をやってみます。それで来年実がなりましたら結構ではありませんか。もしそれでも駄目でしたら、その時は切り倒して下さい」――これは私たちに対するイエス・キリストの執り成しのひな型であります。

同じ十字架の言葉を聞いても、色々な信じかたがあると思います。自分の為と信じる人、「ああ、そうですか」と一応聞く人、それほどにも気をとめない人、「昔のことで私とは関係がない」と思う人もいるでしょう。いかに反応するか――十字架を信ずるならば救われ、信じなければ救を放棄することになります。

◆1コリント1章 18/25節、朗読。18節に、「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である」とあります。十字

架の言、つまりイエス・キリストの十字架の事実をどのように受け取り、どういう態度を取るかによって、それぞれに報いられます。

ここには二つの態度が対称して書かれています。滅び行く者――「なんだそんなこと、馬鹿らしい。私とは関係がない」と言う人は、神様がせっかく罪を許し受け入れようとしておられるのに、一切は御破算になって滅びてしまいます。

しかし、「あれは私のことなのだ。獣の頭に手を置くようにイエス様と私は一つだ、イエス様の十字架は私の姿だ。まさしく私の為に十字架にかかって下さった。有難うございます」と信頼するならば、神様の力が働いて救われる――それは何かの結果をうまく始末して下さるというような事ではなく、私たちの心のうちまですっかり清めて下さるのです。これは神様の奥義です。奥義というものは、常識で「なるほど」と理解できるものではありません。

「ユダヤ人はしるしを請い、ギリシャ人は知恵を求める」とあります。人はみなこのいずれかでしょう。ある人は宗教的、信仰的であり、また、ある人は、人間の知恵によって理解をしようとしますが、どちらであっても、「イエス・キリストの十字架は、わたしのためでした」と単純に信ずる者を救うのが神様の道です。

◆創世記9章 12/17節、朗読。11節に、「わたしがあなたがたと立てるこの契約により、すべて肉なる者は、もはや洪水によって滅ぼされることはなく、また地を滅ぼす洪水は再び起らないであろう」とあります。

有名なノアの洪水のあと、神様は、「わたしは2度と人のゆえに地をのろわない。地を滅ぼす洪水は再び起らない」と誓われました。人が心に思いはかることは、幼い時から悪いのであって、それを咎めだてしたら、誰も生きることが出来ない――と考えられた訳です。

人は罪を犯すものです。それを「呪わない、滅ぼさない」とおっしゃったのですから、誰かが罪を背負わなければならない――私は、「神様は十字架をお立てになる事を預言されている」と思った訳です。

その時に契約のしるしとして虹をあらわされました。私たちは虹は一つの気象現象であって、細かい水滴が空にかかっている時、太陽をうしろに受けて見ると

虹になると思いますが、虹は、神様が「人は洪水によって再び滅ぼされることがない」という契約のしるしとして置かれたものであった訳です。

「こうして、わたしは、わたしとあなたがた、及びすべて肉なるあらゆる生き物との間に立てた契約を思いおこすゆえ、水はふたたび、すべて肉なる者を滅ぼす洪水とはならない。にじが雲の中に現れるとき、わたしはこれを見て、神が地上にあるすべて肉なるあらゆる生き物との間に立てた永遠の契約を思いおこすであろう」（創世記9:15/16)とあります。

私たちが虹を見て神様の契約を思い起して安心をする――そう思っていました。ところがここを見ると、神様が虹を見て、私たちとの契約を思い起すと言われています。新しい発見でした。

人間が手にこよりを結んだり、しるしを付けたりして、何かを忘れないようにする。そのように、神様は空に虹をおいてご自分の覚えとされました。神様は忘れっぽい方ではありませんが、契約を決して忘れないために虹をおいて下さいました。虹は、イエス・キリストであり、イエス・キリストが立てられるというしるしであります。

神様はイエス・キリストの十字架を見て、このゆえに滅ぼさないといつも覚えて下さるのです。今年の標語に、「イエス・キリストを、いつも思っていなさい」とありますから、忘れやすい私たちがハッと仰ぎ見て、「ああそうでした。あなたの前に真実に生かして頂きとうございます」と言うのは当り前ですが、神様のほうがいつもこの十字架を見て、私たちに対する契約を覚えて下さるのです。嬉しいことではありませんか。

【神様のほうが忘れないと】

◆イザヤ書49章 14/16節。「女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあろうか。たとい彼らが忘れるようなことがあっても、わたしは、あなたを忘れることはない」とあります。

これもまたさいわいなお言葉です。神様は私たちを決してお忘れにならない。「あそこに、あんな者がいたな」とただ記憶されるだけではありません。契約の相手として私たちを覚えて下さる訳です。女の人がお腹の中で大きくなっていく胎児を決して忘れませんが、神様は、それ以上にお忘れになりません。「彼らが

忘れるような事があっても、私は忘れない」とおっしゃいます。

詩篇27篇10節に、「たとい父母がわたしを捨てても、主がわたしを迎えられるでしょう」とあります。人間の親は緊急事になれば、どうするか分かりません。あるいは忘れることがあるかも知れませんが、神様はどんな事があっても、「あなたがたを憐れむ」とおっしゃいます。

イザヤ 49:16には、「たなごころにあなたを彫り刻んだ」とあります。掌に刺青を入れる人はないでしょうが、神様はご自分の掌に私たちを彫り刻んで、契約を覚えて下さいます。掌は自分の体のうちで一番よく見る所です。そのように神様は私たちを決して忘れないとおっしゃいます。

「石がきは常ににわが前にある」――石がきはそそり立ったもので、その下に行くと、いつも気になります。そのように、神様は私たちを「決して忘れない、離れない」とおっしゃって下さいます。

イエス様の十字架は、「忘れてはいけない、十字架、十字架」と自分を打ち叩くようなものではありません。私たちのほうが一生懸命にならないとは破れてしまうような契約ではなく、神様のほうが十字架を立て、虹を立て、掌に彫り刻んで忘れないとおっしゃって下さるものです。

◆こんなに覚えられている私たちが、どうして自分の考えを突っ張って、「神様なんて言っていられない。自分で一生懸命にやらなければ生きていかれない」という必要があるでしょうか。神様は私たちに対して、「この救を仰ぎみなさい。私が責任を持つ」と言われているのですから、私たちは自分の城を明け渡してしまうことです。

【城を明け渡す】

かつては自分が主人公で、「俺が俺が」とやっていました。よそから来るものは皆いけない。「神様――あなたは内政干渉をしないで下さい」という調子でした。命のもとであり、契約の主人公である方を押出して、どうしてまともに生きて行くことが出来るでしょうか。

今晩、この方を主人公としてお迎えして、城を明け渡し、新しい城主に座るべき所に座って頂く――こうしてその方にお仕えするとき、はじめて私たちはまともな生き方が出来るのであります。

◆ガラテヤ２章 19/20節、「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」とあります。

これは神様によって救われ、命をかけてキリストに仕えたパウロの生涯です。「私はキリストと共に十字架につけられた」と言っています。獣の頭に手を置いて、「彼と我とは一つです」と告白するように、「イエス様は罪人のかしらであった者のために十字架にかかって下さいました。私とイエス様とは一つです。私が十字架にかかるべきところを、イエス様が呪われて私が生かされました。最早私が生きているのではなく、キリストが私のうちにあって、生かして下さっています。私は自分の城を明け渡しました。キリストが私の主人公です」と言っている訳です。

その確信があったから、パウロはどんな困難な中に陥っても、逞しく生き続けました。人間的に見れば、彼の生涯は何ひとつ報われることのない損ばかりのようですが、彼は「神様が報いて下さる」と生涯を走り通しました。事実、彼は神様から豊かな報いを備えられたのであります。

２テモテ2:11にかえる。「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう」――イエス・キリストは私たちの姿です。私たちはあのように死ぬべきであったのに、主が代って死んで下さいました。私たちはこの事実をそのまま受け入れる時に、私たちもパウロのように、何ものをもっても動かされない、しぶとい生涯を送らせて頂けるのです。これこそ神様が、「見よ――野の木のように育て」とおっしゃった逞しい生涯であります。

「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう」――「イエス様が私の為に死んでよみがえって下さった、それにより私たちがいま生かされています」という生涯は何ものにも犯されない強いものであり、大きな報いがあります。主と共に生かされる身分とされていることを自覚して、この方をいつも思う生涯でありたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。

（1989.1.3 戸畑教会、新年聖会９）

第十章

永遠の命をとらえよ

（もし退くなら私は喜ばない）

【９回の恵みを感謝】　１１９

【永遠の命とは真の神と主イエスを知ること】　１２１

【意志をはっきりすれば】　１２２

【与えると言われるのに退いたら】　１２４

【永遠の悔いを残さないように】　１２６

【その日その時は誰も知らない】　１２８

【宇宙から地球を見ると】　１２８

【人体／もう一つの宇宙】　１２９

【神様を第一にしてこそ自由】　１２９

「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう。もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるであろう。もし彼を否むなら、彼もわたしたちを否むであろう」(2テモテ2:11/12)

◆新年聖会は早くも４日目を迎えましたが、この３日間のご集会を通して、神様が私たちに対してどんなに熱い思いを持っていらっしゃるか、迫って下さいました。今朝も、その熱い御思いをもって、「生きよ」と迫られていると思います。

「生きよ」と言われるのは、私たちが今まで本当に生きていなかったのではないか。そんな者に対して、「永遠の命を受けよ」と迫られている事を感じると、心が熱くなります。エゼキエル書16章においては、「生きよ、野の木のように育て、たくましく生きなさい」と励まして下さいました。

私たちの周囲を見る時に、身近な所から遠い所まで――国のレベル、世界のレベルで見ても、将来に望みを持ち得るものはなく、暗いことばかりですが、それでは一切に目をつぶり、山の中にでも隠れようか――信仰とはそういうものではありません。現実の中にありながら、なおその中でたくましく生きるものです。神様によって望みを持つ――ここに、天に一つの窓があるのです。

「彼と共に死んだなら、また彼と共に生きる」――彼とはイエス・キリスト、つまり福音であります。死なない人が生きるという事はありません。イエス・キリストが死んでよみがえられたように、私たちがまたその道に従って死ぬと生きる――死ぬと言ってもピストルや刃物で自分の体を傷付けることではなくて、イエス・キリストが神様のお言葉に従って、十字架の死に至るまで従い通されたように、私たちも全く自分を捨てて従う――これが「彼と共に死ぬ」一つの意味です。もう一つは、「イエス・キリストが十字架にかかって死んで下さったのは、私のためでした」と認めることです。

罪について――私は長い間、「神様なんかあるものか。私は生れたから生きているのであって当り前のことだ。神様のお世話になんかなっていない」と思っていました。これが最大の罪だったのです。

この世の法律を犯すのは、神様に対する罪を持っているからであって、「（神様なんかいないんだ）誰も見ていなければ、何をやったって構わない」と言って

悪いことをする訳です。基本は神様を無視するところにあります。

その私たちの罪の為に、イエス様は十字架にかかって下さいました。それによって私たちは今、滅ぼされるべき者が生かされているのであります。

旧約聖書レビ記には、罪のための供え物をする時に、いけにえの獣の頭に手を置いて、「この獣と私は一つのものであります。本来は罪を犯した私が殺され、血を流さなければならないのですが、この獣が私の代りに血を流しますので、この血に免じて私を許して頂きたい」ーーーこのようにして、私たちは罪を許されることが定められました。これは神様がお定めになったことであって、「このようにしてあがないをするならば許される」と約束されています。

イエス・キリストは神の子羊として、私たちの代りに死んで下さいました。一度だけささげられて、永遠の完全なあがないを遂げて下さったのです。私たちが「私はイエス・キリストと同様に殺されるべきところですたが、彼が代って死んで下さったから今、生かされています」と自覚するーーーつまり、彼と共に死ぬと、また彼と共に生きることができるーーーイエス・キリストが死人の中からよみがえられたように、私たちはどんな絶望の中からでも、どんな失敗・挫折の中からでも、よみがえりの力をもって引き上げらるーーーそこには解決の出来ないものはありません。

「緋のように赤い罪であっても、雪のように白く、紅のように赤くても、羊の毛のように」と、私たちの罪を許して下さるーーーそれが神様の救であります。私たちは毎週そのように生かされていますが、今回の聖会は毎回がその通りです。

私たちが死人のうちからよみがえった主を仰ぐと、「彼と共に死なば、彼と共に生くべし」ときますから、「そうですか、有難うございます」と絶えず信仰が更新されるのです。

昨年はこのように恵まれた、今年はこうに違いない、来年はどうありたいーーーそれもありますが、私は一回毎に、神様の前に立たせて頂くのです。いま支えられて、いま立っているーーーもしそれがなければ私は落ち込んでしまって、とても立つことはできないと思います。

神様のおっしゃる「生きる」ということの意味が、段々深まって来るように感

じられますが、うまく表現ができません。本当に物事を説明するのはむつかしいと思います。神様も私たちに対する言葉が足りないと感じられているのではないかと思います。最もまさったものとして、「永遠の命」と言われているのもそうでしょう。

◆1テモテ6:12、「信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたは、そのために召され、多くの証人の前で、りっぱなあかしをしたのである」とあります。これは若い伝道者テモテに対するお勧めの言葉です。

永遠の命とは、200歳とか300歳まで生きると言われている訳ではありません。創世記のはじめの頃には、900歳というような人が登場しますが、長く生きさえすれば人間が幸福かと言うと、決してそうではありません。最近は「長く生き過ぎることの危険」を人々が気付きはじめたと言われます。長く生きる事により、かえって苦しみの中に縛られる事があります。

私たちは命が与えられて生きていますから、色々なことをいたします。あらゆる事を考えます。神様のおっしゃる「永遠の命」とは、それらの一切を越えた最高のものという意味です。言いかえるなら「死に勝つ命」です。人間が最も恐れている「死」を乗り越える命です。

それはまた「命を生み出す命」ということも出来ます。動物園の飼育係りが、ある動物を育てて、その動物が子供を産むーーーその子が育って更に子供を産んだ時、飼育係りは一人前になると言われます。

同じように神様は、私たちに「命」を与えて下さいますから、私たちは日毎に生き、生涯勝利を得るーーーそして更に新しい命を生み出し人を生かして行くーーーそれが永遠の命です。これは個人という枠を越えた長い命です。

永遠の命については、また別の説明があります。ヨハネ17章3節、「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあたなと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります」とあります。

人間同士でも、本当に相手を知るには、交わりがなければなりません。知る事によって交わりが生じるとも言えます。神様と主イエス・キリストと交わり、その方を知る事が、永遠の命であると言われるのです。

「あなたは永遠の命を獲得しなさい。そのために召されて、多くの証人の前でりっぱなあかしをした」――神様はテモテに対して、あなたが召された目的は永遠の命を獲得することである。その為には信仰の戦いを立派に戦い抜きなさい、と勧められています。それによって（テモテが牧会していたエペソ）教会をも生かすようにと期待されている訳です。

教会には様々な異端や律法主義、グノーシス主義とか、天使礼拝、あるいは禁欲主義など色々なものが入って来ていました。パウロの働きの実はまさに飲み込まれようとしており、自分は遠くローマにおいて刑務所に繋がれ、首を切られようとしている――そのような中にあって、彼は死人のうちからよみがえられたイエス・キリストを思って、永遠の命の望みを持ち、彼自身も生き、テモテをも生かしたのです。彼はこの手紙を書いたすぐあと、テモテの到着を待たずに首を切られて殉教しました。

彼がその信仰をもって召されたあとに、私たちが今、彼の信仰の実にあずかっている訳です。パウロはテモテに対しても、「そのような命を受けなさい」と命じています。テモテがそれまで神様から召された召しにかなって歩き、立派なあかしをして来たように、はっきりその道に従って歩き、永遠の命を獲得するようにと言っているのです。

「信仰の戦いを戦いぬく」とありますが、信仰は文字通り「信じて仰ぐ」のであって、神様のほうが恵みを全部備えておられるのです。信仰の分類に、自力、他力という分けかたがありますが、この信仰は他力です。神様が人間に注いで下さる――こちらは受けるだけです。約束どおり与えて下さるとなれば、こちらは受ける意志をはっきりしなければなりません。したがって自発的に求める姿勢がどうしても必要であります。「信仰の戦いをりっぱに戦いぬく」のは積極的な生き方であり、「永遠の命を獲得する」のも積極的な姿勢であります。

◆マタイ11:12/14、「バプテスマのヨハネの時から今に至るまで、天国は激しく襲われている。そして激しく襲う者たちがそれを奪い取っている」とあります。バプテスマのヨハネは旧約最後の預言者であります。「イエス様が今からお出でになる、時は満ちた。神の国は近付いた。悔い改めて福音を信ぜよ」と第1声を

【意志をはっきりすれば】

述べ、新約時代が始まりました。恵みの時代であり、新しい契約ですから、ただ頂戴すればよいのですが、受けるためには意志をはっきりしなければなりません。

じっとして口を開いていれば、何か落ちて来るというものではありません。海にはそういう魚がいるそうで、アンコウのように大きな口を開いていると、海水の流れに伴って微生物が口の中に入って来る、そうするとパクリとそれを飲み込んでは、また口を開いて待っている――福音はそういうものではありません。神様が「さあ、上げよう」とおっしゃったら、「はい」と出て行って、「下さい」と手を出すことです。

ある伝道集会で、講師の先生が1枚の金貨を取り出して、「出て来た人にこれを上げます」と言われた時、小さな子供が「それでは」と出て行って金貨を貰ったというお話です。大人たちはそれを見て顔を見合わせたが、もう間に合わなかったという事です。神様が最もまさった永遠の命を下さるとおっしゃるのですから、進み出て頂戴する――そのような積極的な姿勢が絶対に必要であると思いました。

ある方が、「福音は無代価である。しかしこれを大いに高く買いなさい」と言われました。確かにそのとおりであると思います。私は少し前から「NHK日本語研修センター」の通信教育を受けています。テキストと共に指導テープを送って来ましたから、課題に従って練習した結果を吹き込んで送りますと、添削をしてくれます。老練なアナウンサーたちが講師になって、署名入りで添削をしてくれます。

第1回の教材の中に、挨拶――つまり、声を出すというのがありました。課題はたった二つ、「おはようございます」「ありがとうございます」これだけです。そして「話そうと思ったら自然に姿勢が出来るでしょう」と言われるのです。自分から数メートル先に人がいるものとして、その人に向かって挨拶をする、まず第1に、話そうとする意志を持つこと。第2に、息を用意する――「意志と息を用意して下さい」と言われました。

本気で話そうと思えば、スーッと息を吸って胸を張り、ちょっと顎を引いて、そして話す。すると自然に「おはようございます」「ありがとうございます」と

出て来るでしょう、と言われます。そう言われればなるほどそうで、話そうとする気持がなければ話す事は出来ませんし、気持があれば自然に息を整え、姿勢を正し、顎を引くという訳です。

「永遠の命を下さる――激しく襲う者がそれを奪い取っている」とおっしゃるのですから、「それなら頂こう」という意志を持ち、「では下さい」と踏み出す――そういう姿勢でなければならないと教えられました。

気持の問題だから、どっちにしても大して変わらないと思いますが、神様はちゃんと見ておられます。ヘブル人への手紙に、「もし退くなら、わたしの魂はこれを喜ばない」と書いてあります。「（神様がそうおっしゃっても）私はまたにしよう。そうでしゃばってもどうかと思う。私は特別なんだから、私なりの信仰があってもよいのではないか」と退きます。自分で退いたつもりはなくても、「またにしようは悪魔のささやき」、また「沈黙は拒絶の回答」であります。これでは神様のみ心にかないません。

神様がパチッと叩かれる訳ではありませんが、自分で命のパイプを千切るような事になってしまいますから、自業自得です。

出エジプト記3章を見ますと、モーセが神様から召された時、「わたしは口下手ですから、エジプトに行って奴隷を解放するなんてとても出来ません。あの強国の王様と掛け合って、とてもそんな事はできませんから、誰かほかの人を遣わして下さい」――それまで色々なやり取りがありましたが、最後にそう申しますと、神様から「誰が口を造ったのか！」と叱られました。「仕方がない。それではお前の兄のアロンが、お前の口に代りなさい。そしてお前はアロンに対して私（神様）の代りになって、説明をしなさい。アロンがスポークスマンになって話しなさい」と二人を一組としてエジプトに派遣されました。この場合モーセは徹底的に叱られなかっただけさいわいであります。神様のあわれみでした。

◆民数記14章には、イスラエルの民が、神様が「さあ、約束の国を与えるから入って行きなさい」と御命令になったのに背き退いたことが記されています。「あんな所に行ったら大変です。堅固な町に背の高い民族が住んでいます。自分たちはこんな状態――たくさんの家畜を連れて、活発に動くことができない―

――とても勝つことができない」と退いた時に、神様は大変お叱りになりました。

「わたしを10度も試みた――何度も何度も私を信じない、私には出来ないだろうと侮った」とおっしゃったのです。「私は疫病をもって彼らを滅ぼし、あなた（モーセ）を彼らよりも大きな強い国民としよう」とおっしゃいました。モーセは必死で執り成しをして、「今あなたがこの民を残らず殺されるならば、あなたのことを聞いた国民は、『イスラエルの神は与えると誓った地に導き入れることができなかった為に彼らを殺した』と言うでしょう。それではあなたのお名前がすたります。どうかあなたのいつくしみによって、この民をゆるして下さい」と執り成しました。

そのとき神様は、「私はあなたの言葉の通りに許そう。しかし私は生ける神である。私の栄光を見ながら、私の声に聞き従わない人々は、一人も約束の土地に入ることを許さない――荒野で40年間さまよわせ、その間に緩慢な死刑を執行する」とおっしゃいました。当時ものごころついて神様に聞き従う事が出来る年になっていた人はみな死に絶え、荒野で生れた者、また先に子供であった者たちが成長して40年後に新しい指導者ヨシュアに率いられて約束の国に入った訳です。

神様が素晴らしい約束をして下さったからと言って、ポカンと口を開いて、「ではそうして下さい。私は寝ています」と言っているなら、神様の前で退いた者として、お叱りを受けるに違いありません。それでは賜物を頂くことは出来ません。あの時、彼らは見て来たのですが荒野で死に、入る事は出来ませんでした。これは深い意味があるのであって、私たちが見る事は見、聞くことは聞いても、自分のものとしてそれを体験できない――そのような惨めなことになるのであります。退くことは決してしてはならないと教えられました。

神様がいま生きて、私たちに働いて下さるのに、どうしてこれを受け止めることが出来ないでしょうか――それは私たちが「神様は生きておられる方である」と思わないからでしょう。「なに、当分はこのままで何とかなるさ」と思っているからです。

２ペテロの手紙に、「あざける人たちが出て来て、『すべてのものは天地創造の初めからそのままであって、変っていない』という」と書いてあります。しか

し、同じことが続いているのではなくて、すべてのものは激しく流れ去っています。大は宇宙や地球から、私たち人間に至まで、すべてのものがただ一度の生涯を飛び去って行きます。そして、それには必ず終りが来ます。天地の終りが来なければ人間のほうが先に終り、一旦眠ってから覚まされて裁かれます。決して神様を侮ることは出来ません。

今、何事もないように見えるのは、神様が一人でも救われる為に、千年を一日の如く、一日を千年の如く待っておられるのであります。マタイによる福音書に、「時が迫っている」と書いてありますが、神様は私たちに対して、いま警告をしておられる訳です。

【永遠の悔いを残さないように】

◆ルカ16章 19/31節、朗読。これは永遠の悔いを残した人の失敗談です。ある金持が、神様から預かっている命もお金も全部自分のものであるかのように誤解をしました。「私は人よりもまさってうまい事をやったから、こういう幸福を得た。おもしろおかしく楽しんで暮らそう」と生きていたのでしょう。これは神様に対して泥棒を働いた事になります。

1コリント4章には、「あなたの持っているもので、もらっていないものがあるか。もしもらっているなら、なぜもらっていないもののように誇るのか」とあります。ですから間も無く彼は死に、同じ頃、その門前にいた乞食のラザロも死にました。神様は金持を貫められました。一方ラザロは神様を敬う人であったとみえて、天国に行くことが出来ました。

金持が地獄の中から、「ああ苦しい。熱い、苦しい。どうぞあのラザロを私の所につかわして、彼の指先に水をつけて、この舌を冷やさせて下さい」とお願いしましたが、神様の決定を変える事が出来ず、遠く隔てられた淵を乗り越える事が出来ませんでした。

日本の裁判制度では、最高裁の判決が出ると、すべてが定まります。明らかな証拠が無い限り再審は行われません。そのように、神様がすべてを裁き、決定を下されると、誰もこれを変える事が出来ません。

そこで金持は、「そうですか、それでは自分の父の家にラザロを遣わして、私の5人の兄弟がこんな苦しい所に来ないように警告して下さい」と言いますと、

「それは必要ない。教会があり、伝道者がいる」と言われました。「いや、死人の中から甦った人が行ったならきっと驚き悔い改めるに違いありません」と言うと、「いや、そうではない。彼らが教会に聞かないならば、たとい死人の中から甦った者が行っても、『どこから来たか、甦ったなんて嘘を言うな』と誰も信じない。だから駄目だ」と断られてしまいました。結局その永遠の定めはそのままです。「熱い熱い、苦しい。ああしまった、しまった」と苦しみ続けなければならなかったのです。

この肉体は焼けば灰になり、塵にかえります。これは聖書に書いてある通りです。「死ねば何もなくなって、意識もなければ、苦しいこともないから、死はない」とある人は言います。ある哲学者が「人間は死とは関係がない。なぜなら生きている間は私に死はないのだし、死んだらもう私がないのだから。死と私とは関係がない」と言った人がいますが、それは違います。神様が永遠の滅びに定められたならば、体は灰になっても魂はなくなりません。永遠の悔いと、永遠の苦しみと、永遠の火の中でもだえ続けなければならないのです。

永遠の命は、私たちが神様から受け入れられて、永遠に覚えられることです。これは決して消滅することはありません。ある人は、自分の娘の写真を誕生以来、ずっと撮り続けて、結婚する時に何万枚か持たせてやったと言います。「これが私の生涯の記念です」と言う人がありましたが、写真はいつか古びてしまいます。子供もいつか年をとって死んでしまいます。そうすると、その人は一体何のために生きて来たのだろう、ということになります。

しかし私たちが神様を敬い、その道に従って生きて行きますと、永遠に覚えられます。決して忘れられません。私たちは消滅しません。自分で何かを刻んだり、何かを積み蓄えて残さなくても神様の前に覚えられるのであります。

２テモテ２章19節、「神のゆるがない土台はすえられていて、それに次の句が証印として、しるされている。『主は自分の者たちを知る』。また『主の名を呼ぶ者は、すべて不義から離れよ』」とあります。私たちは天国の礎石に、神様のものとして名を刻まれ、永遠に覚えられます。これは火の中で永遠に悔いるのとは逆で、そこには永遠の賛美、感謝が続いて行きます。

【その日その時は誰も知らない】

◆飛行機が事故を起すと、フライトレコーダーとボイスレコーダーを回収して分析します。ボイスレコーダーには、最後の30分間ぐらいの、操縦室における乗員の会話が記録されていますから、墜落する前に何が起ったかが分かる訳です。

私たちが神様の前に生涯が終った時も、その最後の部分が固定されます。「まだまだ私は当分大丈夫だろう。死ぬ間際に、『イエス様、救って下さい』と言って天国に行こう」と思っていると、突然召されて「あ！しまった、ちょっと待って下さい。しかし間に合わない！ごめんなさい――苦しい、熱い、熱い――しまった、しまった」となります。そして、それが永遠に残されてしまいます。

永遠の命にあずかった私たちは、「神様、有難うございます。あなたはイエス・キリストを立てて、私たちに喜びのおとずれを下さいました。彼の道に従い、彼と共に死に、彼と共に生きる永遠の命に入れて下さいました。ありがとございます。なになればこんな者を選んで下さったのでしょうか。神様は何と素晴らしいお方でしょうか。神様はほむべきかな」と天国の礼拝につらなる――これは永遠に続くものです。

ですから今という時に、私たちは神様の恵みのお言葉に対して、どのようにすべきでしょうか。一歩さがって腕組みをして見ているのか、「そのうちどうにかなったら行ってみようか」と言っているのでしょうか、それで間に合うのでしょうか。「その日、その時がいつかわからないから、あなたがたは備えをしていなさい。目を覚まして準備をしていなさい」と言われています。私は今、目を覚まさなければならないと教えられています。毎回の御集会に出る度に目を覚して頂くように、絶えず神様の前に目を覚まし続ける者でなければならないと教えられたのです。

【宇宙から地球を見ると】

◆最近、科学的な幾つかの話題を通して、ものを見る目について教えられました。何年か前にある評論家が、「宇宙からの帰還」という本を出しました。アメリカに渡って12人の宇宙飛行士たちから取材をして、なんのコメントもつけないでそのまま出した本です。

読んでみると、宇宙飛行士たちは、「宇宙体験をした人は、前の通りの人間ではあり得ない」と言っていました。ある人は「私は宇宙に行って、月の上を歩き、

神がそこにおられると実感した」と言います。

私も最近、別の写真集で月の表面から昇る地球の写真を見て大変感動しましたが、地球は宇宙の中における唯一の素晴らしいオアシスであります。イザヤ書45章に、「天を創造された主、すなわち神であってまた地をも造り成し、これを堅くし、いたずらにこれを創造されず、これを人のすみかに造られた主」と言われています。地球が偶然に出来た、人間をはじめすべての生物も偶然の所産であるなどとは、到底考えられません。（詳細、略）

◆人間の体は真に素晴らしく造られていて、一つの宇宙という事も出来ると言われます。最近、様々な観察技術が発達した結果、人体の仕組みにはただただ驚かされます。

しかし私たちがそれをいかに見るかという事が問題であります。「不思議だなあ、うまく出来ているなあ、造化の妙とは何と素晴らしいものか」という人。ある人は「すべての生物が同じ仕組みによって造られているから、これは進化の証拠だ」と言います。しかし聖書による時、私たちはそれは神様がすべてのものをお造りになったという証拠である、と神様を誉め称える訳です。（詳細、略）

◆２テモテ2:8 、「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい。これがわたしの福音である」――同じものを見ても「ああ、不思議だな。どうしてこんなことになっているのだろうか」というのではなく、そこに主権者がおられることを見なければならないと思います。すると全く違った世界が開けて来るのです。

イエス・キリストは私共の先頭に立ち、模範として生きて下さいました。神様に従い尽くし、神様によってよみがえらされました、私たちも同様に従い、神様によって生かされる時、どんな困難な環境にあっても、なお天に一つの窓を望むことが出来ると教えられました。「永遠の命を捕らえよ、そのためにあなたは召されたのだから、さあ」と言われている時に、私は決して退くのではなくて、「それではこんな者にもあなたのみ心を行って下さい。私は求めます、期待します」という姿勢をもって神様の前に進み出たいと思います。

２テモテ2:11、「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生き

【人体／もう一つの宇宙】

【神様を第一にしてこそ自由】

るであろう」、今年はこの方を掲げて、「このように生きなさい」とお命じになって下さいました。私たちは自分中心ではなくて、神様を第一にするならば、かえって真の自由があります。子供が自分勝手をしたいと家を飛び出せば大変なことになりますが、親の庇護のもとにある時、拘束を受けているようで、実は本当の自由があるようなものです。

どうか全体を支配される方のもとにあって、この自由を得たいと思います。これは束縛でもなんでもありません。「彼とともに死に、彼と共に生きる」生涯でありたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。

(1989.1.4 戸畑教会、新年聖会１０)

第十一章

主に命をまかせよ
（神様を嗣業とする喜び）

【王座を明け渡す】　１３３

【あなたの心に私のおきてを置く】　１３３

【任せない人に手を出すと叱られる？】　１３５

【任せきったその時から】　１３６

【あなたがたの為に戦う】　１３７

【感謝・賛美をはじめた時】　１３８

【かつて神様を偽った民をも】　１３９

【人間が悲しくなる時】　１４２

【神様が私たちを嗣業に！】　１４３

【自主の人として神様の手の下で】　１４４

「だから、あなたがたは、神の力強い御手の下に、自らを低くしなさい。時が来れば神はあなたがたを高くして下さるであろう。神はあなたがたをかえりみていて下さるのであるから、自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねるがよい」

(1ペテロ5:6/7)

【王座を明け渡す】

◆今年はこの三つの標語を与えられました。福音とはイエス・キリストご自身である。そしてこの中からすべての恵みが形をとって与えられるのであります。イエス様が神様に従いぬき、死んでよみがえらされたように、私たちが全く己を捨て、神様第一に生きて行くならば、永遠の命があたえられるのであります。これは今朝の集会で学んだところであります。

神様に対して自分の思いわずらいを一切委ねるとは、どういうふうにしたらよいのか。そうすると神様がどのように私たちを生かして下さるのか、この午後の集会で学びたいと願います。

それはひとことで言うと、「王座を明け渡す」ということであります。かつて夕食の頃に、テレビで「水戸黄門」という番組をやっていた事があります。色々な事件のあと彼が身分を明かすと、みな驚いて「ハッ」と平伏します。殿様がそれまで一段高い所に座って威張っていたのに、飛び下りて光国を高い席にすわらせ、その前に「ハハッ」と平伏します。

同じように私たちも今までは自分が王座にすわって、「俺が大将だ」とすべてを自分中心にやっていたのですが、今年は主が私たちの主人公として来て下さったのですから、自分の座を下りて、イエス様を主人公の座にお迎えしてお仕えするーーーそうすると神様が私たちの責任をもって下さるので、私たちの生涯はすっかり変ってしまいます。

【あなたの心に私のおきてを置く】

◆エゼキエル36章 24/27節、「わたしは清い水をあなたがたに注いで、すべての汚れから清め、またあたなたがを、すべての偶像から清める。わたしは新しい心をあなたがたに与え、新しい霊をあなたがたの内に授け、あなたがたの肉から、石の心を除いて、肉の心を与える。わたしはまたわが霊をあなたがたのうちに置いて、わが定めに歩ませ、わがおきてを守ってこれを行わせる」とあります。

これは実にさいわいな約束であります。イスラエルの民は神様から背き離れた

結果、きびしい警告を受けます。言われただけでは分からないから、ある時は叩かれ、ある時は滅ぼされます。そういう中から残りの民が、また新しく起される――とにかく色々な取扱を受けます。

神様にとって見れば、捨てることは簡単でしょう。ノアの洪水の時のように、「わたしはこのような人間を造ったことを悔いる、みな大水でぬぐい去ってしまおう」とすることは簡単ですが、あの洪水のあと神様は空に虹をおいて、「再び肉なるものは洪水によって滅ぼされることはない」と約束をされました。ですから捨てようとしても、捨てることは出来ないのです。

何とかして、その中から軟らかい心を引き出したい、自ら励んで神様に仕えるようになってほしい――しかしこれはなかなかむつかしい事ですから、色々な出来事を通して警告を与え、預言者を遣わし、刑罰を加え、ある時は他国の捕虜にならせる――その中を通してイスラエルを整えられた訳です。

こうして神様がイスラエルの民に、ご自分が神である事を示されるとき、イスラエルは変えられます。神様は彼らのうちに新しい心を与え、ご自分の（聖）霊を置き、「わが定めに歩ませ、わがおきてを守ってこれを行わせる」と言われます。

人間同士でも、他人の心の中に手を差し込んで変えることは出来ません。例えば、子供に「勉強しなさい」といくら言ってもしません。「そんなに言うからしない」と言うので、言わなければなおしませんから、親はやきもきする訳です。

自発の心を引き出すことはむつかしいことです。英語で「教育」という言葉は「引き出す」という語源から出て来たものであると言われます。

その意味で神様は実に素晴らしい教育者であって、あれほど背き離れて、どんなにしても立ち返らなかったイスラエルを変えて、彼らのうちに神様のお心を置き、神様のおきてを置いて、これを守って行わせて下さる――自ら進んで、律法以上のことをするようにされると言われるのです。

長崎には有名なめがね橋というのがあります。これはアーチ構造ですが、別に鉄筋が入っている訳でもなく、コンクリートで固めてある訳でもありません。両側からずっと石を積み上げて（勿論、工事中は木枠を作りますが）、最後にくさ

び型の要石（かなめいし）を上から落し込むと、力は両側の橋台にかかってしっかりと固定されます。ところが先年の大水害で、材木やごみが流れて来てこの下につかえ、下から突き上げた為に崩れたと言われます。

人間の心も同じであると思いました。アーチ橋を上から押さえても叩いても動かないように、「そんな事では駄目だ、しっかりしなさい。このようにしなさい。あのようにしなさい」と言われ、自分でそうしようと思っても、どうする事も出来ないのです。人の心は堅いものであります。

しかし、神様がご自分の霊を私たちのうちに置いて、中から突き上げるように私たちを変えて下さる時には、自発の心が起って、さしもの堅い心が崩れてしまいます。そして、外から要求されていたおきて以上の事を、喜びのうちにやり遂げてしまうようになります。それが新約の恵みです。神様はそういう事をなさる方であります。

◆「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう」(2テモテ2:11)。私たちは自分で自分の心を変えようとしても出来ません。エレミヤ17章に、「心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。だれがこれを、よく知ることができようか」とあります。

しかし神様は福音であるイエス・キリストを立てて下さいました。彼を死人のうちからよみがえらせた力をもって、私たちを変えて下さる時にはたえどうあっても大丈夫であります。「そうですか、有難うございます」と信頼すると、私のうちに新しい心を与えて下さいます。そこで変えられた者として喜んで生きて行くと、実際に変って来るのであります。

集会の前、準備のためにお祈りをしている時、なかなか確信が持てない事があります。めがね橋を上から押さえるように、「神様から恵まれなければならない。せっかく皆さんが遠い所からお出でになって、空しく帰られるようなことではいけない。神様、どうか恵んで頂きたい」と願うのですが、自分が働いて一生懸命にと考えている時には確信が持てません。

しかし「そうだ、私が頑張ってお話を組み立てるのではない。聖会の主人公はイエス様です。この方が福音の道筋に従って恵んで下さる。『わたしと共に死ん

だなら、わたしと共に生かす』とおっしゃって下さる―――そうでした、私がするのではなく、神様がなさることです」と信頼しますと、大変楽になって、自分自身も恵まれます。こうして一回毎に支えられてまいりました。

これは微妙なところです。自分で一生懸命にやって行くと、どこまで行ってもきりがありませんが、自分の心をうちから押し上げられるように、「神様がそうおっしゃるのだから、この方にお仕えしよう。有難うございます」となりますと、固い心がポロッと崩されてしまいます。

神様に任せると、神様も喜んでご支配になって下さいます。任せない人に手を出すと、「何ですか！他人の懐に手を入れるようなことをしては困ります」と怒られるかも知れません。神様はどんなことでもお出来になる方ですが、自分から心を開いて、「神様、どうぞ」となるまで待っておられます。そうなればサッと私たちのうちに働いて、実に素晴らしいことが行われるのです。

【任せきったその時から】

◆創世記39章 1/6節、朗読。5節に、「彼がヨセフに家とすべての持ち物をつかさどらせた時から、主はヨセフのゆえにそのエジプトびとの家を恵まれたので、主の恵みは彼の家と畑にあるすべての持ち物に及んだ」とあります。

これはイスラエル（ヤコブ）の11男ヨセフの物語です。ヤコブには4人の妻がありましたが、ヨセフは最愛の妻ラケルの産んだ子供でした。年寄子でしたから、ヤコブは他のどの子よりも彼を愛して、彼の為に特別に長袖の着物を作ったとあります。ですから、兄弟たちは彼を憎んで穏やかにものを言う事ができなかったとあります。

あるとき、野原で羊を飼っているお兄さんたちの所に使いに出掛けました。遠くからそれを見た兄たちは、話し合って「あいつを殺して穴に投げ入れ、父には『悪い獣が彼を食った』と言おうではないか。そして彼の見た（両親や兄たちが自分に仕えるという）夢がどうなるか見ようではないか」と言いました。一番上の兄がこれを聞いて、助けようとしましたが、彼の知らない間に、他の兄弟が「殺すよりも、彼をイシマエル人（隊商）に奴隷として売ろう」と提案して、売り飛ばしてしまいました。そして、父には山羊の血を塗った服を持ち帰って、「これは誰の着物ですか」と言いました。ヤコブは、ヨセフが悪い獣に噛み裂か

れたと思って長い間、その子の為に嘆きました。しかし実際は、彼は生きてエジプトに売られ、王の侍従の家に買われていた訳です。

ヨセフは神様を敬う人で、どこに行っても神様の祝福が伴ないましたから、それを見た主人が、「これは普通の人ではない。すること、なすことみな神様の祝福がある。確かに彼は神様と共にいる」と気が付き、そば近く仕えさせ、次第に家の中の多くの事を任せて行きました。するといよいよ神様の祝福がはっきりするものですから、遂にその家とすべての持ち物を全部彼の手に任せてしまいました。するとその時から彼の家の内にも、外にも大きな祝福が臨みました。ですから「これなら大丈夫」と遂には大事な金庫の鍵まで預けてしまったのでしょう。ただ一つ主人が言うことは、「今晩なにが食べたい」ということだけになってしまったとあります。

ここに一つの鍵があります。それは「彼がヨセフに家とすべての持ち物をつかさどらせた時から」という点です。私たちが神様にお任せしようとする時、色々な事を考えたり試みたりするかも知れません。しかしある所から先は信用であります。投げ掛けなければ分かりません。私たちは侍衛長ポテパルと同じように、神様に対して主権を明け渡すーーーつまり一切について神様を信用すると、喜んで全責任を持って下さるのです。

◆出エジプト記14章 13/14節、「あなたがたは恐れてはならない。かたく立って、主がきょう、あなたがたのためになされる救を見なさい。きょう、あなたがたはエジプトびとを見るが、もはや永久に、２度と彼らを見ないであろう。主があなたがたのために戦われるから、あなたがたは黙していなさい」とあります。

イスラエル民族は 430年間にわたって、エジプトで奴隷の生涯を送っていました。その呻きに答えて神様はモーセとアロンを送って、彼らを解放されました。次々に奇跡が起り、神様の手が強く加わるにつれて、パロ王はだんだん砕かれ、最後の夜にはエジプト中の初子という初子が全部打ち殺されるに及んで、王は「頼むから出て行ってくれ。羊も牛もつれて行きなさい。私の為にお祈りしてくれ」と言うようになり、イスラエルの民は高らかな手によってエジプトを出た訳です。これは神様が引き出されたものでした。

しかし、エジプト王はたちまち気を取り直して、イスラエルを追いました。それは一時に大量の奴隷労働力を失うことが、大変な損失である事に気付いたからです。そこでどうしても捕らえて連れ帰ろうと追い掛けて来た訳です。イスラエルは紅海の岸に追い詰められれ、エジプトの精鋭な軍隊と戦車が近寄って来たとき、彼らは叫びました。

「荒野で死なせる為に私たちを引き出したのですか。こんな所で死ぬよりも、エジプトびとに仕えるほうが、私たちには良かった」と言います。モーセは民に向かって、「神様は、あなたがたのために戦われるから、あなたがたは黙っていなさい」と杖を上げて海のほうに伸ばしますと、激しい東風が吹いて海は退き、乾いた道が出来ましたから、イスラエルは急いでこれを渡りました。海の水は左右に垣となっていたとあります。

エジプト軍も続いて海の中に入って追って来ました。エジプト軍の戦車が軋んで重くなる間に、イスラエルは渡りおわり、モーセが再び手を海の上にさしのべると、激しい東風は止まって、海の水はもとに戻り、エジプト軍はことごとく溺れ死にました。

彼らは緊急事態に当ってどうする事も出来ませんから、「神様、どうか救って下さい。あなたは万物の主人公、私たちをエジプトから導き出された神様ではありませんか」と信頼したのに対して、神様が「わたしの戦いである」とこのようにされたのです。

◆歴代志下20章 15/17節、「この大軍のために恐れてはならない。おののいてはならない。これはあなたがたの戦いではなく、主の戦いだからである」とあります。

これはユダの王ヨシャパテの時の事件です。北アフリカ3国の連合軍が国の奥深く攻め込んで来ました。圧倒的な兵力をもって来ましたから、彼は神様の前に手を挙げて、「われわれはこのように攻めて来る大軍に当る力がなく、またいかになすべきかを知りません。ただ、あなたを仰ぎ望むのみです」と祈りました。民もみな祈りました。彼は自分の王座を明け渡したのです。

その時、神様は答えられました。「よろしい。これはあなたがたの戦いではな

く、主の戦いである。明日これこれの所に行きなさい。あなたがたは戦うに及ばない。共におられる主の勝利を見なさい」と約束して下さいました。

ヨシャパテ王は感謝をして戦いの備えをしました。先頭は聖歌隊でした。ラッパを吹いて感謝し、「主に感謝せよ、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」と歌わせました。感謝、賛美をはじめたその時、3国連合軍の間で同士打ちが始まりました。これは主の伏兵でした。初めにアンモンとモアブの人々がセイル山の民と戦い、全く滅ぼしてしまうと、彼ら同士が互に戦い、ついにことごとく滅びてしまいました。身近な者である程、同士打ちになると深刻です。顔を見知った人が、「お前もか」とやりますから大変なことになります。

とうとう戦わずして連合軍は全部滅び、地には死体だけが残りました。昔の戦争には色々な宝物を持って行ったらしく、彼らが滅びたのでそれらをかすめた訳ですが、3日間もかかりました。

この時、もし「私たちも出来るだけの事をしますので、神様、少し助けて下さい」ということでしたら、こうはならなかったでしょう。彼らは自分の力ない事を悟って、全面的にお任せしたーーーこれはジェスチャーではなく、緊急事態におけるせっぱ詰まった信頼でした。もし助けて下さらなかったら滅びてしまいます、と信頼したから神様はお答えになったのです。

◆ヨシュア記10章6/14節、朗読。「これより先にも、あとにも、主がこのように人の言葉を聞きいれられた日は一日もなかった。主がイスラエルのために戦われたからである」とあります。

ギベオン民族が、あるとき周辺の王たちに取り囲まれ、滅ぼされようとされた時、ヨシュアに救援を求て来ました。これはその時のギベオン救援作戦の模様です。

ギベオンの民というのは、神様のご命令によって滅ぼされなければならない民でした。遠く離れた土地の者は良いが、自分たちの内にそういう人たちをとどめて置くならば、後々棘のように内から自分たちを痛める事になるといわれたのです。

ギベオンの人たちは、遠い土地の民であるかのように偽ってイスラエルと契約

【かつて神様を偽った民をも】

を結びました。ある時ぼろぼろの服を着て痩せこけたろばに乗った人がやって来て、「こちらはイスラエルの皆さんでしょうか。ヨシュア大将にお会いしたい。我々は遠い国から来た者ですが、私たちと不可侵条約を結んで頂きたい」と言ってまいりました。

遠いか近いかは大問題ですから、彼らは見定めようとした訳ですが、あまりに古びた袋、古びたぶどう酒の皮袋、乾ききって砕けたパンなどを見て、驚きあきれるばかりで、神様に祈ることを忘れて、「よし、そんな遠い所から来たのなら、お前たちを滅ぼさないと約束しよう」とサインをして、進んで行くとつい2,3 日して彼らの町に着きました。

そこで内部からつぶやきが上がりました。「なんだ、我々の指導者は、神様の戒めに背くことをしてしまったではないか。私たちとしてもこんな人たちと一緒に暮らさなければならないとなったら大問題だ。指導者は責任を取らないのか」と言う訳で、随分深刻なことになりました。

しかし指導者たちは言いました。「一旦神様の名によって約束したからには破る事は出来ない。仕方がないから彼らを生かしておき、水を汲み、薪を切る者、つまり奴隷にしよう」という事になりました。ギベオンとはそういう人たちだった訳です。

ところがかつてギベオンの同僚であった王たちが、「あの人たちはうまいことをしてイスラエルの側に入り込んでしまった。彼らの手先になって我々を滅ぼしに来るかも知れない――やられないうちにやってしまおう」とギベオンの町を取り囲みました。

こうして戦いが起った時、ギベオンの人たちは、「ヨシュアさん、助けて下さい。我々はいま周りから囲まれて滅ぼされそうです」と使を送りました。そこでヨシュアはすべての戦士を引き連れてギルガルから上って行きました。そのとき主は「恐れなくてよろしい。敵をあなたがたの手に渡す。必ず勝利を与える」と約束されました。

こうして戦争に出て行くと、逃げる敵の上に天から大石が降って多くの人を殺しました。これは大ひょうであります。あの地方に行くと今でも大きなひょうが

降ると言うことですが、イスラエルが追い掛けて剣で殺した者よりも、ひょうに打たれて死んだ者の方が多かったと記されています。神様はおっしゃったように、ギベオンの民を救われた訳です。

追撃戦は時間が勝負です。私も軍隊にいた時に追撃・退却戦の訓練を受けたことがあります。訓練ですから全体の半分が退却軍となり、半分が追撃軍になる訳ですが、逃げるほうも大変ですが、追い掛けるほうも大変です。逃げるほうはパッとうしろを振り向いては射撃をして、怯ませておいてまた逃げます。追い掛けるほうは少しでも足を弛めると一息つかれますから、休ませないように追い掛けるので大変苦しい戦いです。

これは昔も今も同じであって、ヨシュアたちは追撃するうちに時間が足りなくなってしまいました。「神様、日が暮れてしまいます。もう少し追い掛けたら敵を全滅させる事が出来ます。どうぞ神様、日をとどめて下さい。月がアヤロンの上に休んでほしい」と祈った時に、神様はその祈りに答えて、「日はとどまり、月は動かなかった」と書いてあります。これは先にも、あとにも無かったこととあります。

14節に、「これより先にも、あとにも、主がこのように人の言葉を聞きいれられた日は一日もなかった。主がイスラエルのために戦われたからである」とあります。大切なことは、「ギベオンのために戦われた」ではなく、「イスラエルのために戦われた」とあることです。そして今まで神の民に対してもなさらなかったような驚くべきことを行って、かつて偽った民を救われたのです。

私たちは今、ギベオンの民と同じようなものではないかと思いました。勿論、私たちはイスラエル民族ではありません、遠く離れた極東のモンゴル系の人種であります。しかし信仰によって、「もし彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう」と神の民として受入れられ生かされています。イスラエルを騙して契約を結んだギベオンが、彼らのうちに受け入れられ生かされたのと同じであります。しかしそんな民をもイスラエルの民に対するのと同様に、否それ以上のことをして助けて下さるのであります。何と素晴らしいことではありませんか。

本来、神の民でなかった者、長く背いていた私たちですが、イエス・キリスト

を信じて一旦神様の約束にあずからせて頂いた者は、どんなことをしてでも守って下さるのです。

◆サムエル 1:12/18、朗読。18節に、「こうして、その女は去って食事し、その顔はもはや悲しげではなくなった」とあります。

これはハンナという婦人が、神様の前に自分の心の願いを注ぎ出してお任せし、もはや悲しげな顔をしなかったという事であります。

ハンナは自分に子供が生れないことを人からそしられ、「あなたは神様からのろわれているんだろう。だから子供が生れないのだ」と言われて悲しみました。そして「神様、どうぞ私があなたからのろわれていないという証拠に、私に子供を下さい。もし男の子を下さったら、その子をあなたにおささげして一生誓いを破りません」と祈りました。

彼女の心はあまりに痛みが激しかったため、祈りは声にならず、泣きながらぶつぶつ言っているように見えました。祭司エリは、これを誤解して「酔いをさましなさい」と言いましたが、彼女は有りのままをお話しすると、先生は「すまなかった。それではあなたの願いが答えられるように」と祈って下さいました。

こうして彼女は家に帰ったのですが、今までの暗い顔ではなく、喜んで食事をして再び悲しそうな顔をしませんでした。神様は彼女の信頼に答えて男の子を下さいました。それがイスラエル王国時代の幕明けに際して、大きな御用を果たした預言者サムエルでした。そのあとハンナにはたくさんの子供が生れました。

神様に任せたら悲しくないのですが、任せないから心配をしなければなりません。信仰とは「信用する」ことであって、神様を信用すると、神様も信用して下さるのです。ある所から先は賭けなければなりません。すると神様が答えて下さるのです。神様の信用は人間の信用とは違います、現状を信用して下さるだけではなくて、将来をも変えて下さいます。

「彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう」とありますから、ここで神様の前に一切をお任せしようと思います。そして「よろしい。今からのちは私があなたの主人公であるーーーー一切の責任を持つ」と言われますと安心です。決して悲しみではなくなります。

人間が悲しくなる時は、自分中心で自分が何かをしようとするーーーするとそうならなかったらどうしようか、死んだらどうしようか、と色々思って悲しくなる訳です。

神様にお任せし、神様が主人公になって下さるならば、生きるも死ぬるも神様の手のうちです。自分のために生きるのではなく、神様がご自分のみ心を行われるために私を用いて下さるのですから、今晩死んでも悔いはありません。「神様、有難うございます。私は不忠不義のしもべでしたが、何とかしてと願って今日まで走ってまいりました。いま故郷に帰らせて、ゆっくり休ませて下さいますから有難うございます」と、地上の苦しみや悲しみの一切から解放されて天国に招かれ、大きな喜びにあずかります。

こうして、この世の人が最も恐れる死も問題でなくなってしまいます。「死人のうちからよみがえったイエス・キリスト」とあるように、私たちをも死の中から引き上げ、勝利をもって迎えて下さいます。すると「私は何とさいわいな生涯に入ったことであろうか」と感謝するのであります。

◆詩篇16篇1/16節、朗読。「主はわたしの嗣業、またわたしの杯にうくべきもの。あなたはわたしの分け前を守られる。測りなわは、わたしのために好ましい所に落ちた。まことにわたしは良い嗣業を得た」(5/6節)

これは私たちに対する素晴らしい恵みのお言葉です。嗣業とは先祖から受け継ぐ山林とか土地とか建物を言いますが、持っていると心配が多いし、取られたら無くなってしまいます。しかし神様が私たちの嗣業となって下さったならば、心配は一つもありません、奪われることもありません。

ところがもっと幸いなことがあります。それは神様が私たちを嗣業として下さることです。何と驚いたことでしょうか！神様は財産を守らなければならないような方ではありませんが、私たちのような者を、神様の最も尊い財産として守り、責任を持って下さるーーーある所には瞳を守るように守られると書いてあります。

瞳がどれ程守られているか考えて見れば分かります。石が飛んで来ればパッと体をよけます。ごみが飛んでくれば目をつぶります。ごみが入ろうとすれば眉毛があり、睫があり、瞼が閉じます。それでも目の中に入ったものは涙が洗い流し

ます。このようにして瞼は守られていますが、神様は私たちをそのように守って下さるとおっしゃるのですから、素晴らしいことです。

その生涯はこの世にない平安なものです。ヨハネ 14:27、「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな」とあります。

すべてのきっかけは主権者を受け入れることです。「どうぞこちらにお座り下さい」と自分がその座から下りて主権者を高い席にお迎えする――「神様、どうぞあなたのご支配のもとに置いて下さい。生かすも殺すも全部神様の手のもとにあります」とお仕えする時、神様が喜んで支配者となって下さいます。

◆1ペテロ5章 6/7節にかえる。私たちが「神の力強い御手の下に、自らを低くする」とはどうしたらよいのでしょうか。教会に行って、頭を下げるばかりが自分を低くする事ではありません。神様が事実全部をご支配になっておられるのですから、「命も息も環境も、健康も時間も、全部神様の手のもとにあります」と認める事が、自分を低くする事です。そうするとその瞬間から神様は私たちを受け入れて下さいます。「よし、それなら何とかして上げよう」と私たちの上にご自分のみ心を行って下さいます。

そのとき私たちの心配はなくなります。「時が来れば神はあなたがたを高くして下さる」とあります――私たちは時を知らないからはらはらしたり、「任せても大丈夫だろうか」と心配をしますが、神様は時を測っておられます。そして「今がその時だ」という時に、私たちの思う所よりも遥かにまさった事をして下さいます。

「任せてもいいが、神様がどんな事が出来るんだろうか。自分の思う通りになってくれたらいいが」などと考えていると、神様はそんな人に、ご自分の思い通りのことをしたら叱られるかも知れませんし、手を払いのけられるかも知れませんから、働く訳には行きません。

会社など一つの組織の中でも、責任ある立場にある人は、そうでない人とは違った視点から物を見ています。下の人は必ずしもそれを理解することが出来ませ

ん、「あの人はまたあんな事を言って、さっき言った事と違うじゃないか困ってしまう」などと考えますが、上の人はずっと将来の事を、また遠い所の事も、国の中ばかりでなく、世界の情勢まで考えている訳です。

人間同士の上下関係ではありません、神様はもっと違った偉大な方であります。ですから私たちがお任せするなら、神様は高い知恵をもって、「私の思いは人の思いよりも高く、わたしの道は人の道より高い」と最善をなして下さるのです。決して「自分が引き取ってやってみよう」などと考えることは出来ません。神様の前に姿勢を整え全部お任せしたいと思います。

しかしお任せすることは、私たちが人形のようになって、「神様がいいようにして下さるなら、なるようにしかならない。私は寝ておきましょう」と言うことは出来ません。私たちは人形ではなく自主の人として、神様の前に自らの力を尽くして、積極的に求めて行くのです。その中で神様が「任せよ」とおっしゃるところでお任せするーーーそういう生きた交わりをする時、神様から生かされ、（神の形に造られた）尊い人間として生きて行く事が出来るのです。

神様に対して信頼して行くから、神様もまた私たちを一個の尊い人間として取り扱って下さいます。こうして神様をいよいよ深く知って行くことが出来るのであります。

エゼキエル書36章にあったように、神様が私たちのうちに宿り、主人公となって歩かせて下さるのです。「こうしてわたしが主であることを知るようになる」とありますから、生ける神様を知ってどうして人形でおられるでしょうか。喜んで喜んで神様をほめたたえるようになります。ある人々が考えるように信仰は命の無い腑抜け（腰抜け）のようになる事ではありません。むしろ生き生きとした素晴らしい生涯です。

１ペテロ５章 6/7節、「あなたがたは、神の力強い御手の下に、自らを低くしなさい。時が来れば神はあなたがたを高くして下さるであろう。神はあなたがたをかえりみていて下さるのであるから、自分の思いわずらいを、いっさい神にゆだねるがよい」

今日、私はもう一度この方に一切を委ねて、身を低くしたいと思います。人間

の考えを持ったままでどこまで行っても、それから先は分かりません。飛び込まなければならないのであります。人間の恋愛関係でもそうでしょう。いくらデートを繰り返しても、ある所から先は分かりませんから、「何が出ても仕方がない、これから先は信用して飛び込むほかはない」という事になります。

ある所を飛び越えてパチッと任せるからスパークが起ります。雷が何十万ボルトの電圧を持って、繋がっていない所を飛びこえて放電を起しますから、素晴らしい事が起ります。木の上に落ちれば真っ二つに裂けてしまいます。そんな力で神様が私たちの内に働いて下さるなら、どんな恐るべき事が起るか分かりません。それは到底私たちの考えることも出来ないものであります。

新春のテレビ番組で、「もう一つの宇宙／人体」という画像を見ました。私たちが神様から命を与えられているという事がどんなに恐るべきことであるか、ある人々は、「不思議だな、良く出来ているなあ」と言うだけですが、そこには神様の手が明らかに見えます。そんな素晴らしい知恵と力をもって私たちを支えて下さっているのに、どうして「そんな事は信じられない」と言うことが出来るでしょうか。私たちは決して偶然に出来たものではありません。力ある方の大きな知恵とご意志によって、命を保たれているのです。

ですから安心して、「あなたのお言葉に従って今、あなたに全権をお任せします。どうぞあなたのみ心を行って下さい。あなたの栄光を現して下さい、あなたが神である事を現して下さい」とお任せしたいと思います。

私たちの周りを見れば様々な困難が渦巻いていますが、神様に向かって姿勢を整え、お任せするならば、それを乗り越えて行く事が出来ます。同じものを見ても、それまでとは違った目が開かれます。神様がすべての者をご支配になって、私の責任を持って下さる――人間が何か細かい事が出来るようになったというなら、まして神様はどれほど偉大なことをして下さるだろうかと、一つ一つが望みとなり、力となります。平安のもとになります。

先ず神様に注目して、このお方に自分をお任せして、神様から責任を持って頂く者になりたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。

（1989.1.4 戸畑教会、新年聖会１１）

第十二章

聖霊を受けよ
（孤児とはしない）

【聖霊を満たして新しい使命に生かす】　１４９

【一つの事実、一つの命令】　１５０

【信者となったとき聖霊を受けたか】　１５１

【異邦人に救の保証を】　１５２

【贈物を頂いたらどうするか】　１５４

【孤児どころか御霊が内住】　１５５

【信仰によって信仰を持つ】　１５６

【すっかり分かったから頂きましょう】　１５７

【従う者に賜う聖霊】　１５８

【人から人にバトンを渡す？】　１５８

【この者は死んでいる】　１５９

【あんたなんかに働いてもらわんでいい】　１６０

【死ぬ為に与えられる聖霊】　１６０

「そう言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった、『聖霊を受けよ。あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう」（ヨハネ20:22/23）

◆「その日、すなわち、一週の初めの日の夕方」とあります。イエス様は３日前の金曜日午前９時ごろ十字架にかけられ、午後３時には息絶えられました、間も無く取り下ろされて墓に葬られました。ユダヤの地方では洞穴葬であります。（体に薬を塗って）ぐるぐると布を巻いて、岩に掘った穴に収め、入り口に大きな石で蓋をしました。

その夜と、次の夜が過ぎて日曜日の朝早く、婦人たちがイエス様の体に薬を塗ろうと、悲しみながら墓に行って見ると、その前に、大きな地震が起って石が転がっていました。そこにはイエス様の体は無く、天使が「どうして、あなたがたは生きたかたを、死人の中に尋ねているのか」と甦りの事実を告げられました。

各福音書によって、色々な記事がありますが、先ずマグダラのマリヤに会われたと記されています。その後、多くの人々にご自分の生きている事を現されて、最後には 500人以上の人々の見ている目の前で天に昇られました。これは使徒行伝１章に記されています。

冒頭にありました「その日」とは、イエス様がよみがえられたその日の夕方のことであります。弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのおる所の戸を閉めきっていました。それはイエス・キリストを十字架につけた人たちが、勝ち誇った勢いに乗って、次は弟子たちも捕まえて殺してしまうだろうと思ったからです。

すると戸を閉め切った中に、イエス様が入って来られて、手と脇とを彼らにお見せになり、「安かれ」と言われました。

弟子たちはそれを見て喜びました。３日前、十字架につけられて無残にも殺されてしまったイエス様――自分たちは「最後まで従います」と言いながら、皆ちりぢりに逃げてしまったのですから、恥ずかしい気持で一杯でしょう。それに対してイエス様は、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」と言って、彼らに息を吹きかけ、「聖霊を受けよ、あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく

罪は、そのまま残るであろう」と力（権威）を与えて新しい使命にお遣わしになりました。

丁度その時、トマスは何かの用事で出掛けていました。トマスが帰って来て、その場の異様な雰囲気を怪しみ、聞いてみると、イエス様がお出でになったということ――トマスは「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」と言いました。

８日目に、再びイエス様が来られました。何も申しあげないうちに、トマスに向かって、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れて見なさい。信じない者にならないで、信じる者になりなりなさい」と言われますと、トマスは「ああ、わが主よ、申し訳ございません」とお答えしました。つまり彼は信じたのです。その時、イエス様が「見ないで信ずる者は、さいわいである」とおっしゃいました。

これを見るとイエス様の御旨は、萎縮していた弟子たちに平安を与え、力を与えて新しい使命を授ける事であったと分かります。

この世の中では、良いものを選んで、更に磨きをかけて役立つものにしようと考えますが、イエス様は逆に、こんな弱い弟子たちを選んで、上から賜物を満たして、彼らを遣わそうとされました。

エペソ人への手紙５章19節に、「よろしく御霊に満たさるべし」（文語元訳）とあります。御霊は聖霊のことで、神様御自身のご性質を受けなさいと言われている訳です。世の中では冗談に「あの人は神様のような人だ」とか、「私は神様じゃないんだから」などと言いますが、冗談ではなくて、実際に私たちのような者の内に、万物の造り主である方が、ご自分のご性質を注いで、私たちを神様の代理者として遣わして下さる――そのような驚くべき事が行われるのです。それは特別な人だけではなく、私たちすべての者に対して開いておられる御旨です。

◆使徒行伝 1:4/5、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」

イエス様はよみがえられてから、ご自分が生きている事を数々の確かな証拠によってお示しになり、40日に亙って度々彼らに現れ、また御国の事を語られました。これはイエス様がお示しになった一つの事実です。

また、それと共にただ一つのご命令をお与えになりました。それは「父なる神様が約束されたように、あなたがたは間もなく聖霊によってバプテスマを授けられるのだから、エルサレムを離れずにこれを待ちなさい」と言うものでした。

聖霊のバプテスマとは、内も外も聖霊に満たされることであります。神様は私たちに対してご自分のすべてを注がれるーーー自分の気持を知ってほしいと言う程度ではありません。自分の性質に与かってほしいと言ってもまだ足りません、ご自分を全部を注いで、その命によって私たちを直接生かそうというのが神様のみ心です。

弟子たちはそのあと、ご命令に従ってエルサレムの二階座敷で 120名ばかりの人と共に祈って待ち望んでいました。やがて五旬節（イエス様が甦られてから50日目）の日が来て、彼らは約束の聖霊に満たされ、それから使徒行伝が綴られて行った訳です。

聖霊に満たされた弟子たちは、自分の意志によってではなく、誰かとの協議によってでもなく、それぞれの主人公となって下さった一人の方のご意志によって、使命を果たして行きました。人物も場所も環境もばらばらでしたが、完璧な神様のみ心が行われて行きました。

使徒行伝は28章までありますが、そののちも多くの聖徒たちによって書き続けられています。当教会でも「私の使徒行伝」という名前で私たちの歩みが記録されています。それはこの所から始まった訳です。

◆使徒行伝19章 1/7節、朗読。「『あなたがたは、信仰にはいった時に、聖霊を受けたのか』と尋ねたところ、『いいえ、聖霊なるものがあることさえ、聞いたことがありません』と答えた」（使徒行伝19:2)

パウロがエペソ教会に行った時に、そこである弟子たちに出会ってこう質問しました。それは、神様のみ心は、従う者が聖霊に満たされ、御旨にかなうように生きることですから、このように聞いた訳です。すると「いや、聖霊なんて聞い

たこともありません」と言います。それはエペソの教会が、パウロのあと、水のバプテスマしか知らない人によって指導されていたからです。

そこでパウロは、「ヨハネの施したのは、悔い改めのバプテスマであって、それによって自分のあとに来る方、すなわちイエス様を信じなければならないと教えたのだ――その名によって救を与えられ、聖霊のバプテスマを受けなければならない。それによってあなたがたが本当に神様に従うことが出来るのだ」と語りました。そこで人々は主イエス・キリストの名によってバプテスマを受けました。パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が彼らの上に下り、異言を語り預言を初めました。

「聖霊は何かむずかしいもので、私たちとは関係がない」と思う人があります。私もそうでしたが、実はむずかしいものではありません。人間の知識によらず、信仰体験によらず、単純に「イエス・キリストが死人の中から甦って（天に帰られた）、その名によって聖霊を注がれる」と受ける時に、どんな人でも神様から御霊を満たされ、力を与えられ、新しい命に生かされるのであります。

【異邦人に救の保証を】

◆使徒行伝10章 34/48節、朗読。「『預言者たちもみな、イエスを信じる者はことごとく、その名によって罪のゆるしが受けられると、あかしをしています』。ペテロがこれらの言葉をまだ語り終えないうちに、それを聞いていたみんなの人たちに聖霊がくだった」（使徒行伝10:43/44）

これは初めて異邦人に救が与えられた時の記録です。ペテロはそこから少し離れた町のある家に宿っていました。お昼ごろ屋上でお祈りしていると、空から大きな風呂敷のようなものが、4隅を吊るされて下りてくるのが見えました。その中には色々な生き物が入っています。地上の4つ足のもの、這うもの、また空の鳥などでした。

彼は丁度空腹で、何か食べたいと思っていたところ、声が聞こえてきました。「ペテロよ、立ってそれらを屠って食べなさい」と。ペテロが見ると旧約聖書（レビ記）に記された汚れた獣が含まれていますので、彼は「いやそれは出来ません。私は今までに汚れたものは食べたことがありません」とお答えすると、また声がして、「神が清めたものを清くないなどと言ってはならない」と言われて、

大きな風呂敷は引き上げられました。このような事が繰り返し３度ありました。

ペテロがこれは何のことかと思っていると、丁度その家の階下で人が来たような様子、「私たちはカイザリヤのコルネリオという百卒長の部下ですが、２日前、私共の主人が神様の御使から、『ペテロさんを招いてお話を聞くように』と言われたので、私たちが遣わされて来ました」と言います。

御霊が「あの人たちは私が寄越したのである。ためらわないで彼らと一緒に出掛けるがよい」と言われましたので、ペテロは翌日立って彼らと一緒にカイザリヤに向かい、更に次の日に到着しました。

彼らは待ち構えていて大変な歓待を致します。異邦人（神様を知らない人たち）と言われていましたが、大変敬虔な人であって、「私たちは、主があなたにお告げになった事を残らず聞こうとして、みなみ前にまかり出ています」と言います。

足下にひれ伏して拝する彼らを引き起こして、「私も同じ人間です。お立ちなさい」と言って、ペテロは口を開きました。彼はあの幻に見た大きな風呂敷の意味が分かりましたから、「神様は人を偏り見ない方で、神を敬い義を行う者はどの国民でも受け入れて下さることが分かりました。人々が十字架につけて殺したイエス様を、神様は３日目によみがえらせ、確かな保証を与えて下さいました。イエス様は生者と死者との審判者として神に定められた方であって、その名によってことごとく罪のゆるしが受けられるのです」と話し終わらないうちに、神様は彼らに聖霊を満たされました。

私たちはこのコルネリオに当て嵌まる訳です。私たちはイスラエル民族ではありません。神様は「イエス・キリストにあって救が異邦人に及び、かつ信仰によって約束の聖霊を受ける」（ガラテヤ3:14）と言われていますが、このお話はまさしく私たちの為に書かれている訳です。

どのような国民であっても、イエス・キリストの名によって罪の許しが受けられ、その名によって聖霊に満たされるーーーそれを単純に受け入れた者に対して、事実、聖霊を満たして下さるのです。このとき彼らは勿論信者ではありませんから、水のバプテスマを受けていなかった訳ですが、神様が先ず聖霊のバプテスマを施されましたから、ペテロは言いました。「神様がこの人たちに、私たちと同

じように聖霊をお与えになったからには、どうして水のバプテスマを授ける事を拒むことが出来ようか」と同行の先生たちにバプテスマを授けるように命じました。

聖霊に満たされる事は決してむずかしいことではありません。ある人は、「それは預言者、伝道者、王様、祭司だけに賜わったのであって、私たちとは関係がない」と思いますが、そうではありません。むしろ異邦人である私たちを選んで、イエス・キリストという道筋に従い、「信仰によって」聖霊に満たそうとしておられる――これが神様のみ心であるとはっきり教えられたのです。

◆ヨハネ14章 25/27節、「助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう」（26節）

イエス様は私たちの為に十字架にかかり、死んで葬られ、死人の中から甦って下さいました。その名によって私たちに聖霊が遣わされるのです。「さあ、受け取りなさい」と下さるのです。

聖霊に満たされることは、むずかしいことでも、特別なことでもありません。ある人は聖霊に満たされるとおかしな状態、つまり「神がかり」のような精神状態になって、まともな生活が出来なくなるのではないか――と考えますが、心配はいりません。

分からないものはいくら考えても分かりません。ある所に「求める者に良いものを賜わらないことがあろうか」と言われ、聖霊は一番良いものであると言われています。

「永遠の命」とは、最も勝ったものについて表現の仕方がないので、そう言われているのですが、聖霊も同じでしょう。ほかに説明のしようがありません。人が常識をもって聞いても分かりません。ですから「最もまさったものである」と言われ、「名によって遣わされるものだ」とおっしゃるほかはないのです。

私たちが人から贈り物を頂く時に、どうするでしょうか。「ちょっと待って下さい」と封を開いて見て、「ああ、こんなものはいりませんからお返しします」と言う人はありません。厚意をもって、「これを差し上げます」と言われれば、

【贈物を頂いたらどうするか】

「有難うございます。いつも心をかけて下さって、有難うございます」と大いに感謝して頂いて帰ります。開いて見ると、「これは素晴らしい、自分たちの考えた物よりはるかに素晴らしい、こんな立派な物を下さって有難いことだ」ということになります。更に、実際に使ってみる、あるいは味わってみると、「これは見ただけでは分からなかった、何とおいしいものだろうか。これはどこのものだろうか」と感謝が溢れて来ます。

聖霊の賜物について、一番大きな間違いは、自分がそれを知らないうちに拒絶することであります。信仰関係の本を読んでいますと、聖霊について非常に及び腰の記述が見られます。「そんな怪しげなものは、なるべく触れたくない」という本がたくさんあります。有名神学者の本にも、「あまりそういう事は深入りしないほうがよい。昔からなかなかそれはむずかしいものだった。脱線した人もたくさんいるから」という訳です。

逆に、何もかも分かったように人の言葉で説明しようとする本もありますが、どちらも間違いです。神様が「イエス・キリストの名によって遣わす」とおっしゃるものを、「有難うございます。最も勝ったものを下さって有難うございます」と感謝して頂戴すると、あとからその素晴らしさが分かって来るものです。

それが信仰の賜物であって、私たちが「はい」とお受けすれば、どんな人に対してもご自分の名によって聖霊を遣わし、生涯を新しくして下さるのです。

◆ヨハネ14章 18/19節、「わたしはあなたがを捨てて孤児とはしない。あなたがたのところに帰って来る。もうしばらくしたら、世はもはやわたしを見なくなるだろう。しかし、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからである」とあります。

これは最後の晩餐の席でイエス様がなさった御説教の1節です。弟子たちは厳かな時が近付いている事を感じて、非常に恐れていました。自分たちの杖とも柱とも頼むイエス様がいなくなってしまうのではないか――十字架につけられて殺されるらしい。私たちは一体どうなるのだろうか――と思った彼らは、「先生、どこにいらっしゃるのですか」と取りすがりました。

イエス様は「わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない――」「この世の

人は真理の御霊を見ることはできないが、あなたがたはそれを知っている」「あなたがたはわたしを見る。わたしが生きるので、あなたがたも生きるーーーつまり父が私の名によって遣わされる助け主、真理の御霊によって、あなたがたは孤児とはされない。私の姿は見えなくなるが、目に見えない御霊があなたがたの内に宿って、常に共にいて下さる」と約束されました。

20節に、「わたしはわたしの父におり、あなたがたはわたしにおり、また、わたしがあなたがたにおるーーー」とありますが、これは相互内住関係です。イエス様が父なる神様におり、私たちがイエス様におり、また、イエス様が私たちの内にいて下さるーーー私は丸を三つ並べて互に矢印を差し込み、この関係を絵に描きました。

イエス様の言葉を心に抱いて守る者は、イエス様から愛され、父から愛され、（父子）神様自身がその人に己をあらわすーーーと言われているのは、御霊のことです。無条件でイエス様の戒めを心に抱くーーーつまり「イエス様は私の為に十字架にかかって死んで下さいました。イエス様の名により、その道筋に従って私たちに御霊を満たして下さいますから、有難うございます」とお言葉に従うとスッと聖霊を満たして下さいます。

ですから、私たちが聖霊に満たされることは、私たちが完全に従い、自分に死んだという保証になります。ある人は「私はむくろ（死骸）です。私は灰です」と言いました。人間が灰になってしまえば、自分を突っ張って動き回ることはありません。神様に対して完全に死に切って従うと、その保証として、イエス様の名による御霊を注ぎ、御霊が主人公となって私たちを生かして下さいます。「わたしが生きるので、あなたがたも生きる」とはそういう生涯です。

【信仰によって信仰を持つ】

◆1コリント12章 1/3節、朗読。「神の霊によって語る者はだれも『イエスはのろわれよ』とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言うことができない」(1コリント12:3)

私たちが「本当にイエス・キリストは私の生ける主である」と告白する為には、聖霊によらなければなりません。ところが「私は聖霊を知りませんから告白する事ができません」と言うことになるかも知れません。しかし「信仰から信仰に進

ませる」と言われているのはここであって、私たちが「イエス様を主であると信じさせて下さい」と告白しようとするーーー自分では信じられないが、「神様がそうおっしゃるから、（私の為に死んで甦って下さった方と）信じさせて下さい。信じます！」と踏み込んで行くと、すぐ力を与え聖霊を与えて、告白をさせて下さいます。

これが「信仰から出て、信仰に進ませる」という循環です。ある人は「信仰によって信仰を持つ」などと言いますが、「自分は長い間、信仰を持って来ましたからよく分かっています。だからーーー」というのではなく、「分からないが、どうぞ信じさせて下さい」と飛び込むのです。するとスッと助けて下さいます。

◆マルコ９章 20/29節、朗読。「『できますれば、わたしどもをあわれんでお助けください』。イエスは彼に言われた、『もしできれば、と言うのか。信ずる者には、どんな事でもできる』。その子の父親はすぐ叫んで言った、『信じます。不信仰なわたしを、お助けください』」（マルコ9:22/24）

癲癇の子供を持った父親が、弟子たちの所に行ってお願いしましたが、病気は癒されませんでした。そこで山から下りてこられたイエス様の所に連れてまいりました。イエス様は「いつ頃からこんなになったのか」と問われましたので、「実は幼い時からさかんに水の中、火の中に倒れて死にそうになりました。できますれば、どうぞあわれんでお助け下さい」とお願いしました。

私たちは人に何かを頼む時、「よろしかったら、どうぞひとつお願いします」というような事を言いますが、イエス様はそれを聞いて、「もしできれば、と言うのかーーー信ずる者にはどんな事でもできる」とおっしゃいました。そこで父親は「信じます。不信仰なわたしを、お助けください。信じたいのですが信仰がありません。しかし何としても信じさせて下さい」と飛び込みました。そのとき子供は、倒れて死んだ状態となり、かえって悪くなったように見えましたが（イエス様から手を取って起され）スカッと癒されました。

私たちが神様のお言葉に従って、聖霊を受けるのは、「すっかり分かりました。それでは頂きましょうか」と言うようなものではありません。私たちは足らない者、不信仰な者、未経験な者、信仰の浅い者、ついこの間まで全く関係がなかっ

【すっかり分かったから頂きましょう】

た者かも知れませんが、そういう者であっても、信仰をもって「私はこんな者です。私の手柄によって頂くものではありません。イエス様のいさおにより、その御名によって下さるとおっしゃいますから、こんな者でも頂けると信じます。有難うございます」と飛び込んで行くと、事実、私たちのうちに新しい事を行って下さいます。

「義人は信仰によって生くべし」とありますが、何が神様にとってお喜びであるか、行いが出来て賛美が上手に歌えて、聖書を素早く開く事ができ、お祈りが上手にできる――それが神様のお喜びではなくて、「信仰によって生きる」ことであります。「私はこんな者で、信仰がありませんが、あなたがそうおっしゃるから有難うございます。どうぞ信じさせて下さい」と進み出る――それが神様にとって一番のお喜びであります。

【従う者に賜う聖霊】

◆ヨハネ20:22/23にかえる。私たちに対して今晩、「お前は信仰が足りないから駄目だ」「こちらは経験が足りないから駄目」、「しかしこの人はだいぶよろしいからそれでは上げようか」というものではありません。

私たちは自分を見れば、弟子たちと同じように、足りない者、失敗だらけの者で、恐れおののき閉じこもって、猫に袋を被せたようにあとすざりをする者でありますが、そんな私たちに対して、「お前たちの弱さの為に私は十字架にかかり、この通り甦ったのである――私の名によって聖霊を受けなさい。私はあなたがたを生かそう。孤児とはしない――あなたがたはわたしが生きるので、生きることができるのだ」と言って私たちを生かして下さるのです。

【人から人にバトンを渡す?】

使徒行伝5章32節に、「神がご自身に従う者に賜わった聖霊」とあります。単純に「はい、そうですか、有難うございます」と従うことによって与えられるものであって、決して人に頼んで戴けるものでもなく、何か自分が大きな事をしたから戴けるというものでもありません。

◆列王紀下2章9/14節、朗読。「『どうぞ、あなたの霊の二つの分をわたしに継がせてください』。エリヤは言った、『あなたはむずかしい事を求める。あなたがもし、わたしが取られて、あなたを離れるのを見るならば、そのようになるであろう。しかし見ないならば、そのようにはならない』」（列王紀下2:9/10）

これは有名な預言者エリヤと、その後継者エリシャの物語です。エリシャが神様の霊の賜物を受けたのは、エリヤの後継者としてエリヤのポケットにあるものを、「さあ、上げよう」と渡してもらったのではありません。リレー競技で前の走者があとの走者にバトンを渡すようなものではありませんでした。

エリシャが「どうぞあなたの霊の二つの分を受け継がせて下さい」と求めた時、エリヤは「むずかしい事を求める――それはわたしには出来ないことだ。それは神様が直接あなたに与えて下さる。だからあなたがもし、わたしがあなたから離れて取られるのを見るならば、あなたの願い通りになるが、もしそれを見なければならない」と言いました。間も無く火の馬と火の車があらわれて、二人の間を隔て、エリヤはつむじ風に乗って天にのぼて行くのが見えました。エリシャは「ああ、先生」と叫びましたが、そのまま見えなくなりました。

エリヤが離れて行くのを見ましたから、その言葉どおり、彼はエリヤの内に注がれた力を、注がれて帰りました。帰途、エリヤの外套を巻いてヨルダン川をたたき、これを分けて渡ったとあります。これによって彼は神様の力を受けて帰った事が分かります。

人が人に跡を継がせる――人の手から手に直接は出来ないものであります。エリシャはエリヤ先生が自分から離れて行くのを見て、神様に目がとまりました。こうして彼は――この時はイエス様のご誕生より前ですが――その名（道）に従って神様から霊の賜物を注がれた訳です。

◆あくまでも道筋は、「死人のうちからよみがえったイエス・キリストの名」だけであって、このイエス・キリストと共に死んだならば、また彼と共に生かされる――イエス・キリストのお名前に対して、自分が全く灰となって、「はい、その通りです、有難うございます」と信頼するなら、「この者は死んでおる」と言う保証として御霊を注いで下さるのです。

【この者は死んでいる】

◆ヨハネ20章22節。「彼らに息を吹きかけて仰せになった、『聖霊を受けよ』」

私たちが自分というものをあくまで持ち続けて、「そんな良いものなら、自分の為にぜひ一つ貰いたい、そうしたら色々なことができ、力も知恵も出来て神様の為に良い奉仕ができるかも知れない」と言う気持なら、決して下さいません。

【あんたなんかに働いてもらわんでいい】

昔、私たちの先輩である某先生が若いとき、聖書に「聖霊を受けよ」と書いてあるのを読み、一生懸命に聖霊を祈り求めました。「神様、どうぞ聖霊を下さい。あなたは祈ったら答えるとおっしゃったのですから、どうぞ下さい、いま下さい」と手を出してお祈りをしていたそうです。

それを見て先生が言われたのは、「あんたは何の為に聖霊を求めるのか」と言われました。その方は「それは先生、私が聖霊に満たされたら力を受け、知恵を受けて、神様の為に大いに伝道して――」と言うと、「神様はね、あんたなんかに働いて貰わんでもいいんだよ」と言われて大変ショックを受けたそうです。

その若い先生は、自分のよい願いを持って、「何とかして神様のために働きたい。だからそのために下さい」と言っていた訳ですが、神様から御覧になると、「私が働きましょう」という働きはいらない。そうではなくて、「こんな者ですが、あなたの憐れみによって生かして頂きましたから、何とかしてあなたにお仕えさせて頂きたい。この命もいりません」となると、神様は保証の御霊を与え、道を開いてくださる――事実、その若い先生はやがて神様のお言葉に全く従って、長い間よい御用をされました。

【死ぬ為に与えられる聖霊】

◆神様の前において自分に死ぬ――自分が生きようとするのではなくて何とかして死ぬ事を考える――それは自分の体を傷付ける意味ではありませんが、どうにかして神様のお言葉に従いたい、何としても多くの人の救の為に祈りたい、私が何かのひな型として用いられるならば、たとい十字架にかけられても構わない。（イエス様の十字架とは違いますから、私が死ぬこと自体は何の意味もありませんが）何とかして私に死ぬ機会を与えて下さいという気持――そうすると神様は、保証の御霊を与えて下さいます。

ですから聖霊は、生きる為に与えられるものではなくて、死ぬ為に与えられるものであると分かります。前出の若い先生のように、「自分が何とかして良い働きをする為に聖霊を下さい」ではなくて、「何とかして神様の名が崇められるように、私はどうなっても構いません」となった時に、神様の保証が与えられるのです。

パウロの生涯を見る時、彼の強さ、したたかさ、不撓不屈の信仰生涯は、感謝

に溢れほとばしり出たものでした。「そんなに熱心にしても、救とは関係がないのだ」と言われても、「分かっている。しかし私はこうしなければおられないのだ」と神様にお仕えしました。そのパウロに対して神様は保証の御霊を与えて、あのような生涯を送らせて下さいました。

「開きなおる」「覚悟する」ということがありますが、「どうせ、この地上の生涯はぐずぐず生きても大したことはない。それよりも何とかして神様に従って行きたい」と覚悟して行くと、非常に強くなります。昨年後半から年末にかけて、私は神様から恵まれた所を絵に描いて味わった訳ですが、死ぬ事を恐れなくなると、人は強くなります。

このお言葉を最後に読んで、神様のみ心に従って聖霊を受ける者となりたいと願います。

「彼らに息を吹きかけて仰せになった、『聖霊を受けよ。あなたがたがゆるす罪は、だれの罪でもゆるされ、あなたがたがゆるさずにおく罪は、そのまま残るであろう』」

私たちに「最も良いもの」を与えるとおっしゃる。それによって私共は神様と全く一つとなって、この地上の生涯を強く生きることができます。またそれによって神様を知ることができます。すべての知恵に満たされ、主がお語りになったことを思い出させて下さいます。聖書に記された様々な奥義を私共の身に当て嵌めて頂けるのです。この良い賜物を慕い求める者でありたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。　　(1989.1.4 戸畑教会、新年聖会１２)

ホラガイ

第十三章

主の恵みを味わい知れ
（ただ主に喜ばれる事を務める）

【ダビデの二つの感謝】　１６５

【神様のメニューは無限】　１６６

【あなたに何を与えようか】　１６７

【神様の側では完備されている】　１６８

【我らは常に霊食時間】　１６８

【相手を喜ばせようとすると】　１６９

【楽しみの数々】　１７０

【必ず報われる】　１７１

【今度はあなたの番だ】　１７２

【無量大数以上の世界】　１７３

【恋愛は人を美しくする】　１７３

【教会出席の知恵】　１７４

【「受けるより与える」の極致】　１７４

「主の恵みふかきことを味わい知れ、主に寄り頼む人はさいわいである」

(詩篇34:8)

【ダビデの二つの感謝】

◆詩篇34篇は、表題に「ダビデがアビメレクの前で狂ったさまをよそおい、追われて出ていったときの歌」とあります。ダビデはイスラエル王国の２代目の王様です。初代の王サウルは大変体格のすぐれた人で、群衆の中に立つと彼の肩から上が出たというぐらい背の高い人でした。神様から選ばれたはじめは謙虚でしたが、たちまち神様の戒めを守らなくなり、その為に捨てられてしまいました。彼に代って選ばれたのがダビデ王であます。

彼は預言者サムエルによって油そそがれましたが、まだ誰もその事を知らず、招かれてサウル王のそば近く仕えていました。ダビデは、神様と共にあって祝福を受けた結果、戦いに出る度に戦功を上げ、敵の巨人ゴリアテを倒して勝利のきっかけを作りました。

そこで人々が、「サウルは千を打ち殺し、ダビデは万を打ち殺す」とほめ歌ったところ、サウルは気を悪くして、ダビデの命を付け狙うようになりました。サウルはアマレク全滅の命令に違反して神様から捨てられ、しばしば彼に悪霊が臨んでいました。ダビデは琴が上手でしたから、王様の前で琴をひいて慰めていますと、突然槍を投げてダビデを刺そうとしましたので、国内にいる事が出来なくなって隣国に亡命しました。

その国の王アビメレクが、ダビデを捕らえようとしたため、彼は急に気が狂ったさまをして、門の扉を打ち叩き、涎を垂らしておかしな表情をして、辛うじて逃れることができました（サムエル記上21章）。その時の歌がこの詩篇です。

「わたしは常に主をほめまつる。そのさんびはわたしの口に絶えない」――神様は私が苦難の時――苦難と言っても次第に状況が悪化したのではなく、緊急事態であります。一瞬のうちに捕まるところだったのを、彼は懸命に演技をして、アビメレクの前から無事に逃げる事ができました。

あの緊急の時、神様に祈り求めたところ、実に不思議なことをして私を助けて下さった。神様を信頼するならば決して恥を被ることはない。この時ばかりは駄目だったという事はない。必ず信頼に答えて下さる――そう言って賛美をして

いる訳です。

この時の彼の感謝には二色あったと思います。

①そういう境遇から救われ逃れる事ができたということ。もう一つは、

②彼自身の弱さから救われたということです。神様に信頼して一筋に進んでいた人が、嘘をついたり、偽ったりした訳ですから、彼にも弱さがあったと思います。彼はそういう弱さからも救われて、立ち直ることが出来ましたーーーすべての悩みから救い出された。主の使はわたしのまわりに陣をしいて取り囲んでわたしを守られたので、私は助かったーーーそれが7節までの賛美です。

◆「主の恵みふかきことを味わい知れ、主に寄り頼む人はさいわいである」ーーーこのみ言葉を見ますと、私たちはすでに神様から恵みを備えられている事が分かります。「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリスト」この福音からすべてのものが流れ出して来ます。すべてのものはイエス・キリストの名によって与えられます。

「もし彼と共に死んだなら、また彼と共に生きる」というこの道筋に従って、すべての恵みを注がれるーーー「求める者に良きものを賜わざらんや」と聖霊の賜物を注いで、私たちを完成（同時にそれはスタートである）して下さいます。そこまで神様は備えて下さっているのです。

「果報は寝て待て」という諺がありますが、「神様、よいようにして下さい。私はこれで救われましたから、もう教会にも行かなくてもいいし、聖書も読まなくてもいい、神様が愛して下さっているのだから、これで結構です」とじっとしていればよいのかーーー決してそうではありません。

私たちが何かを味わおうとする時は、自分が何らかの決断をしなければなりません。メニューを見て、どれを選ぶか意思表示をしなければなりません。海外旅行をした人の話を聞きますと、スチュワーデスが、「お食事は何にしましょうかと注文をとりに来ます。日本人はよく「隣の人と同じでよい」とか、「何か適当に」と言いますが、すると「あなたが食べる物だから、あなたの意志を言って下さい」「コーヒーはミルクを入れるのか、入れないのか、砂糖を入れるのか、入れないのかーーー」と聞かれるそうです。

【神様のメニューは無限】

それと同じように、「主の恵みふかいことを味わい知り――主に寄り頼む」には自分の意志を表示する事が必要であると教えられたのです。味わうのは自分ですから、「これがよい」と自分が選ぶ訳です。そうすると選んだメニューが具体化して来ます。

神様のメニューは無限にあります。献立の数も少なくありませんが、調理法なり、食べ方なりが非常にたくさんあると思います。それぞれに応じて報いを与えて下さるのです。今朝も神様は、「どれにするか」と呼び掛けておられると思います。意志表示がなければ拒絶の回答とみられるかも知れません。

◆列王紀上3:3/9 。ソロモンはダビデのあとを継いで王となりました。彼が多くの犠牲をささげて神様を礼拝をしたその晩に、夢で「あなたに何を与えようか、求めなさい」と告げられました。

もし私たちが今、このように言われたならば、何を求めるでしょうか。私たちは一体、何を最も尊いものとし、緊急に必要としているか、誰から報われるのが最も確かと思っているのか――自分のすべてを問われる訳です。

ソロモンも問われて、サッと答えた訳ではないでしょう。色々と考えたに違いありませんが、その結果、「聞きわける心を与えて下さい――自分は王として立てられ、たくさんの民を預かって神様の御旨にかなうようにこの国を導く為に、神様の知恵、つまり善悪を判断する知恵の心が必要ですから、どうぞこれを与えて下さい」と求めました。その時に神様は大変喜んで、「あなたは自分のために長命を求めず、自分のために富を求めず、敵の命をも求めず、ただ私に従うために訴えを聞きわける知恵を求めたので、わたしはあなたに賢い英明な心を与える。またあなたが求めなかったもの、つまり富と誉をもあなたに与える」と言われました。事実ソロモンは大変栄え、知恵に満ちた王様となりました。植物の学名の中に、命名者として彼の名前が付いているものが多いそうであります。背の高いレバノンの香柏（杉）から、石の上に生えている苔に至るまで、細かく研究し分類して命名したと言われます。

伝道の書や箴言を読みますと、ソロモンの与えられた知恵に驚きますが、それは彼がただ一つ、知恵を求めたことによって神様から喜ばれた結果でした。

私たちが神様の前にどのような決断をするか――いま私たちはメニューを選ぶように求められていると思います。

【神様の側では完備されている】

◆詩篇34篇にかえる。私たちが難行苦行し、熱心に働き、大きな献げ物をしてその見返りとして神様から何か良いものを頂く――初詣でに行った人が、おさいせんとして1万円札の束を投げ込む、その代り10億円ぐらい儲かりますように――そういう計算をしているかも知れません。

私たちが良い行いをし熱心に励んで、「さすがにあの人は立派なクリスチャンだ」と言われる――すると神様が私たちに恵みを施して下さるのか――決してそうではありません。熱心・努力とは関係なく、神様のほうでは完全にすべてのものを整えておられます。「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリスト」この中に全部が含まれています。また道筋も備えられています。それは「もし彼と共に死んだなら、彼と共に生きるであろう」という道筋です。

若松の頓田貯水池には 900万トンか1000万トンぐらいの水を溜めています。そこから私共の家庭まで色々な経路でパイプが繋がっています。それを市の水道局が責任を持って管理している訳です。水漏れがあればふさいだり、パイプを交換したりしています。

私たちはそれを利用するだけです。蛇口を捻れば水が出ますから、様々の目的に使ってメーターが回っただけお金を払います。電気にしてもガスにしても同じでしょう。

神様の恵みはこれと同じだと思います。神様は福音のうちに全部備えられ、道筋も完備されました。「さあ」と備えられている訳です。

【我らは常に霊食時間】

◆電灯の差し込み口に電気器具を持って行って差し込めば動く、あるいは発熱する、あるいは音が聞こえる――私たちの選んだことが出来ます。水道の蛇口も捻れば幾らでも水が出て来ますが、ひねらないでおいて、「水道施設が完備しているなら出て来たらよかろうに」といくら待っていても出て来ません。あくまでこちらの意志と、それに伴う行為が必要であります。

同じように神様は今年私たちのために、すべての恵みの富とその道筋を完備し

て、あとは私たちの意志に従って恵みを味わうようにと求めておられます。

昔イスラエルの民は、神様から「乳と蜜の流れる豊な国（カナン）を、あなたがたに与えるから入って行きなさい」と命じられました。ですから、その土地全部を自分たちのものに出来ることは確かなのですが、そこへ入って具体的に一つ一つの町を自分の足で踏み取り、一鍬一鍬山地を開墾して自分の土地として行かなければならなかった訳です。

これはこんにちの私たちの霊的な生活でも同じです。神様はすべての恵みを備えて、この宝の蔵からあらゆるものを流して下さるのですから、私たちが一つ一つ問題に当る度に、「神様、こういうことです。ただあなたを仰ぎ望んでいますから、豊かに恵んで味わわせて下さい」と信頼して行きますと、確かにその一つ一つを味わう事が出来ます。

新聞写真を拡大して見ますと、たくさんの点が並んでいます。空白の所もあり、小さな点の並んでいる所、大きな点の並んでいる所、隣り同士の点が繋がっている所もあります。こうして全体を見るとこまやかな表情まで見える訳です。

それと同じように、私たちが神様の言葉に従って一つ一つメニューを消化して行くと、食物を味わうように、神様を知らせて頂けるのです。口で説明は出来なくても、肌をもって神様を知ることができます。

ダビデが「主はわたしが求めたとき、たしかに答えられた」と歌っているように、すべての中から助け出される方、どんな時にも共にいて、私たちの周りに陣をしいて守って下さる方だと、疑うことができないように知らせて頂ける訳です。

私の今日のメモには「霊食時間」と書いてあります。食堂に行く食事時間があるように、私たちは常に霊食時間であります。色々な問題にぶつかって、そこで神様を知らせて頂くのであります。

◆「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい」とありますが、「主を思う」とは、具体的にはどうすることだろうかと待ち望んだ時に、一つの鍵を与えられました。「主を思う」とは、ただぼんやり考えて忘れない事ではありませんでした。

私たちが挨拶をする時、「どうも、どうも」と言います。外国人が日本語を学

【相手を喜ばせようとすると】

ぶ時に、「『どうも』とはどんな意味ですか、便利な言葉だがあまり意味がないのではないか」と言います。「ぼんやり考えて忘れてはいない」のは挨拶における「どうも」のようなものではないでしょうか。無視してはいないが別にどうと言うことはない、「やあやあ」と言うぐらいでしょう。

長い間会わなかったある人に、何年ぶりかに会ったところ、「私は教会のことを忘れてはいません」と言われましたが、それは主を思うこととは違います。「主を思う」とは、進んで主を喜ばせようと努めることであると教えられました

人間関係においても、相手を喜ばせようとすれば、その関係はどこまでも発展してまいります。どうしたら相手を喜ばせる事が出来るか、こうしようか、ああしようか、こうしたらあの人がこういう反応を示した、では今度はこうしよう、という訳です。

恋人同士がお互に相手を喜ばせようとすると、色々なことを考えるでしょう。相手を喜ばすと自分も喜びます。そしてお互を知ることができるようになり、最後には一つになって生活を共にするようになります。相手を喜ばすことがなければ決してこういうことは起りません。知らん顔をしてお互にそっぽを向いている者同士が結婚したら、これは不幸であります。

神様を思うのはそれと同じように、私たちが何とかして主をお喜ばせようとするーーー様々な問題に当って、主は何を期待しておられるだろうか、どうしたら主をお喜ばせする事が出来るだろうかと心を砕くーーーこれは心配・苦労ではなく大変楽しいことであります。

【楽しみの数々】

◆詩篇63篇、「わたしが床の上であなたを思いだし、夜のふけるままにあなたを深く思うとき、わたしの魂は髄とあぶらとをもってもてなされるように飽き足り、わたしの口は喜びのくちびるをもってあなたをほめたたえる」とあります。骨の髄というのは私は食べた事がありませんが、大変おいしいそうです。油も食べ過ぎるとカロリーの点で具合が悪いでしょうが、濃厚な味わいに心身共に満足します。

詩篇 104篇、「主を思うわが思いは、楽しみ深かからん。われ主によりて喜ぶべし」（文語訳）とあります。楽しみが深くて尽きない、考えるだけでニコニコ

して、笑いだすような嬉しい状況でしょう。

２コリント５章、「肉体を宿としているにしても、それから離れているにしても、ただ主に喜ばれる者となるのが、心からの願いである」とあります。彼（パウロ）は人間的には困難であっても、心は喜びに満ち溢れていました。

エペソ５章には、「主に喜ばれるものがなんであるかを、わきまえ知りなさい」とあります。

ヘブル12章には、「感謝しつつ、恐れかしこみ、神に喜ばれるように、仕えていこう」とあります。

１ペテロ２章には、「神によろこばれる霊のいけにえを、ささげなさい」とあります。

◆２テモテ２章 1/7節、朗読。４節に、「兵役に服している者は、日常生活の事に煩わされてはいない。ただ、兵を募った司令官を喜ばせようと努める」とあります。私たちがキリスト・イエスの兵卒として召されたならば、日常生活の事に煩わされることはないと言われます。

私も軍隊生活を暫く体験しましたが、政府が全部みてくれる訳です。自分で働いて収入を得て、軍隊生活をしようとする人はありません。

ですから兵役に服している者は、日常生活の事に煩わされないで、ただ兵を募った司令官を喜ばせる――大きな期待をもって自分を召し、配置に付け、訓練をして下さる方に喜ばれるようにと努める訳です。

私たちを召して下さった司令官はイエス・キリストです。その方に喜ばれる為にはどうしたらよいかを努める、それが兵士の仕事であります。

５節に、「競技をするにしても、規定に従って競技をしなければ、栄冠は得られない」とありますが、すべての競技にはルールがありますから、自分勝手に、「私はこんなに熱心にやったのだから」と言っても無理なことです。どんなに熱心でも反則をすれば、相手に得点を与えることになります。規定に従って競技をし、監督・コーチの指示に従って自分を殺す――そのようにイエス様に従順に従って行くと必ず報いられます。

「労苦をする農夫が、だれよりも先に、生産物の分配にあずかるべきである」

【必ず報われる】

とあります。これは神様の公平です。自ら選んで、「私はこのようにします」と言うならば、必ずそれに対して報いが与えられます。他の人にも与えられるかも知れませんが、労苦した農夫が先ず分配を受けるーーーそのように、私たちが自分を召して下さった方に喜ばれるように努めるなら、生活の一切は備えられる上に、恵みを加えられるーーーこれは大変な利益であります。

◆私たちがイエス様から喜ばれるように努めて行くなら、日常生活のことに煩わされないばかりか、豊な報いを与えて下さいます。ですから、目覚めて自発的に行動する者でありたいと願います。

【今度はあなたの番だ】

ある人に対して期待をするーーーこちらから言わないうちに、自発的に気付いてほしいと思う。他人に対してそう感じたならば、私はすぐに立場を変えて、自分は神様に対してどうであろうか、あの子供のように訳が分からないでいるのではないだろうか、と反省する訳です。

神様から何か言わたとき、「ああ、そうですか。それでは神様の好きなようにして下さい」と言う態度でいたら、これは大変です。神様は全部を備えた上で、「さあ、今度はあなたの番だ」と待っていらっしゃるからです。

碁とか将棋で、相手が一つ打てば、こちらも一つ打ちます。それを２回続けて打つと反則負けになるのではないでしょうか。私たちは、神様が筋道をすっかり備えられて、「さあ、お前の番だ」と言われている時に、進んでお答えしなかったら、ゲームは止まってしまいます。相手が打っても、打たなければついには反則負けになるかも知れません。

コンピューターは、例えば、「良かったらＹを押して下さい。いけなかったらＮを押して下さい。０を押したら元の画面に戻ります。下向きの矢印を押したら次のメニューが出て来ます」などと画面に表示されますから、それに従って何かを押さなければなりません。「コンピューターは有能だから、ひとりでに何かしてくれないか」と何日待っても仕事はしてくれません。こちらがメニューを選んで実行を指示しますと、指示通りの仕事をすませて、また次の指示を待つ訳です。

神様はコンピューターではなく、遥かにまさった偉大な恵みを内に秘めておられますが、まず目の前に示されたメニューを選ばなければ、決してその次は開か

れないのです。

◆最近、医療技術や、電子顕微鏡技術が発達した事によって、人体内部の細かい組織を動いたまま見る事が出来るようになりました。先日、胃壁にあるたくさんの小さな井戸から透明な胃液が勢いよく湧き出して来るさまを見ました。強い酸によって食物は溶かされるが、自分の胃壁は溶けないという巧妙な仕組み――それらを見聞きしますと、私たちの体は何と素晴らしいものかと思いました。

80万倍の電子顕微鏡というと、人間は随分すごいと思いますが、神様の微細な組織は、更に何桁も（何十桁も？）細かいものがある訳で、私たちが観察したり考えたりできる範囲は小さなものだと思います。

大きな世界――百億光年の宇宙の果などと言っても、神様の偉大なスケールに比べれば小さなものに過ぎません。

0の数で言えば、一人の人間の細胞は50兆～60兆個、地球の全人口は50億人ですから、全人類のすべての細胞の数を書けば、0の数が21個ぐらいになります。宇宙の果ては百億光年と言っても、20数個ぐらいのものでしょう。しかし神様の世界はもっともっと素晴らしいものがあります。中国の数の呼びかたで、無量大数というのがありますが、これは0が68です。

しかし、神様はもっと大きな世界まで、あるいはもっと小さな世界（つまり分母に0が68以上）まで、全部ご支配になっていらっしゃる方であります。

そして私たちに対して、「さあ、お前はどうするのか」と言われています。私たちがぼんやりしているなら、どんな所にさまようでしょうか、どんな人間として生きて行くでしょうか、恐ろしいような気持が致します。

◆詩篇34篇8節、「主の恵みふかきことを味わい知れ」――良心が目覚め、恵みに感じるならば、何とかこのお方に喜ばれるようにと願うことは当然ですが、そうしていくと色々な知恵が与えられます。

恋愛関係は人を美しくすると言いますが、何を送ったら喜ばれるだろうか、どうしてあげたら喜ばれるだろうかと努めているうちに、次第に相手を知り、愛が深まって行きます。同じように、神様がこんなに素晴らしい恵みを備えて下さって、惜しみなく与えて下さるのですから、私もこの方をお喜ばせしたい、と願っ

【無量大数以上の世界】

【恋愛は人を美しくする】

て行きますと様々な知恵が与えられます。

【教会出席の知恵】

◆教会出席についてある人は、「自分はさまたげが多くて、他の人より特に出にくい」と言われます。確かに事情が色々お有りでしょうから、どうしても出来ない事もあれば、工夫の余地のある事もあると思います。

だいぶ前のことですが、あるドイツ人宣教師が、小さい子供を連れて教会に出席しますが、礼拝中非常におとなしくしています。聞いてみると、「礼拝の前にしっかり遊ばせて疲れさせる。そして教会に座らせると、ホッとして礼拝中じっとしている」ということでした。これは一つの知恵です。

またある人は、日曜の朝、町内の清掃があるとき、自治会の役員に頼んで振替えてもらうと言います。つまり「人の嫌がる事でもよい、ある部分について、他の日に責任をもってやりますから、日曜の朝は免除して下さい」という訳です。

あるいは家庭サービスにしても、他の時に特別サービスをプラスして、「その代りに、ここの部分で自由時間を下さい」というふうにする人もあります。

また会社の付き合いでも、たとえば「日曜日の行事は参加できない。しかし祭日なら出来るだけのことをしましょう」とか、またそう言えるように、日常から他人の為にサービスするなど色々と知恵を働かす余地があるのではないかと教えられたのであります。

【「受けるより与える」の極致】

◆何とかしてと主を愛し、主に答えようとする気持があれば、知恵は与えられるのではないでしょうか。たとえ今は無理でも、切に願って行くなら、遂には道が開かれるのではないでしょうか。極端に言うと、相手を喜ばせようとする所からすべてのことが出て来るのではないかと思います。

イエス様は、「受けるよりも、与えるほうがさいわいである」と言われました自分のことだけ考える生活は狭いものであって、いずれ行き詰まります。何かを腹一杯積み蓄えても決して幸福にはならないでしょう。しかし、人の為に自分を大いに費やして行くーーーパウロは自分に逆う人ーーー「パウロは使徒ではないなどという人たちの為にも、大いに財を費やし、身を尽くすと言っています。

また、「私が神様から受ける報いとは、無代価で福音を提供することである」と言っています。これは「受けるより、与えるほうがさいわい」の極致でしょう

私の為に命を捨てて下さった方を何としてもお喜ばせしたい――という一点から、あらゆるものが溢れて来るのではないでしょうか。

「主の恵みふかきことを味わい知れ」――このお方をお喜ばせするという一点にしぼって努め励み、神様の恵み深きことを味わい知る者でありたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。　　(1989.1.5 戸畑教会、新年聖会１３)

オオイトカケ

チマキボラ

第十四章

神の奥義キリスト
（栄光の望み／宝の蔵）

【神様がご自身を開こうとされなければ】　１７９

【朝の光のように己を現わされる】　１８０

【愛に答える心を望まれる】　１８１

【知らない事が多いと知る】　１８２

【神の性質にあずかる者となる】　１８３

【栄光のひな型／今という切り口】　１８３

【個人の救から家族の救へ】　１８４

【神様が行えば無から有どころか】　１８４

【ハレルヤの大合唱】　１８５

「その言の奥義は、代々にわたってこの世から隠されていたが、今や神の聖徒たちに明らかにされたのである。神は彼らに、異邦人の受くべきこの奥義が、いかに栄光に富んだものであるかを、知らせようとされたのである。この奥義は、あなたがたのうちにいますキリストであり、栄光の望みである」

(コロサイ1:26/27)

◆福音とは何であるかを教える為に、今年、神様は右の標語、「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい――これがわたしの福音である」をお与えくださいました。これは私たちにとって喜びのおとずれであると同時に、神様にとっても福音であります。それは私たちがこの道に従って、救われ恵まれる事は、神様のご目的であるからです。

中央のお言葉、「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう」――イエス様が父なる神様に全く従われたように、私たちが自分を捨て心を切り替えて従って行くと、イエス様が死人の中からよみがえらされたように、私たちもあらゆる困難、絶望の中から力をもって救い上げられるという事です。

毎回、集会に出る度に、自分が乏しい者、力のない者であることを悟らせられますが、その中で、「イエス・キリストを思っていなさい」と呼び掛けられてハッと仰ぐと、大きな貯水池の水が激しく迸しるように注がれて、「そうです、この神様が注いで下さる。この道によって私を生かし、皆さんも生かして下さるから大丈夫」と立たせて頂くのです。この奥義は、実に栄光に富んだものであります。

エペソ 1:15/23、朗読。「あなたがたが神に召されていだいている望みがどんなものであるか、聖徒たちがつぐべき神の国がいかに栄光に富んだものであるか、また、神の力強い活動によって働く力が、わたしたち信じる者にとっていかに絶大なものであるかを、あなたがたが知るに至るように」とあります。神様が私たちに与えて下さっている栄光の望みが、どんなに素晴らしいものであるか――これを何とかして知らせようと願っておられる訳です。

良いことを知ったならば、少しでも早く人に知らせようと願うのは当然でしょう。神様は何とかして私たちの目が明らかになるように、そしてこの絶大な恵みの一つ一つを知るに至るようにと願っておられる訳です。

神様の最も願っておられる事は、ご自分を知ってほしいということです。人間同士でも、人を誤解することは不幸なことですが、神様はことに自分を正しく知ってほしいと願っておられますから、求める者には必ずご自分を開いて下さいます。

隠そうとしている人から聞き出す事は大変なことです。検察官が被疑者を取り調べようとしても、被疑者は質問されない事は答えないし、質問されても何とかして隠そうとします。それを証拠を上げ矛盾を突き、あるいは他の被疑者の供述と付き合わせたりしながら、偽りを潰して行く。すると「実はーーー」と事実が明らかになって行きます。

自分の身に覚えがあるのに、言わないで隠し、多くの人手を煩わすのは迷惑千万ですが、もし神様が私たちに向かってご自分を閉ざし、軽々しく知らせない、小出にしか知らせない、全体のことは開かないーーーと言われれば、私たちは一生かかっても神様を知ることは出来ないでしょう。

◆しかしさいわいなことに、神様は私たちにご自分を開こうとされています。ちょっと出ているテープの端を引っ張ると、ずるずると中から引き出されるように、人間の大脳の中には様々な記憶が入っていて、ちょっとしたきっかけから、「そう言えばあの時あんなことがあったな」「あのときはあの人が来ていた。あの人からこんなものを貰った。その時私はここで転んだ」などと次々に思い出して来ます。そのように、私たちが少し神様の戒めを心に保つと、進んでご自分を現して下さる方です。

ホセア６章 1/6節、朗読。「わたしたちは主を知ろう、せつに主を知ることを求めよう。主はあしたの光のように必ず現れいで、冬の雨のように、わたしたちに臨み、春の雨のように地を潤されるーーーわたしはいつくしみを喜び、犠牲を喜ばない。燔祭よりもむしろ神を知ることを喜ぶ」とあります。

これはイスラエルの民に対する神様の熱いみ思いです。何とかして自分を知っ

【朝の光のように己を現わされる】

てほしい、「こちらを向きなさい」と言われている訳です。

ある父親は、子供が生れて嬉しくてたまらない。しかし会社から帰って来ると眠っていて笑顔を見せてくれません。朝出勤する前にもまだ寝ていますから、交わりが出来ない。そこで寝ている子供の頬をつねって泣かせては喜んだと言うことです。

私たちがあまり神様に対して知らん顔をしていますと、神様は私たちを愛するあまり、「何とか私を知ってほしい」と引っ掻いたり、あるいは打ち叩いたりされるかも知れません、これは勿論憎いからではありません。その証拠に、「二日目には生かし、三日目に立たせる」と書いてあります。

ですから、そんな方に対して少しでも心を向けて、「そうですか、そんなお心を知らずに申し訳ありませんでした。どうぞあなたを知らせて下さい」と求めるならば、「あしたの光のように必ず現れ出る」、つまり朝の光が必ず昇って来るように、ご自分を現されると言うのです。

神様が私たちにご自分を開いて下さる時、冬の雨が地中にしっかりと蓄えられるように、また春の雨が地を潤してものを生えさせ、芽を出させて下さるように臨んで下さるのです。

◆神様がそれ程に期待されているのに、イスラエルはなかなか真実に待ち望むことをしませんでした。神様に対する愛が少し芽生えたかと思うと、朝露が日の出と共にたちまち消えるように、あるいは草の葉にたまった露が少し大きくなると転げ落ちてしまうようであると言われます。「あなたがたの愛はあしたの雲のごとく、また、たちまち消える露のようなものである」――あったかと思うと無くなってしまう。

ですから神様は、「何とかして私に帰ってほしい」と預言者を遣わして警告を与え、ある時は切り倒したり、打ち殺したりされる――それは自分に心を向けてほしいという願いから出たことであります。

ある人々は旧約聖書の礼拝規定を読んで、神様に喜ばれるささげ物は、大きな獣であって、それに手の届かない人は小さな獣でも、山鳩でも麦粉のパンでもやむを得ない――従って大きなささげ物をささげる人が神様に喜ばれると思いま

すが、神様はそうではないとおっしゃるのです。

神様が本当にお喜びになるのは、「犠牲ではなくて、いつくしみである」と言われます。見える形、大きなささげ物、たくさんの献金、長年の奉仕ではなくて、それよりも、いつくしみ、つまり神様を知って、「こんなに私を愛して下さる。私は何としてもあなたにお従いさせて頂きたい」と自発的に自分の内から燃え上がって来る慈しみを喜ばれる、というのです。「熱い私の気持を知って、熱くなって私に答えてほしい」ということです。

人間同士でも本気でない人と交渉を進めることは出来ません。神様に対して私たちが本心になって、「神様をお喜ばせする為に、どうしたらよいだろうか。それが出来るなら私はどうなっても構わない。この命をぐずぐず生きても仕方がない。一日でもよいから神様とスパークするように生きて、喜び迎えられて、天国に帰りたい」となれば、どんなに大きなことが行われるか分かりません。

中国の思想家孔子は、「あしたに道を聞かば、夕べに死すとも可なり」と申しました。彼は恐らくそれが出来なかったのではないかと思いますが、私共は、「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい」とおっしゃる神様のお言葉に従って、彼を仰ぎ、彼と共に死に、彼と共に生きる時、熱い心が通い合う永遠の命の生涯を送らせて下さるのです。その一日は、どんな長い命よりも素晴らしいものです。

【知らない事が多いと知る】

◆昔ある伝道集会に来た人が、先生のお話を聞いて、「私はそんなことはよく知っています。良い成績で○○大学を出ていますから」と言われたそうです。T先生は「そのくらいの知恵は、天国に掃いて捨てるほどあります」と言われたので、相手の人は驚いたと言うことです。T先生は昔の小学校の4年ぐらいしか行っていませんが、真の知識とは、人間の学問とは違うものです。

1コリント8章に、「もし人が、自分は何か知っていると思うなら、その人は、知らなければならないほどの事すら、まだ知っていない」とあります。本当の知識は、自分が知らなければならない事がたくさんある、分からないことばかりであると悟る人であります。

「宇宙」について（省略）。「もう一つの宇宙／人体」について（省略）。

◆2ペテロ1:2/4 、朗読。「神とわたしたちの主イエスとを知ることによって、恵みと平安とが、あなたがたに豊かに加わるように。いのちと信心とにかかわるすべてのことは、主イエスの神聖な力によって、わたしたちに与えられている。それは、ご自身の栄光と徳とによって、わたしたちを召されたかたを知る知識によるのである――」とあります。

【神の性質にあずかる者となる】

私たちがイエス様を知るとは、「ああ、イエス様ってそんな方か。イエス様のことが分かって良かった」と喜ぶようなものではありません。神様の栄光の富を知って、感心するだけではありません。イエス様を知ることによって、恵みと平安とが実際に私たちの上に豊かに加えられるものです。そのうち最も大きな約束は、「世にある欲のために滅びることを免れ、神の性質にあずかる者となる」ことです。

ある人々は、「人間は猿から進化したもので、どうせ動物である」と言います。たしかに肉体は動物と同じものを持っていますし、食べなければ生きる事が出来ませんが、実際に神様のご性質にあずかる者となるのです。驚いたことではありませんか。

【栄光のひな型／今という切り口】

◆自分中心で行き詰まって、滅びる生活ではなく、神様のご性質にあずからせて下さる――やがて具体的に栄光の姿に変えて御国に迎えられる――これは現実に私たちに与えられるものであって、私たちはすでにそういう生涯を歩き始めている者です。

この壁にスライドプロジェクターをおく棚があり、向かいの壁（の白い所）をスクリーンとして、日曜学校の際にスライドを写します。スライドの光を途中で遮ると、そこに小さな画像が出来ます。そのままではピントが合っていませんが、途中どこで切っても同じものが見えます。

神様が私たちに与えて下さる栄光の望み、それはやがての日、私たちを具体的に神様の姿にかたどらせて下さるものですが、いまそれを切ると、そこに全く同じもの（少しぼんやりしたもの）が写ります。そのように私たちはやがての時の栄光のひな型として、この地上を生きている者であります。熱い神様のみ思いが私たちに注がれて、やがて明らかにあずかるべき栄光に、今すでにあずからせて

下さっている訳です。

「キリストの形があなたがたのうちに出来るまでは、わたしはまたもや、あなたがたのために産みの苦しみをする」と言われています。イエス様は私たちを忍び、やがて栄光の形に変えられる者として整えて下さっているのです。

◆私たちは自分の姿を見る時、「神様の栄光を映すなんてとんでもない」と思いますが、しばらく前の自分の姿を映して比べる事が出来るならば、随分変えられていると思います。それは自分で気が付かなくても、人から分かる事ではないでしょうか。

【個人の救から家族の救へ】

私は第二次大戦の終ったあと、すぐには帰郷せず、最後に乗っていた軍艦を改造して、復員輸送を続けました。その後、郷里でしばらく農業の手伝いをしていましたが、公職追放令にかかって、なかなか思うような就職も出来ません。そういう中で、小さい時に日曜学校に行った事を思い出して、教会を求めて救われました。私が救われてしばらくしてから父が、「太郎は変った」と信仰が復活しました。母もそうです。

こうして父は昭和33年、既に手おくれだった胃癌の手術をしたあと、翌年亡くなりましたが、その時、最後に「このような者もイエス・キリストの血のゆえに、義なる者として受け入れられるから感謝します」と明らかにあかしして、天に帰りました。

また母も「その来たる時は誰か耐え得んや、誰か立ち得んや」（マラキ３章）とあかしして、四国聖会で大変恵まれたあと亡くなりました。

【神様が行えば無から有どころか】

私は自分がよい恰好して見せようとした訳ではありません。終戦後の苦しい生活の中で一時は随分荒れていましたが、そんな中から、「イエス・キリスト――この福音」と言われている方に目をとめて、すっかり変えられてしまったのです。自分が計画した訳でもなく、見せようとした訳でもありませんが、私を見ていた父が変ってしまったのです。弟も救われました。

◆私たちは神様のご性質にあずかるなんてとんでもないと思いますが、神様は事実私たちのうちに、そのようなわざを行っておられます。

神様は無から有をお造りになる事が出来る方ですから、「する」と言われたら

必ずそう成るのです。かつての私たちは信仰の影も形もなかったのに、神様はご自分の言葉に従い、約束に従って導いて下さいました。ですから、これから後も必ず救を全うして下さると望むことが出来ます。その最後は、神様の栄光をほめたたえる事です。

エペソ１章には、「こうしてあなたがたは、神の栄光をほめたたえる者となるためである」と書いてあります。神様が直接に恵んで下さったのですから、「主はほむべきかな。万軍の主、あなたの御名はほむべきかな。私は何と汚い者であったか。しかし、このお方が祭壇の火をもって私を清めて下さいました――こんな者ですが、神様の栄光の為にお遣わし下さるなら、どうぞ私をお遣わし下さい」と申しあげるほかはありません。（イザヤ書６章。イザヤの体験、参照）。

◆詩篇 146篇 1/2節「主をほめたたえよ。わが魂よ、主をほめたたえよ。わたしは生けるかぎりは主をほめたたえ、ながらえる間は、わが神をほめうたおう」とあります。

147篇１節「主をほめたたえよ。われらの神をほめうたうことはよいことである。主は恵みふかい。さんびはふさわしいことである」

148篇１節「主をほめたたえよ。もろもろの天から主をほめたたえよ。もろもろの高き所で主をほめたたえよ」

149篇１節「主をほめたたえよ。主にむかって新しい歌をうたえ。聖徒のつどいで、主の誉を歌え」

150篇１節「主をほめたたえよ。その聖所で神をほめたたえよ。その力のあらわれる大空で主をほめたたえよ」とあります。

これらはハレルヤ詩篇と言われます。詩篇全体が多くの人々の魂の記録であり、賛美あり、感謝あり、失望あり、涙あり、神様のわざがあり、そして最後はこのハレルヤの大合唱で終っています。私たちの信仰生活の結末もその通りであると思います。神様の前に、「われもなく、世もなく、ただ主のみいます。主をほめたたえよ、主こそまことにほめたたえらるべきお方」――これは黙示録の最後、天国の礼拝に繋がっています。

黙示録19章 6ロ/8節、「ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる

【ハレルヤの大合唱】

支配者であられる。わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである。彼女は、光り輝く、汚れのない麻布の衣を着ることを許された。この麻布は、聖徒たちの正しい行いである」ーーーこのような天国の礼拝に加えられて神様を賛美する、これは私たちにとって信仰生活の結末です。先程のスライドの例でお話ししましたように、今という面で切って、それぞれの場所で賛美をさせて下さる。一つの問題に当って、苦しみ、泣き、失望、戸惑うかも知れませんが、このイエス様を覚えて、命の道に導かれて、その恵み深いことを味わい知ると、「ああ、賛美、感謝、ハレルヤ」と感謝をして行く。この連続です。何と素晴らしいことでしょうか。

聖会もその通りであって、最後に神様は、ハレルヤの大合唱をもって聖会を締め括ろうとしておられます。あと１回、今晩の集会がありますが、神様は私共に、最後に警戒すべき事について、一言知らせて下さるように思いますが、まだどのようになるかははっきり分かりません。私たちは今年の歩みをここで整えられ、新しい生涯に踏み出させて頂けるーーーこれは神様の素晴らしい恵みの総括であると感謝しています。

コロサイ1:27、「神は彼らに、異邦人の受くべきこの奥義が、いかに栄光に富んだものであるかを、知らせようとされたのである。この奥義は、あなたがたのうちにいますキリストであり、栄光の望みである」ーーー私たちは今年、このお方を主としてお迎えし、仰がせて頂きました。この方が私たちのうちに宿って、永遠の命に歩ませるとおっしゃいますから、一歩一歩恵みふかいことを味わい知って、主をほめたたえる生涯でありたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。

（1989.1.5 戸畑教会、新年聖会１４）

第十五章

御霊を消すな
（喜び、祈り、感謝の生涯）

【イエス様に対する誓約】 １８９
【御霊を消すな、彼を否むな】 １９０
【あかし】 １９０
〈キリストをいつも思って行こう〉 １９０
〈自分のほうが避けていた〉 １９０
〈まだ自分で生きている部分が多かった〉 １９１
〈主の恵み深いことを味わい知った〉 １９１
〈やはり同じお言葉！〉 １９１
〈生ける神の出現！〉 １９１
〈はっきり受け止める姿勢を問われました〉 １９２
〈戸畑教会の父なる神様は優しい〉 １９２
〈戸畑の地が好きになりました〉 １９３
〈救を成就せねば落ち着かない方〉 １９３
〈道筋／先ず上からのご熱心〉 １９４
〈救はこの方以外にない〉 １９４

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられる事である。御霊を消してはいけない。預言を軽んじてはならない。すべてのものを識別して、良いものを守り、あらゆる種類の悪から遠ざかりなさい」(1テサロニケ5:16/22)

◆今年の聖会において、「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう」とみ言葉を与えられました。そのすぐ後に、12節、「もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるであろう。もし彼を否むなら、彼もわたしたちを否むであろう」とあります。

神様の恵みのお言葉は大変素晴らしいものですが、一面ではもろ刃の剣であって、喜び感謝して受けるならば、恵みとして働いて下さいますが、もし恵みに感ずる優しい心がなくなりますと、神様はお喜びになりません。だからと言って刑罰を加える方ではありませんが、冷やかな心になることは私たちにとって不幸であります。ですから常に柔らかい心で神様に触れていかなければならないと教えられた訳です。

教会の結婚式では神様の前で誓約をしますが、男性に対しては、「あなたは神の定めに従いて、この女を娶り、病める時も健やかなる時も、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを守り、その命の限り他のものによらず、ただこの女のみに添う事を願うか」と問われます。また女性には、「あなたはこの男に嫁ぎ、これに従い、これに仕え、これを愛し、これを敬い、これを守り、その命の限り他のものによらず、ただこの男のみに添う事を願うか」と問われます。

私たちが天国に召された時は、御使のように「娶らず嫁がず」と言われていますから、この世のいわゆる二世の契りとは違います。その夫婦の契りですら、このように神様の前に誓うならば、私たちがイエス様の花嫁として、永遠の契りを結ぶにはいかに誓うべきでしょうか。

私は前記の男性に対する誓約文と女性に対する誓約文を合せて、次のような誓約文を作りました。神様に対する誓約――「汝は神の定めに従いて、この主に従い、これを愛し、病める時も、健やかなる時もこれを愛し、これに従い、これに仕え、これを恐れ、これを敬い、これを慰め、これを守り、その命の限り他の

ものによらず、ただこの主のみに添う事を願うか」―――これが私の問われた誓約の言葉です。

今晩、私は「はい、神様が永遠の救主となり、私の内に宿って、生涯の責任を持って下さるのですから、私はこのように誓わせて頂きたい」と願った訳です。

【御霊を消すな、彼を否むな】

◆1テサロニケ 5:16/19、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに求めておられることである。御霊を消してはいけない」

私共はいつも「イエス・キリストを思う」こと、日常の生活においては、「常に喜び、絶えず祈り、すべてのことを感謝する」―――これが私たちに対して求められている事です。私共の責任者となって下さる方の御霊を消さないで、柔らかく従っていくなら、こういう生涯を全うさせて下さいます。

「御霊を消すな」―――「彼を否むな」と言われています。いつでも柔らかい心となって、主が私に何を期待していらっしゃるか、何を求めていらっしゃるか、どうしたらこの主をお喜ばせする事が出来るだろうか、という気持を持って、常に喜び、祈り、感謝する生涯でありたいと願います。ご一緒にお祈りしましょう。

【あかし】〈キリストをいつも思って行こう〉〈自分のほうが避けていた〉

◆＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝あかし＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

〈A兄〉普段、神様を知らない人に囲まれており、2日からは初売りになりますので、元旦には何としても各集会に出席したいと願っていました。「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい」とお言葉を与えられて、キリストをいつも思っていかなければならないと心に決めました。皆さんのお祈りを感謝します。

〈B姉〉前から戸畑教会に来たいと願っていました。出席できて感謝です。

〈C兄〉神様はいつも門戸を開いて下さっているのに、私のほうが避けていたと思います。いつもこの方を思い、耳を傾けて行かなければならないと教えられました。

〈D姉〉教会一杯の臨在の中で、神様の栄光を拝し感謝でした。神様のご愛に迫られました。「聖霊を受けよ」とのお言葉を頂き、愚かな者も、あわれみで信

〈まだ自分で生きている部分が多かった〉〈主の恵み深いことを味わい知った〉〈やはり同じお言葉！〉〈生ける神の出現！〉

じさせて頂きました。やがて栄光の姿に変えて下さる事を感謝します。「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう」とありました。今までそのつもりでしたが、まだまだ自分で生活している部分や時間が多かったと思います。〇〇一家の為のお祈りを感謝します。

〈E兄〉昨年10月に父が足を患い、入院手術しました。教会の皆様にお祈りを頂いた事を感謝いたします。そんな中で母が信仰によって守られている姿を見て改めて主の恵み深いことを味わい知りました。今年は、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思って、従って行きたいと願っています。

〈F姉〉聖会の前に、ローマ人への手紙1章2節、「この福音は、神が、預言者たちにより、聖書の中で、あらかじめ約束されたものであって、御子に関するものである。御子は、肉によればダビデの子孫から生れ、聖なる霊によれば、死人からの復活により、御力をもって神の御子と定められた。これがわたしたちの主イエス・キリストである」（ローマ1:2/4)を強く迫られていましたが、戸畑教会に出席して同じ御言葉である事に驚いています。神様から強く迫られました。素晴らしいと思います。今はただこの方を仰ぎ望むだけです。三つのお言葉がみな繋がっているように思いました。

〈G姉〉ひとりの姉妹に対して、いかになすべきか、不安定な気持の中から神様におすがりしました。「どうぞ神様、お答え下さい」と日曜礼拝に出席する道々、心の中で祈りながら歩きました。1時間もたたないうちに神様ははっきりとお答えを下さいました。それは「自分を愛するように、隣り人を愛しなさい」というものでした。迷いから覚め、あまりのお答えの早さに、神様と直接お話をさせて頂いたような気がいたしました。このお言葉は世間一般でよく耳にするものですが、私には実感となって神様が迫って下さいました。まさに生ける神の出現でした。私はその時、涙をもって神様に感謝を申しあげ、すがすがしい気持で帰宅した時の感動を、今も忘れることが出来ません。この事を通して教えられた事は、自分中心を捨て、肉欲を離れないと神様の御言葉に忠実にお従い出来ないという事でした。まだ目の見えない私ですので、理解が不十分ですが、イエス様の十字架のお恵みと、これら二つの戒めが信仰の根源になるのではないかと思える

のです。

〈H兄〉一言ですが、主にある交わりに加えて頂いたことを感謝します。

〈はっきり受け止める姿勢を問われました〉〈戸畑教会の父なる神様は優しい〉

〈I姉〉①はかり知る事の出来ないご愛と、死人のうちからよみがえられた主によって生かされている事を思い、恐れがなくなりました。大きな力を与えられました。②昨年は色々な問題がありましたが、その都度力を与えられ確信となりました。③お恵みを受ける姿勢を学びました。はっきり受け止める姿勢を神様から問われていると思いました。

〈J兄〉神様に対するイメージが変りました。今まではこわい神様と思っていましたが、万軍の主の熱心をもって、私の為に心配して下さっていると知りました。悔い改めるならば、火で精錬された金、白い衣、目薬を下さる――神様の熱心で救のわざを行って下さるから感謝です。イエス様に従うなら、自ら私たちと共に歩いて下さるから感謝。2テモテ2:11を、今年の初めに与えられて感謝です。有難うございました。

〈再びJ兄〉昨日、先生が「神様を信じて、飛び込んで全部任せてしまったら不安がない」と言われました。僕は18歳の時、○○○○大学に行って2回生のとき、新約聖書学を勉強しました。その後、△△教団に出ていました。そこでは自分がいつも追い掛けられているようで、平安がありませんでした。「こうあらねばならぬ」と自分の悪い所が目について、「教会生活はこんなにつらいものか」と思いました。戸畑教会に出席して、「先生の思っている父なる神様はやさしいなあ」と思いました。僕の思っている神様はちょっと間違ったらパチッと打ち叩くような怖いイメージでした。昨年あたりは逃げ惑っていました。「サタンにやられて」と言えば言い訳のようですが、神様はサタンに勝てる方です。昨日、先生のメッセージを聞いて、帰ってお祈りしている時、本当に平安がやって来ました。自分の生涯を全部お委ねする時、神様のお与えになる事がベストである、「神様は愛なり」と信じて、イエス様に付いて行こうと思いました。昨日から大変嬉しく平安です。アメリカのフォークソングで、「イエス様と共に歩いていたら、苦しい中で足跡が一つになった――それはイエス様が背負って下さったから」というものがありましたが、そのように信じて行こうと思います。

〈戸畑の地が好きになりました〉

〈K姉〉私は口下手で人前でものを言う事が苦手でした。今度の聖会で、「信仰の戦いをりっぱに戦いぬいて、永遠の命を獲得しなさい。あなたはそのために召され、多くの証人の前で、りっぱなあかしをしたのである」、このお言葉が胸に迫りました。今回このあかしをする事により、今後の信仰をちゃんとして行かなければいけないと教えられました。有難うございました。今日も帰り道、妹と「こんな素晴らしい教会に、もっとたくさんの人がいらっしゃったら本当に恵まれるのに」と話しました。私はかつて戸畑の土地が嫌で嫌で、いつ逃げ出そうかと考えていました。乗り物が嫌い、人の多い所に出るのも苦手でした。家から出る事が億劫でした。しかし、こうして恵まれて聖会に出席する事ができ、戸畑の地が好きになりました。本当に有難うございました。どうぞよろしくお願いします。

〈救を成就せねば落ち着かない方〉

〈L姉〉今年の聖会で、初めのうちはいつもの集会に出ている感じで、あまり緊張感がありませんでした。最初の年の聖会は、「わたしは義なる神、救主／わたしのほかに神はない」という素晴らしいもので、あの時の聖会が何時までも心に残っています。昨年は、「ひとり子を賜わったほどに――」、今年は、「いつも思っていなさい。これがわたしの福音――」、何か段々と柔らかくなった感じがしました。しかし、神様が柔らかくおっしゃって下さる陰にはすごい困難な戦いがあること、先生ご夫妻の戦いを思いました。聖会で心が踊ったのは、「主の恵みふかきことを味わい知れ」とお話のあった時、神様をお喜ばせするように歩むことが、いつも思っていくことだと教えられました。もう一つは、「従う者に賜う聖霊」という事です。私はいつもそう感じていましたので、ただ従って行けばと思っていましたが、今年はもうひとつ、「求める者に賜う聖霊」という事を心に刻んで頂きました。もう一つ、「たとい、不真実であっても、神は真実、いつわることができない」とのお言葉――今まで従いたいと思っても、心中もやもやする所がありましたが、こういう所まで救を成就しなければ落ち着かない方（ルツ記）で、こんな者をどこまでも完成して下さると知って感謝しました。不真実な者ですが、よろしくお願いいたします。

〈M姉〉この聖会で「道筋」という事をはっきり教えられました。昨年末頃か

〈道筋／先ず上からのご熱心〉

ら身近な人の死を通して、「死」という事を感じていました。今回の聖会で「生きる為に（自分に）死ぬ」ことを教えられました。すると神様は「生きよ、野の木のように（たくましく）育て」とおっしゃる。では私はどういう態度であるべきか。先ず上から、私たちを完成せずにおられない主のご熱心がある、それを積極的に受けねばならない。上からの神様のご熱心と、私の受ける意志、積極性があって、そこで初めて神様の力が働いて前進させ、永遠の命に導いて下さる、支配者としての使命を与えて下さる――そういう道筋を教えられました。私の使命は、多くの兄弟姉妹が救に立ち返るようにと祈る事です。一回々々の集会で教えられた点もありますが、大きな流れとしてはそういう事でした。それと今日の午後、「ハレルヤ詩篇」を与えられて、天国の礼拝に参加しているように心が踊りました。今年も主を思って行くならば大丈夫、神様を喜ばせるのに、どうしたらよいか、日々考えながら歩んで行きたいと願っています。

〈救はこの方以外にない〉

〈牧師〉聖会の為の準備は、前年の初めから行われていた訳です。絶えず神様の御旨を整理して、自分の立場を確認してきました。11月頃になって、「私に注目しなさい」「今の時を生かして用いなさい」「積極老計をせよ」「死をバネにして神様の栄光を求めよ」という御旨を学びました。それから聖会の為に御言葉を求めた時に、「救は神様以外にない」と迫られて、「ダビデの子孫として生れ、死人のうちからよみがえったイエス・キリストを、いつも思っていなさい」を与えられ、それと、歩みとして、詩篇34篇を与えられました。御言葉を与えられると、今までのことは置いて、与えられた御言葉を噛み砕いて頂くのですが、4日目あたりから信仰の戦いを感じました。人間的にはどうしても分からないところから、神様が無限に注いで、むしろ大きな事を行って下さいました。今日の午後の集会で「ハレルヤ大合唱」をもって神様が締め括って下さった事は、人間の計画によらないことで大きな感謝でした。

◆霊感賦21番、お祈り。

◆頌栄 541番、祝祷。これをもって1989年の新年聖会を終ります。

（1989.1.5　戸畑教会、新年聖会１５）

アツキガイ

基督伝道隊　戸畑教会

【沿革】　基督伝道隊は、英国人宣教師Ｂ．Ｆ．バックストン師の信仰の流れを汲むもので、1923年柘植不知人師によって設立されました。その後、福岡→八幡→戸畑と発展し、1986年 4月、当教会が設立されました。

【定期集会】

◆　日曜学校　　日曜日 8時半
◆　日曜礼拝　　日曜日10時
◆　伝道会　　日曜日19時半
◆　第一祈禱会　水曜日10時
◆　第二祈禱会　水曜日19時半
◆　金曜会　　金曜日10時
◆（禱告会）　（金曜日19時半）
◆　早天祈禱会　火～土曜日 6時
◇テレホン聖書（終日）881-1059ﾃﾝｺｸ

【不定期集会】

◆年初に新年聖会
・89年は 1月 1－5 日
・毎日10時14時19時
◆クリスマス礼拝
◆復活節礼拝など

◆聖餐式　◆洗礼式
◆結婚式　◆幼児祝福式
◆葬式　ほか

========== 【 出 版 物 】 ==========

※テレホン聖書メッセージ集（1）…（1985.6-1986.5 放送分）
※テレホン聖書メッセージ集（2）…（1986.6-1987.5 放送分）
※テレホン聖書メッセージ集（3）…（1987.6-1988.5 放送分）
※テレホン聖書メッセージ集（4）…（1988.6-1989.5 放送分）

※私の使徒行伝　(1),(2),(3)　…（1986年各集会の概要集）
※私の使徒行伝　(4),(5),(6),(7) …（1987年　〃　〃）
※私の使徒行伝　(8),(9),(10)　…（1988年　〃　〃）
※私の使徒行伝　(10)(以下続刊) …（1989年　〃　〃）

※私の仕える主は生きておられる
(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)
……（おのおの12～24回の礼拝記録を文章化）

※戸畑教会新年聖会記録
1987年版(全12回) …（ほぼ全文を文章化）
1988年版(全15回) …（　〃　〃　）
1989年版(全15回) …（　〃　〃　）

【友好教会】 北九州市／基督伝道隊本部／八幡前田教会
福岡市／基督伝道隊福岡大濠公園教会　　その他／出張伝道地

※当教会は、エホバの証人（ものみの塔）、モルモン教会、統一協会（世界基督教統一神霊協会）とは一切関係がありません。

伊規須　太郎（いきす・たろう）
1926年（大正15年）福岡に生まれる
基督伝道隊戸畑教会　牧師

１９８９年新年聖会記録
1989年 4月 1日発行

著　者　　伊規須　太郎
発行所　　基督伝道隊戸畑教会出版部
〒804 北九州市戸畑区小芝2-1-13
Tel　093(882)9266
「テレホン聖書」093(881)1059テンゴク